彷徨いし者達

小春十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彷徨いし者達

【Ｎコード】
Ｎ１６７６Ｘ

【作者名】
小春十三

【あらすじ】
ドラゴンクエスト?の二次創作です。
ＰＩＰＩ掲載分を修正して投稿しております。
１８禁表現部分はノクターンにて掲載します。
物語冒頭からラスト、プラスアルファまで書く予定です。
魔法、世界観はオリジナル要素が強くなっております。
原作の雰囲気を壊されるのが嫌な方はお控えください。

1　船旅

幼年編　その一　オラクルベリーの草原で……。

地平線の向こうまで続く青い海。果てしなく、どこまでも続く海。
サントフィリップ号は今日も行く。
昨日の日の入りの頃に微かに見え始めた大地がその存在感を示し、旅の終わりをかもす。
「……島？　陸が見えた。父さんに知らせなきゃ！」
甲板で一人絵を描いていた少年――リョカ・ハイヴァニアは父の居る部屋を目指す。
まだ遠くに見えた陸。目的地であるオラクルベリーの港へは、もう二日はかかるだろう。けれど、代わり映えのしない海原を見続けていたリョカは、それを誰かに伝えたくてしょうがなかった。
「しーま、しーま！」
夢中で走るリョカは、船室へ向かうドアを開けようとしたとき、不意にそれが開き、逆に転んでしまう。
「あら、そんなところで寝てると風邪ひくわよ？」
ドアを開けて立っていたのはデボラ・エド・ゴルドスミス。
つり気味の目は眼前で寝そべるリョカをつまらないモノと見下しており、形の良い鼻はフンと不機嫌に鳴る。アップさせている赤みがかったブラウンの髪が風になびき、それが彼女の瞳をくすぐると、それを煩そうに手で払う。
リョカより二つ上の彼女は、彼にとって苦手な存在だ。この一ヶ月にわたる船旅において、最初こそ互いにぎこちない間柄であったが、今では小間使いのようにこき使われている。
「リョカ、暇だったら厨房からレモンティーをもらってきて頂戴。こう暑いと喉が渇いてしょうがないわ……」
「う、うん。わかったよ、デボラさん……、でも水は貴重だから、

あんまり……」

船において水分は貴重なもの。今回の船旅では時化に遭うことこそなかったのだが、これまでのリョカの経験からすれば考えられず、それを差し引いても気分次第で嗜好品を求める彼女はワガママといえる。

「聞こえなかった？　あたしはレモンティーを持ってきてと言ったんだけど？」

「は、はい！」

しかし、なぜか彼女に逆らうことが出来ないリョカは、それに頷いてしまう。

そのことを父、パパスに相談したことのだが、笑って「男の子は女の子に優しくするものだ」と取り合っぶくれなかった。

――もう、デボラさんって本当にワガママなんだから……。

リョカはそんなことを思いながらも忠実に厨房へと向かう。

「あら、リョカさん。ごきげんよう」

すると今度は別の声に呼びとめられる。

「あ、フローラさん……」

振り返ると丁度客室から出てきたらしく、リョカと同い年の女の子がいた。

リョカを見るとにっこり微笑む彼女はフローラ・レイク・ゴルドスミス。デボラの妹だ。だが、妹というにはこの二人、似ても似つかない。

一番最初に目に付くのは髪だろう。デボラが赤なら、彼女は青。青みがかった黒髪は腰まで届き、一体この船旅でどう手入れをしているのかわからないほどさらさら具合を保っている。

そして瞳。二重の瞼は優しそうなカーブを描いており、笑うたびに何かふんわりしたものが溢れてきそうで、とても暖かな気持ちにさせてくれる。

「今デボラさんにレモンティーをもらってくるように頼まれて、急いでるからまた後でね！」

「まあ、姉さんたらまた……。それなら、私もまいりますわ。ちょうど喉が渇いていましたし……」
やはり二人は姉妹とわかるのが、こういうところ。おおよそ世間とずれている感覚だろう。
「う、うん。けど、あんまり船では無駄にお水を……」
無駄とわかっていながらも船で気にすべき項目を告げようとするリョカ。
「お水を……なんですか？」
にこりと微笑むフローラの可愛らしさに負け、リョカは彼女の先にたって厨房を目指した。
既にこのとき、リョカは陸地が見えたことなど忘れていて……。

＊＊

「ちょっと！　どうして言わないのよ！　陸が見えたらすぐに教えなさいって言ったでしょ？　もう、小魚みたいな顔して全然役に立たないんだから！」
甲板に戻ったリョカを出迎えるデボラの第一声はそれだった。
彼女はリョカの持ってきたレモンティーを奪うと、遠慮なく喉を潤す。
「うふふふふ……」
フローラはそれを見て何か思い気に笑っている。最初の頃はフローラも仲裁に入ってくれたのだが、最近はリョカとデボラのやり取りを見て笑うことが多い。
リョカとしては優しそうな彼女にまで笑われるという屈辱に耐えなければならず、不満ばかり募っていく。
「陸が見えたの！　どこどこ！？」
背後では他の乗船客がぞろぞろとやってくる。リョカ達が陸の見えたほうを指差すと、皆「おお……」と感慨深いため息をついていた。

上品なスーツ、ドレスに身を包んだ紳士淑女坦は皆、これまでの船旅の不自由などを口々に笑い合っていた。

サントフィリップ号は世界でも有数の豪華客船。

これまでリョカが父と旅をしてきたときに乗った船の二倍から三倍近くあり、積載量も乗数的に増えていた。そのおかげで普段は我慢しているリョカも今回の船旅ばかりも、それほど遠慮なく乾きを潤せた。

当然客室にも違いがある。今までは木のベッドに薄い布団か寝袋で寝ていたわけだが、この船ではスプリング付きのベッドであり、布団もふわふわで重さを感じられないもの。

あまりの豪勢な造りに、二人はわざわざ乗組員室と換えてもらったほどだ。

それに船員も荒くれ者ばかりではなく、教育がされた者のみ。これまでは厨房に行けばコックに「つまみ食いをするな」とお玉をもって追い掛け回されたのに、この船では味見をさせてもらえるほどだ。

実のところをいうと、異質なのはリョカとパパスの方。では、何故彼らがサントフィリップ号に乗れたかといえば、それは気まぐれな大富豪のせい。

「おお、ようやく陸地が見えたか！」

遅れてやってきた額の禿げ上がった大柄な男性も明るい声を上げる。窮屈なパンツと金糸の刺繍の施された燕尾服、ごつごつとした指輪をいくつも付け、いかにをお金持ちという存在だった。

「父さん、見て！　もう直ぐオラクルベリーよ」

「うんうん、もうすぐだな」

デボラの嬉しそうな声に彼――ルドマン・ゴルドスミスは頷く。

「こいつが見つけたのよ。なのに全然教えてくれないんだから、この小魚」

デボラは畏まっているリョカの肩をトンと押す。

「そうか、リョカ君か。絵を描いていたのかい？」

ルドマンは笑顔でリョカの頭を撫でるので、彼もうんと頷く。
「そうだ、君のお父さんにも知らせてあげたらどうだい？　ああ、そうか、今も調べ物の最中か……。邪魔してはいけないし、後にしてあげなさい」
「そう……」
ルドマンの言葉にリョカは少し残念そうに頷く。
このところ父は部屋で本を読んでばかりいる。旅の合間、少しでも暇があると本を読む父は真剣そのもので、幼いリョカにもそれを邪魔してはいけないとわかっていた。
ただ、唯一の話し相手でもある父が自分の相手をしてくれないということは、やはり彼にとっても寂しいことではある。本当は陸地を見つけたとき、一番に報告したかったのだから。
「騒がしいと思ったら陸地が見えましたか……」
「父さん！」
沈んでいたリョカの顔がぱっと明るくなる。人ごみを遠巻きにしながらパパスがやってきたからだ。
普通の旅人というには大柄な男。特注の旅人の服で見えないが、引き締まった体躯は歴戦の戦士。船の中ということもあり帯刀していないが、普段は長さ一メートルを超える両刃の剣を自在に操る。そして、今も野暮ったいだぶだぶしたズボンの内側に小剣を隠しており、この船旅の中、獲物を求めてやってきた中空の魔物を数匹しとめている。
油断怠りなき者。それがパパスなのだ。
「これはパパス殿。調べ物はよいのですか？」
「はい、船室に閉じこもっていては腕に黴が生えてしまいますから……」
「はっはっは……、貴方におかれて、それはないでしょうが……」
ルドマンはパパスの冗句を愉快そうに笑うが、直ぐに冷静な目に戻る。
「して、パパス殿は今後どちらに？」

「ええ、まずは例の物をサンタローズから……」
「ふむ、例の封印も伝承通りならば、近いうちに……」
神妙な顔つきで話し込む二人にリョカと姉妹はそっと聞き耳を立てていたが……。
「うおっほん……。ルドマン殿、この話はまたのちほど……」
わざとらしい咳払いのあと、二人はそそくさと船室へと戻っていく。袖にされたリョカ達は顎に指を当てて思案気な慾子。
「なんか怪しいのよね、父さんもパパスさんも……」「そう？　大人なんだし、子供にいえない話ぐらいあるんじゃ……」
「違うのよ。だってこういっちゃなんだけど、あんたの父さん、絶対普通の人じゃないでしょ？」
「それを言うならデボラさんのお父さんだって……」
「そうよ。父さんはすごいんだから！　サラボナから世界を股に掛ける商売人！　ルドマン・ゴルドスミスその人あり！」
普段はそうそう笑わない彼女だが、父のことを話すときだけは決まって笑顔になる。それだけ父を尊敬し、また愛しているのだろう。
「で、その人がどうしてあんたなんかの父さんと知り合いなわけ？」
そしてリョカに向ける視線の冷たさ。それは胡散臭さ半分、彼女の言う小魚顔の男の子の父が同等に肩を並べることへの不満があった。
「僕もわかんないよ……。けど、多分そういうんじゃないと思う」
「そういうって、なによ？」
「えと、デボラさんの言うすごいとみ違う、別の何かがあるんだよ」
「そりゃ……そうでしょうね……」
デボラが軽視しているのはあくまでもリョカに対してのみ。一見すれば用心棒風情なパパスだが、彼女は彼に対し、身構えるような礼儀正しさを示している。
「でも、それが気になるのよ！」
デボラは急にリョカに向き直ると、その首ねっこを掴み、コメカミにこぶしをあててぐりぐりとしだす。

「わわわ、痛いよデボラさん。やめてよ、ごめんよ！」
そしてその言い知れない圧力の正体がわからない鬱憤が、こうしてリョカにぶつけられるのであった。
「ねえ、姉さん……。この船には私達以外に子供はのっておりましたっけ？」
するとフローラが首を傾げながら口を挟む。
「？　いないと思うわよ？　居たら見るはずだし……」
「でも、さっき声が聞こえたのよ。とっても子供っぽい言い方だったけど、私達じゃない、知らない声で……」
「ちょっとやめてよ。あたしお化けとか苦手なんだから……」
ぶるっと震えるデボラ。その瞬間だけ責め苦が弱まり、リョカはすっと腕から抜ける。
「あ、こら！　リョカ！　待ちなさい、この小魚男！」
「もう、姉さんたら……」
そしてくすくすと笑うフローラだった。

＊＊

2　真夜中の食いしん坊

それから一日後の午後、船はオラクルベリーの港へ着いた。
日も沈みかけていたこともあり、ルドマンの誘いでオラクルベリーの宿へ泊まることとなった。やはりルドマンはパパスに用があるらしく、リョカが布団を深く被った頃に部屋を出て行った。
そしてリョカも久しぶりの陸地での夜を満喫するため、イエティの数を数え始めるのだが……。
「……起きて、ねえ、リョカ……」
ドアがノックされると同時に開く。そこには例のブラウンの髪の女の子がおり、さらに青髪の女の子もいた。
「どうしたの？　おしっこ？」
「ちが！　どうしてあたしがおしっこにいくのにあんたを呼ぶのよ！」
「だって、船ではよく……」
「まあ、姉さまったらようやく一人で行けるようになったと思ったら、リョカ君を……」
なるほどと頷くフローラに、デボラは真っ赤になってしまう。
「うっさい！　ばかばか！　もう、フローラに知られちゃったじゃないの！」
手近にあった枕でばしばし叩かれるリョカ。痛みはさほどではないが、毛羽立つ埃で目が痛い。
「ご、ごめんなさい。で、それで何のよう？」
「あ、それで……あのさ、昨日フローラが言ってたこと覚えてる？　誰かが居るって……」
「誰か？　どこに？」
「船に誰かが居たのよ。私達と同じくらいの子がさ！」
「そうなの？」
「見たわけじゃないんだけど、その、あたしにも聞こえたのよ。こ

こがオラクルベリーかって……」
「大人じゃなくて？」
「違う。あれは子供……っていうほどじゃないけど、ぜったい大人じゃないの……」
「ん～。そうなんだ……でももう船を下りちゃったし、探すにしても無理じゃないかな？」
サントフィリップ号が港に来てすでに数時間経っていることを考えればリョカの言い分は正しい。それに関してはデボラも否定するつもりはないらしい。だが……、
「それがさ、あたしの部屋。まだ使ってないコップが濡れてたり、お菓子が一人分なかったりして……多分誰かいるのよ……」
「？　つまみ食いじゃなくて？」
「あんたじゃないの！」
ガツンとこぶしが降り注ぐ。
「ごごご……。で、でもそれでも逃げちゃってるとか……」
「それがね、そいつはすごい間抜けみたいで、お菓子をぼろぼろ零しながら逃げてるのよ……だからそれを辿れば……」
「ふうん。なるほど」
「いまからソイツを捕まえてぎゃふんて言わせるの。来るわよね」
「……うん」
一瞬思案するリョカは二人を外に出してか　普段着に着替え、そして道具袋の中から……。

＊＊

点々とこぼれているお菓子のカス。それは街の外へと続いており、塀の外へと出て行ったらしい。
「この塀を越えたのかしら？」
「多分ね……。どうする？　遠回りする？」
「そうね……。早くしないと逃げられちゃうわ」「でも姉さま、私

達子供だけで外に出してもらえるかしら？　街の外は魔物がいるのでしょう？」

「うん。だから急いだほうがいいかもしれない」

思案気なフローラに対し、リョカは生真面目な様子で言う。

「なぜ？」

「もしその子が本当に子供だったら危険じゃないか。デボラさんとフローラさんは父さんを呼んできてよ。僕がその子を追う」

「アンタ一人で？　ふざけないでよ。そんなこと……」

「大丈夫。危ないって思ったらすぐに逃げるから……。それにぐずぐずしてたら多分その子もお菓子を食べ終えちゃう。そしたら追いかける方法がなくなるよ」

「そ……そうね……それじゃあ任せる……わ。行きましょ、フローラ……」「でも姉さま……」

「いいから……」

デボラに急かされフローラは元来た道を戻る。その背後では塀をひらりと乗り越えるリョカの姿が見えた……。

＋＋

――このあたしがなんで小魚の言うことを聞いてるの？

宿に戻る途中、デボラは先ほどのやり取りを反芻していた。

これまでいいようにあしらっていたはずの年下の男の子。それが急に怖い……とは違う、畏れとも違う、抗うことの出来ない圧力を持っていた。

冷静になればなるほどそれが信じられず、また悔しくなる。

それが彼女の足を止めた。

「姉さん！？」

後ろを走っているはずの姉の足音が途切れたことにフローラも立ち止まる。

「フローラ、貴女だけ行きなさい。あたしはリョカを追うわ！」

「けど姉さん」
「いいから！」
そして姉の号令に、フローラはただ従ってしまう。
――待ってなさい。あんたなんかの言うことなんか絶対に聞いてあげないんだから！
デボラは踵を返し、街のはずれへと走った。

＊＊

「……ここら辺かな？」
食べかすを辿ってきたリョカは辺りを見回す。オラクルベリーの周辺に森はなく、あるのは見渡しのよい平原とブッシュだけ。リョカは携えてきた道具袋からブーメランを取り出し、瓶に入っていた聖水を自身に掛ける。ハッカのような香りが身体を包み、服がびしょりと濡れて不快感を出す。
「そこ！」
ブッシュに紛れて何かが走った。それを目視するや否や、リョカは手にしていたブーメランを低い軌道で投げる。
「ピギー」
何かやわらかいものに当たると、それははじけて草原から飛び跳ねて消える。おそらくゲルの状生命体――スライムだろう。それらは草原のブッシュ近くに集まっており、何かを執拗に攻撃しているように見えた。
「スライムだけならいいけど……」
これまでの父との旅はけして安全なものとはいえない。百戦錬磨の父の背中に居たリョカだが、見よう見まねで魔物との戦い方を覚えてきた。
最近では下級モンスターならば、父の手を借りることなく倒すなり追い払うことができるようになっていた。それが今回の一人での追走劇をさせた。もし誰かが危機にあるのならそれを助けたい。そ

れは表向きであり、本当は父に自分の姿を見てもらいたいという子供ながらのプライドからだ。
「なにすん。おれをなんだとおもってるんだ！　てか、なんだろうな？　つか、やめいや！」
そして聞こえてきた声。それは確かに子供の声だった。
「そこの人、伏せて！」
リョカは魔物の集まっているブッシュにブーメランを放つ。そしてさらに道具袋の中から銅製の剣を取り出し、切り込む！
「うあああああ！」　誰かを襲っている魔物どもはスライムと木槌を持った毛むくじゃらの小人――ブラウニーのみ。リョカでも対処できるモノだった。
「ぎぃ！　ぎぎぃ！」
木槌を持ったブラウニーは突然の攻撃に防戦一方であり、戻ってきたブーメランが後頭部にぶつかったのをきっかけに逃げていく。
スライムどもはリーダー格であろうブラウニーの逃走に劣勢を読み取り、そのまま逃走する。
「ふう、追い払えたか……。さ、君大丈夫？」
一息つく暇もなくリョカはブッシュに倒れているであろう誰かに声をかける。しかし、そこに居たのは一匹の赤い羽根トカゲ、前にメラリザードと呼ばれた魔物を見たことがあるが、それによく似た魔物であった。
「モンスター？」
「だ、だ、だれがモンスターじゃい！　だれが……。俺がモンスターに見えるん!?」
リョカの疑問符にそのトカゲはきっと顔を上げ、早口で捲くし旅てる。
「見える……けど……しゃべった!?」

3　赤い羽トカゲ

「おう、しゃべっちゃ悪いか！」
「いや、いいけど、でも魔物がしゃべるなんて……」
「おうおうアホかい坊主。いいか？　言葉しゃべる魔物なんてこの世界いくらでもおるで？　ま、上級な魔物じゃないとむりやけどな……。つまり俺様は上級な魔物……って、俺は魔物じゃないわい！」
「でも、君はメラリザード」
「アホ！　俺をそんなちんけな火トカゲと一緒にすんな！　俺は……えっと……なんだっけ？」
「だから、メラリザード」
「ちがわいどあほ！」
「けど、魔物なら……」
言葉がしゃべられることに気を許していたリョカだが、ソレが魔物である以上、楽しくおしゃべりしているわけにもいかない。彼はブーメランを拾い、銅の剣を構える。
「いやいやいや、だから……そうだな……そうだ！　俺はドラゴンだ！」
「ドラゴンならやっぱり魔物……」
「違う。そうじゃない……もっと高級というか、存在自体が別の何か……」
「けど……」
警戒を怠らないリョカは剣を握る手に力をこめる。
「リョカー！」
するとそこにデボラの声が届く。だが、彼女一人。父の姿が見えない。
「デボラさん。父さんは？」
「アンタが心配だから来てあげたのよ。もう……それで、どれがお菓子泥棒？」

デボラはとりあえず一発リョカを小突くと、首を傾げている赤い羽根トカゲを見つめる。
「どれってあんた……！？　そうだ、思い出した！　俺はシドレーだ！　ドレだけにシドレーなんつって……」
「ぷっくくく……」
何かを思い出したらしい赤い羽根トカゲの駄洒落にデボラは堪えきれずに噴出してしまう。
「あの、別に気をつかわんでもええで？」
思った以上に笑い上戸な彼女に赤い羽根トカゲとリョカはまじまじとデボラを見つめてしまう。
「こほん……、ええと、貴方はシドレーっていうの？　聞いたことの無い魔物だけど、やっぱり……」
「違う、違う、俺の名前だ。シドレー……下の名前は忘れたけど……、俺は魔物じゃない。けど、お前らのような人間とも違うんだ……」
「人間じゃないのは見てわかるけど、一体なんなの？」
「だから、シ・ド・レー！」
「シドレー？　よくわからないけど、魔物じゃない証拠にはならないよ」
「そうね」
シドレーを睨む二人の顔が険しくなる。対しシドレーは両手をぶんぶんと振りながら弁解しようと必死。
「おいおい、魔物がなんで魔物の襲われるんだよ！　そんなことありえんでしょ？」
「でも、人間だって時と場合によっては人間を襲うわ。悲しいけど……」
「いやいや、ほら、人間の言葉しゃべるし……」
「つまり、シドレーっていう種族は高級な魔物ってわけでしょ？　ならやっぱり……」
「おいおい、俺が高級な魔物に見えます？　ほら、そこいらの雑貨

屋で値引きされて三百ゴールドくらいやて……」
シドレーを名乗る羽トカゲはポンと自分の頭を叩きながら、くるくる空を飛ぶ。今のところそれほど敵意のないことからリョカも警戒を解く。
道具袋から薬草を取り出し、シドレーに勧めた。
「使い方はわかるよね？　それはあげるけど、これからはお菓子泥棒なんかしちゃだめだよ？」
「お菓子泥棒って、俺はそんなこともぐもぐ……」
差し出された薬草の一部を頬張りながら「まずい」と呟くシドレー。
「そういえばコイツにお菓子を盗まれたのよね……？　けど、コイツならここまで逃げる必要あるかしら？　だって飛べるんでしょ？　屋根の上なら誰も……」
ふと気付くデボラにリョカもはっとなる。そして一瞬シドレーが頬を膨らませたと思うと、燃え盛る火炎を二人に向かって吐き出す。
「デボラ！　危ない！」
リョカは咄嗟にプボラの頭を抱きしめながら草原にダイブする。
その間もシドレーは炎を吐く。

4　約束

「やっぱりコイツ危険な魔物だわ！」
リョカに抱きしめられながら叫ぶデボラ。だが、炎は彼らではなく、より遠くへと向けられている。
「違う。囲まれてるんだ。山賊ウルフだ」
リョカがそう言うのでデボラも目を凝らす。すると四足の群れが、いつのまにか彼らを囲んでおり、リーダー格の一匹――眼帯をしているものが立ち上がるのを合図に皆、二足になる。
そして金属の滑る音と月明かりに浮かぶ半月の剣。
「まずいで坊主。こいつらかなり強い。さっきの雑魚とじゃ比べものにならない」
シドレーは彼らを敵とみなしており、続く炎を吐こうと再び頬を張る。
「シドレー、君は空を飛べるんじゃないの？　逃げれば……」
「アホ言うな。坊主には薬草の借りがあるし、それにそんなに力ないっての……」
リョカはデボラを背後に庇いながら剣を構える。
次の瞬間、一匹目が走ってきた。
「コオオォォォッ！」
唸り声を上げて走ってくる山賊ウルフ。リョカはブーメランを投げつけるも弾かれる。
「断！」
「きゃあ！」
そして強い一撃が振り下ろされる……も、なんとか受けきるリョカ。
「そりゃ不用意ってやつだろ！　カァァッ！」
リョカをしとめそこなった一匹に、シドレーが近距離で炎を浴びせる。見る見るうちに火達磨になるも、囲う魔物達は怯む様子を見

せない。
「坊主、正直なところ、俺もそんなに炎を出せそうにないで」
「坊主じゃない、リョカだ……リョカ・ハイヴァニア……」
「そうか、リョカか。けどな、とっておきがあるんだって……ソレ使えばなんとかなるはずだ。いいか？　俺が合図したら目瞑れよ……」
「わかった」
リョカは頷くと、剣を握りなおす。
「走」
口笛のようなものが聞こえた後、ウルフたちが駆け出す。最初の一撃で複数の攻撃を防げないということを見切っての攻勢だろう。
「目つぶれ！　行くぞ、ジゴフラッシュ！！」
合図を共に目を瞑るリョカとデボラ。シドレーの方が急に眩しくなり、それは瞼越しにもわかるほどだ。
「よし、ええぞ、反撃だ！」
「え、逃げないの！？」
「無理言うな。今のはただの目くらまし。逃げたところでこいつらの回復と足のほうが速いわ！　ボスだけでも倒せば、後は烏合の衆やで！」
「うん、大丈夫、いける！」
リョカは駆け出すと打ち落とされたブーメランを拾い、まごつく群れに向かって投げる。一匹に当たるとそいつはよろめき別の一匹と共倒れ。その隙に銅の剣ぷ孤立しているものをなぐり倒す。
シドレーも残る炎を最大限に活かし、あれよあれよと状況を一転させる。
「活」
だが、リーダー格は一味違うらしく、眼帯を外して片目で剣を振るう。
「おいおい、おしゃれ眼帯かよ！」
「そんなのあるの！？」

不意を突くはずが、まさかの反撃に遭う。ただ、片目のせいでリーダーは距離感がつかめないらしく、リョカもなんとか捌ききる。
「く、強い、だけど！」
善戦するも所詮は銅。鋼と思しき半月の剣に適うはずもなく、刃こぼれしだす。
「ちょっとアンタ、炎は？　何か出せないの！？」
「無理ゆうな。俺だってもうガス欠だっての……てか、おじょうちゃんこそなんか魔法はないんかい！」
「魔法……魔法……そうだ……！　えっと……火の精霊よ、古の契約より命ずる、我の敵を打ち崩せ、メラ！」
最近練習を始めた初級火炎魔法の印を組むデボラ。彼女の示す指先からは勢い良く炎の塊が飛び出し、山賊の後頭部を焦がす。
しかし、リーダーはそれほど意に返すことなくリョカに襲い掛かる。
「なんじゃい、あんだけやっといてメラかい……」
「しょうがないでしょ、これしか出来ないんだから！」
普段危険と関わりあいの無い生活をしてきたデボラにとって、メラを唱えるのが精一杯。彼女がかろうじて気を失わないのは、小ばかにしてきたリョカが奮闘しているが故だ。
「けど、このまんまじゃ……、どうしよう、父さん……パパスさん！」
無力に打ちひしがれるデボラは父の穏やかな顔とパパスの険しい顔を思い出すのみ。しかしそれが現状を打破するはずもなく……、
「ヒャダルコ！」
女性の声だった。中級氷結魔法と同時に突如降り注ぐ氷の雨。それらはまごつく山賊ウルフを打ちのめす。
「え！　え！？」
一瞬の出来事に息を飲むデボラ。
「伏せろ、リョカさん！」
続く男性の声。
言われるまでもなく体力の限界であったリョカは沈み、その上を

誰かが越えていく。
「ぐぅ！」
獣の低い声と何かが砕ける音は同時だった。
「だ、誰……！？」
パパスではない誰か。青年と呼べる年頃の男女が窮地を救ってくれたのだろうことはわかるが、突然すぎて状況がわからない。
「まったく、いつ来てもピンチなんだから……」
「だからこそ記憶に残るのかもね……」
二人は倒れたリョカを起こすと、簡単な回復魔法――ホイミを唱える。
「あ、ありがとうございます。えと、お兄さんとお姉さんは……」
「お姉さんだって！　この子可愛い！」
リョカがお礼を言うと、女性のほうが彼をぎゅっと抱きしめる。
「何が可愛いだよ。お前は……」
呆れ顔の男性は短髪を掻きながらふうとため息をつく。
「今は私がお姉さん。っていうか、ホントアンタは可愛くないわ」
女性はリョカを抱きしめながら男を睨む。
「はいはい……、姉さん姉さん姉さん姉さんっと。これで満足？　えと……デボラさんって呼べばいいかな？　怪我はありませんか？」
面倒臭いとばかりに男は「姉」を無視してデボラに手をかざし、初級治癒魔法のホイミをかける。
目立つほどではないが草で切ったらしき傷が癒えるのがわかる。
「あ……はい……ありがとうございます」
「そうですか、よかった……。でも、あまり無茶をしないでください。フレッドさんも心配してますから」
「え？　貴方は父さんの知り合い？　フレッドって……」
「あ？　えと、フレンドです、フレンド、友達も心配しますよ」
男は心配ついでに出てしまった言葉に、視線をそらしていた。
長身で短髪、端整な顔つきの男。太い眉毛と誠実そうなまっすぐ

な瞳。デボラの好みに近い小魚を連想させる顔なのだが、不思議と憧れを抱いても、誰かに対する思いと同一のものを抱くこともなかった。

「あ、あの、苦しいです……」

一方、女性に抱きしめられていたリョカ。その豊満な胸元は彼に窮屈さを覚える。

「ああ、ごめんね……。貴方があんまり可愛いから……つい……」

そういうとようやく彼女はリョカを開放する。ただ、その表情は隙あらばスキンシップをとばかりに獲物を見つめている気がする。

その女性、月明かりの下、金色の髪が良く風になびく。長くしなやかでしっとりとした髪。髪留めも意味がなく、前髪が何度も瞼を過ぎる。彼女はそれをかき分けながら、リョカの視線にしゃがんでおでこをつける。

「リョカ君……でいいかな？　あんまり危ないことをしちゃいけないよ」

「はい、ごめんなさい」

言い終えた後、足が竦む。先ほど剣を振り下ろされたときもそこまで酷くなかったというのに、今こうして無事だというのに、その恐怖を実感し始める。

「震えてるね……怖い？」

「はい……けど……」

「けど？」

「男ま子は女の子を守らないといけないから……、次は負けない」

「そう……」

彼女は少し悲しそうにした後、リョカをもう一度抱きしめる。

「お姉さん？」

「ごめんね……さっきから……」

「いえ……」

「君にお願いがあるんだけど、いいかな？」

「え？　なんでしょうか」

「君、絵を描くのが好きだよね？　君の絵を欲しがる子が居るのよ。青い髪のとっても可愛い子なんだけど……」
「ファザコンで、怒りっぽくて、何かと年上ぶりたがる……ね？」
「うっさい！　そこ！」
女は無詠唱で氷の矢を放つも、男はソレを足で軽くいなす。
「その子にも描いて欲しいの。そうね。今日のこととかも描いてくれるかな？」
「うん。わかった」
「うふふ。素直で本当に可愛い……」
笑顔になる女だが、舌なめずりをした後……。
「あっ……んっ……」
リョカの顎にひとさし指を沿え、少しだけ顔を上げさせ、唇を重ねた……。
「あああーーー！！！」
「えええーーー！！！」
「ちょ、ま！」
三者三様、驚きかたは様々だが、それはリョカも同じ。
初めて触れる唇。その柔らかさ。甘い香り。緊張が混乱と相成って動悸が酷い。呼吸も困難なくらい酸素が足りない。
「んふ……」
うっへりとした様子で両頬に手をあてる女。彼女は「甘酸っぱい」と小声で言い、その余韻を楽しむかのように唇を舐める。
デボラと男は女に詰め寄り、
「姉さん！」
「貴女！」
シドレーは呆然とするリョカの肩に乗る。
「大人の階段上ったな！」
「ぼ、ぼく……」
子供ながらにキスという言葉は知っている。旧知の親交を表すために頬でするのも知っている。そして唇同士でそれをする意味も…

…。

「ちょっとリョカ、聖水はないの!?　ほら、あった!　あたしの貸してあげるから早く口ゆすぎなさい!　三分以内ならノーカンだからね!」

「う、うん……」

言われるままに嗽を始めるリョカ。

「ちょっと!　人を感冒みたいに言わないでくれる!?」

女性はデボラに対しては強い口調で言う。

「なに言ってるのよ!　いくら命の恩人でもいきなりキスするなんて非常識だわ!　恥知らずもいいところ!」

しかしデボラも負けていない。

「まぁまぁ、デボラさん、姉さんも……」

それを執り成す男だが……。

「「あんたは黙ってて!」」

二人声を揃えていなされる。

「はい……」

そして縮こまる男。

暫く言い合いは続くわけで……。

＊＊

「もう、キスぐらいいいじゃない。どうせファーストキスは私なんだから」

「だから!　あんたが今しっかりファーストキスを奪ったんでしょうが!」

「こうるさいおばさんね」

「誰がおばさんよ!　誰が!　私がおばさんなら貴女はババアでしょうが!」

ふてくされる女にデボラは食って掛かる。まるで自分のファーストキスが奪われたかのように叫ぶが、シドレーの「ええやん、坊主

のことなんだし。それとも何か許せない理由とかあるのか？」という声に収まった。

「リョカー！」

そうこうしているうちにパパスの声が聞こえてきた。そしてフローラとそれに続く衛兵達。

「あ、まずい……。ほ、ほら、行こうか……」

「はいはい……。それじゃあリョカ君。気をつけて……」

「あ、はい……。あの、お二人のお名前は……」

何か魔法を唱え始める女に、リョカが声を掛けると、二人は少し考えた後、

「俺はボルカノ・エバ……」

「私は、そうね……アニス・レイクニアかしら？」

「ボルカノさんとアニスさんだね。ありがとうございました。本当に助かりました」

「ん……んーん……」

リョカのお礼にも二人は難しい顔。そして光が凝縮されたあと、二人の姿は空へと消えた。「あの魔法！？」

「ルーラだろ？　空間転移魔法の……」

シドレーはさも当然という様子で答えるが、デボラは首を振る。

「そんな、だって、空間転移魔法は印から精霊との使役契約法も封印されてるって……」

「そんなん復活させればいいじゃん」

「あんたね。さっきから簡単に言うけど、魔法の契約ってすっごい大変なのよ！　ものすごいお金が掛かるか、勉強するか、修行するか、その苦労がわかって言ってるの！？」

デボラはシドレーの首を掴むとぶんぶんと前後に降り始める。

「んなこと言われても、俺も習ったし……、ぐるじ～、たしけて～」

「きい！　なんなのあの女！　悔しい！」

ぶつける先の無い怒りに、デボラはただシドレーを苛めるわけだが……。

5　旅立ちの朝

「リョカ！　無事だったか……！」
「父さん！」
ようやくやってきたパパスにリョカは走り出す。
自分の奮闘ぶり。シドレーと共に山賊と切り結んだことを話そうと。そして、それを褒めてもらおうと……。
「馬鹿者！」
頬に走る衝撃と、夜空に消える音。
「とう……さん？」
頬を叩かれたまでは理解している。そして父が悲しそうな顔をしていることも……。
「お前に何かあったら……私は、私はなんていえばいいんだ？　私はお前に強くなってもらいたい。勇敢になってもらいたい。けれど、それは無謀になれと言っているわけではなご。お前の決断がお前どころかデボラちゃんまで危険な目に遭わせたんだぞ？　わかっているのか！」
「ご、ごめんなさい……父さん……」
そして沸き起こる後悔の念。そう。もしボルカノ、アニスが来なければ二人と一匹は今頃……。
「そうだな。坊主もガキにしては強いけど、まだまだじゃからな……」
ようやくデボラから開放されたシドレーはリョカの肩に止まると、小刻みに震える彼の頭をぽんぽんと叩く。
「んだけど、コイツもコイツなりにがんばってくれたんだ。俺が魔物に襲われてるところ、助けてくれたしな……」
「う？　うむ？　まも……の？」
陽気に話すシドレーにパパスは目をしばたかせる。長い旅の中、上級の魔物、言葉をしゃべる魔物と対峙すること数回、しかしこの

ようなあまり威厳の無い上級な魔物というのは記憶に無い。
「ちがうちがう。俺にはシドレーっていう立派な名前があるんだわ。ま、とりあえず、坊主も反省してるみたいだし、ここは俺の顔に免じて……」
「何が免じぶよ！　そもそもアンタがあたしのお菓子を食べなければこんなことにならなかったんでしょ！」
そういって再びシドレーを掴むデボラだが……。
「姉さん」
軽く肩を叩かれたデボラ。
「なによ、後にしてよ……」
無意識にソレを振り払う。
「ね・え・さ・ん？」
再び肩を捕まれる……。
「だから！」
またしても振り払おうとするけれど、振り返ったデボラの前には笑顔と怒りの四つ筋を額につけた妹が居り……。
「とーっても心配したんだからね……」
「ふ、ふろーら……ご、ごめんなさい……」
「今日はしっかり絞らせてもらうからね……」
「ご、ゴメンって言ってるじゃない！　ねえリョカ、助けて！」
何かにおびえるデボラはリョカに助けを求める。しかし、彼は父の腕の中で自身の弱さ、軽率さを恥じ、ただ泣きじゃくるのみ。父はその頭を優しく撫でるくらい。
「そうだ。父さん……。ね。父さんもあたしのこと怒ってるでしょ？　ね……ほら、フローラ……、父さんがあたしに話あるみたいだし……」
心配そうにしているルドマンを見るデボラ。きっと父もお小言の一つ言いたいのだろうことは察している。それはそれで面倒なことなのだが、笑顔の妹に比べればあるいは≪…。
「すまんなデボラ。ワシの言いたいことはおそらくフローラが言っ

てくれると思う。今はただ、お前の無事を安堵させてくれ」
「そんな、父さん、父さんってば！　ふろーら、許してよ～」
デボラの後悔の叫びがむなしく空に消えていった……。

＊＊

「それではルドマンさん。世話になりました」
次の日の朝、旅に戻るパパスはルドマンに別れを告げていた。
「いえいえ。パパス殿のおかげで今回の船旅も滞りなく……」
「ですがお嬢さんのことは……本当に申し訳ない」
「ルドマンさん。デボラさん、フローラさん、本当にごめんなさい……」
頭を下げるパパスに続き、リョカもまた深く頭を下げる。
「いやいや。今回のことはデボラにとって良い薬でしょう。無事だったのだし、なに、そんなに神妙になる必要もありません」
ルドマンは鷹揚に頷くと高らかに笑っていた。
「ねえデボラさん、本当にゴメンなさい」
リョカはもう一度デボラにそう告げるが、彼女はどんよりとした顔でうなだれていた。
「うう……フローラ、怖い……」
一体なにがあったのか？　とうのフローラはこれといって何もないのだが、デボラは妙に彼女を遠巻きにしていた。
「……ねえ、あのトカゲは？」
「さあ。今日は見てないよ？　どこかへ行ったんじゃない？　でも一体何者なんだろう……」
「さあね。たく、あいつがお菓子を食べるのがいけないんじゃないの」
ちっと舌打ちするデボラはちらっとリョカを見たあと、いいにくそうに口を開く。
「それはそうと……」

「なあに？　デボラさん……」
「昨日のリョカ……」
「昨日の僕？」
「ちょっぴり……」
「ちょっぴり？」
「……ん～小魚っぽい！」
「あはは……またそれか……」
肩透かしを食らったリョカだが、昨日のふがいなさは身に沁みている。これからはもっと強くなろう。そう決意するリョカだった。
そして、その二人のやり取りを見てくすりと笑うのはやはりフローラであり……。
「それでは私達は旅に戻ります。ゴルドスミス家に良い明日を……」
「ええ、グ……ハイヴァニア家に良い明日を……」
ルドマンは何かを言い直しながら二人が小さくなるまで見送っていた……。

＋＋

旅を続けるリョカ。その道具袋からひょっこり顔を出す赤いトカゲ。
周りをキョロキョロ見渡した後、再び中にもぐりこみ、寝息を立てた……。

＋＋

「ん～……合格ラインかしら……。けど、もう少し見たほうが良ごかしら？　あの金髪の子のほうが魔法も使えるし、足手まといになると困るしねぇ……」
もう一人、小高い丘から二人の背中を見つめるものが居た。
その者は口の周りに昨日紛失されたとされるお菓子のチョコレー

トがついており……。

6　幼なじみ

オラクルベリーの北西にある町、サンタローズ。遠方より来た旅人を見て、町の入り口に立つ衛兵は身構える。

旅人が彼に手を振り親しげに「おーい」と呼びかけるのを聞いて、衛兵は目を擦り、もう一度見る。

「やあー、パパスさんじゃないか！　戻ってきたのか！」

衛兵は職分も忘れて槍を投げ捨てると、旅人のほうへと駆けて行く。

「やあ、守衛殿、お勤めご苦労様。予定より大分遅れたな。本当は南の港への船だったのが、時化で出航できなくてね。代わりにオラクルベリー行きの船に乗せてもらったんだ」

「いやいや、無事で何より。といってもパパスさんほどの腕前の人に心配はいらないわな。ささ、サンチョさんも皆も待ってるだろうし、急いであげて……」

「ああ、すまないな……」

パパスは衛兵に軽く会釈をすると、入り口のアーチをくぐる。

「あー、パパスさんだ！」

「本当！？」

すると村のあちこちから歓声があがる。

実は、パパスはこの村でちょっとしたヒーローなのだ。

＊＊

数年前のことだ。村の北にある洞窟の奥に魔物が現れた。

それはけっして強くはないが、その存在を知る者からすれば、人、魔物、妖精、ホビットを問わず脅威を感じる存在だった。

強いだけの魔物ならば強い傭兵を用いればよい。だが、その魔物の名前を聞いただけで皆震え上がり、誰も名乗り出無い。　村人達

は、ただただその脅威におびえて毎日を過ごしていた。
そこへふらりとやってきた旅人がいた。従者を一人と幼子を連れた男、パパスだ。
彼は何かを探していた様子だが、村人のほとんどがサンタローズを出たこともなく、また書物を集めるような知的好奇心もなく、たいした情報を与えることも無かった。
そんな中、ホビット族のドルトン親方が、彼の探すモノについて思い至る。
前に仕事場で使っていた部屋に、パパスの話す特徴に似たものが描かれた本があったと記憶しており、それを知らせたのだ。
パパスは即座に洞窟へと走り出した。村人達が止めるのも聞かず、ただ一目散に。
そして一時間と経たず、あの恐ろしい魔物達が洞窟を出てくるのが見えた。
村人達は何事かと物陰に隠れてそれを見守ったが、最後にパパスが五体満足な様子で出てきたところで駆け寄った。
パパスの言うところによると、彼らは主食となる硫黄岩を探して旅をしていたそうだ。サンタローズの洞窟にもそこそこあったわけだが、最近は枯渇し始め困っていたらしい。そこでパパスは硫黄岩の多い地方を教えてあげたというわけだ。
村人達はパパスが魔物と意思疎通ができることを驚き、また脅威が去ったことにもろ手を挙げて喜んだ。
＊＊
「旦那様、ご無事のお帰り、何よりです……」
サンタローズのパパスの借家にて、従者のサンチョが紅茶の準備をしていた。
「あいにくバニア産は切らしておりますが……」
代わりに差し出されるのはキャラメルの香りのするお茶。飲むと苦味のほかにほんのり甘味があり、リョカは大好きだった。

「いい匂い！」
　すると匂いをかぎつけたのか、二階からどたどたと女の子がやってくる。
「ああ、ビアンカちゃんもいたのか……。久しぶりだね」
「お久しぶりです、おじ様！　リョカもね！」
　そう言って微笑むのはリョカの一つ上の女の子、ビアンカ・ルード。
　金色の髪を二つに結んで乱暴に縛ったもま。彼女の性格らしい大雑把なもの。　くりっとした瞳はリョカを見つけるとニヒッと笑窪を作る。
　ビアンカはずいずいと彼の前にやってくると、自分の頭と彼の頭の高さを手で比べ、そして不機嫌になる。
「む～負けた～……」
　少し前までは三センチ以上差があったというのに、いつの間にか抜かれていることにがっかりするビアンカ。リョカはたじろぎ、彼女にぺこっと頭を下げる。
「まあいいわ。リョカがあたしの年下であることには変わりないし、ちょっと背が高くなったぐらいでいい気にならないでよ？」
　いい気になったつもりはないのだが、どうしても年上というだけで逆らえないのがこの年頃の子の心理。
「ねえ、リョカはまだ絵を描いてるんでしょ？　見せてよ」
「うん。いいよ。そういえば、今度の旅では不思議なものを見たよ。あのね、僕オラクルベリーで人間の言葉を話すメラリザードを見たんだ！　その絵を見せてあげるよ」
「人間の言葉を話すメラリザード？　そんな嘘ばっかり！」
「嘘じゃないよ！　ほんとだよ。ね、父さん！」
　疑われたことにムキになるリョカは、父に同意を求める。パパスもふむと首を傾げる。
「あれはリョカを叱ろうとしたときなんだが、私も面食らって話し半分になってしまった。いったいあれはなんだろうな？　メラリザ

ードに似ているのだが……」
　パパスの同意にビアンカは「おじ様が言うのなら」と頷く。
「ね、それより二階に行きましょ？　おじ様もサンチョさんと話したいことがあるだろうし、あたし達が居たら邪魔だよ。ね」
「うん」
　場の雰囲気のわかるのは彼女が商売人の娘だからだろう。リョカもそういうビアンカの気が利くところが好きだった。例のワガママばかり言うお姉さんや、笑顔の割りに押しの強い女の子よりも……。

＊＊

「へぇ……これは海の絵？　この白いの……鳥？　何？」
「これはね、海猫だって。かもめみたいなんだけど、にゃーにゃー鳴くんだ。そして猫みたいにお魚さんを食べるんだ」
「へぇ～」
「でね、こっちがオラクルベリーの街。すごいんだ。とっても眩しくて、人が多くてさ……」
「いいわねぇ。リョカはいろんなところを旅できて……。私もどこか冒険に行ってみたい」
　リョカの絵を見ながら感心した様子で呟くビアンカ。アルパカの村の宿屋の娘である彼女にとって、冒険者を見ることはあっても冒険をすることはない。それはこれから先も変わらないことなのだろう。
　けれど、自分より幼いはずのリョカが会うたびにそういう経験を重ね、認めたくはないものの、たくましく、りりしくなっていくのが羨ましかった。
「でも、冒険は大変だよ。昨日なんて僕、デボラさんを危険な目に遭わせてしまったし……」
「デボラ？　誰？」
「デボラさんは船で一緒だった女の子だよ」

「女！？」
女という言葉にビアンカが怪訝そうな声を出す。
「うん。とってもワガママで怖い人だった。でも僕、何がなんでもデボラさんだけは守らないとって、必死だったんだ」
けれど、リョカはそんな彼女の声色に気付かず、手振りを踏まえて語りだす。
「ふうん。もしかしてリョカはその人のことが好きなの？」
「え！？」
飛躍する話にどきっとするリョカ。
彼はここ数週間の出来事を思い出す。
朝。彼女の部屋に朝食を届け、食器の片付けをする。
昼。彼女にレモンティーを届け、絵を描きながら話相手。
夜。彼女がお風呂から上がるまでずっと外で彼女に話しかける。
深夜。彼女がトイレに行くのを送り迎えする。
「ないない、それは無い」
ぶんぶんと首を振るリョカ。それでもビアンカは訝しんでいる様子。
「それに、僕が好きなのは……」
もじもじしながら口を噤むリョカ。
好きと言える女性。リョカの知る女性など数えるほどしかいないわけだが、その中でそれを選ぶとなれば、およそビアンカしか考えられない。
「ビアンカちゃんだけだもん」
「ふ、ふ、ふーん。そうよね。そうなのよね……うんうん」
言ってしまったという様子のリョカに対し、ビアンカはさも当然という様子で胸を張る。ただ、しきりに眉が小刻みに震えているのが印象的であり……。
「アッ……」
ふと思い出すこと。
好きとキス。

不意打ちとはいえ、リョカは見知らぬ女性、アニスからキスをされた。

片思いするビアンカにすらされたことも、したこともないというのに、アニスとは……。

――大丈夫だよ。聖水で三分以内に口を濯いだし、それはキスじゃないはず……。

デボラの言葉を反芻するリョカだが、それは詭弁に過ぎないことを唇が知っている。

あのやわらかく、甘く、少ししょっぱい、ぬるっとした、気持ちが熱くなる行為。リョカの中であれは忘れられないことであり……。

「どうしたの？　リョカ……」

彼が神妙な顔付きであることにビアンカが声を掛ける。

「ビアンカちゃん！」

「はい！」

突然の声にビアンカはまるで驚いた猫のように背筋をきゅっとさせる。

「……キス……してもいい？」

7　魔物の潜む洞窟

「え？　なんで、突然そんなこと言われても……」
「駄目？」
真剣な表情で迫るリョカにビアンカは後ずさりをする。けれど、すぐに背後の壁に捕まり、拒もうと伸ばした手は優しく取られ、不自然に身体から力が抜ける。
「僕、ビアンカちゃんが、ビアンカが好きだから……」
彼のひとさし指が彼女の顎をそっと上向かせる。
「けど……んっ……」
逃げる力も拒む気持ちも無いビアンカは覚悟を決め、そっと目を瞑る。
彼の荒い鼻息が彼女をくすぐり、高鳴る胸が外に漏れるのではないかというぐらい鼓動を強める。
「ビアンカ、好き……」
その言葉と一緒に右手が強く握られる。そして……。
「リョカ、父さんちょっと出かけてくるから、お留守番頼むぞ？」
「え！　あ、はい！」
キス寸前といったところで突然の中断。二人とも目をぱちくりさせながらささっと身体を離す。
「ご、ごめん《…」
「ばか……」
互いにソレを言うだけが精一杯。暫く二人はそのまま視線をそらしていた……。

＊＊

「ねえ、どうしてビアンカちゃん、サンタローズに居たの？」
「パパのクスリをもらいにね……」

「そうなんだ……」
「うん。けどさ、なんかドルトン親方がこの前から戻ってこなくてさ。ずっといるんだ……」
「へえ、おばさんは？」
「ママは食堂のお手伝いしてる。私は他に行くところないし、ここの二階で遊ばせてもらってたの」
「そう」
「……」
「……」
先ほどのキス未遂が尾を引いているらしく、未だ二人は視線をそらせたままだ。たまに相手を見ようとしても直ぐに顔を赤くさせてしまい、やはりうつむいてしまう。
「ん？　親方はどこに行ったの？」
「えと、薬草を取りに村の北の洞窟……」
「あそこってまだ魔物がでるんじゃなかった？」
「そうね。でもスライムとかグリーンワームでしょ？　平気よ……」
「そうかな……。だってあそこって前にとっても恐ろしい魔物がいたって父さんが言ってた」
「でもそんな……え、でも……」
険しい表情のリョカに気おされ、ビアンカにもその不安が伝染しだす。
「父さんに知らせよう」
リョカはすくっと立ち上ぜると、階下目指して飛んでいく。
「あ、ちょっと待ってよ。あたしも行くってば！」
それを後からビアンカも追いかけて、二人仲良く階段を転げ落ちるわけで……。

＊＊

――旦那様は北の洞窟に行くといってましたが……。

サンチョの言葉に二人は意を決して洞窟へと向かっていた。
洞窟近くの衛兵の話によると二日前にドルトン親方が向かったっきりで、今久しぶりにパパスが入っていったとのことだ。
二人は衛兵の制止も聞かず、洞窟へと入っていく。

＊＊

前に魔物が積みついたとき、洞窟の天井に大きな穴を開けたらしい。そのおかげで洞窟の中は明るい。
もっともそれほど力強い魔物が潜んでいたというのは、この片田舎にとって恐るべきことなのだが。
「いけ！　ブーメラン！」
探検を妨げる魔物目掛けてブーメランを放るリョカ。致命傷を与えることなく追い払い、そのまま奥へと進行する。
「へぇ、リョカ、前よりブーメランの扱いかた上手くなったね。前はへろへろって感じだったのに……」
「うん。練習したし」
確実に強くなっているリョカに素直に驚くビアンカ。彼女はというと、台所にあったおなべのふたで襲い掛かるスライムを叩き落したりと、そ　なりの奮闘ぶりだった。
「ね、もしかしたら親方、例の魔物に襲われてたりして……」
「父さんはちゃんと人里はなれたところに行くように説得したって……」
「でももしかしたら……」
息を飲む二人。
ビアンカの想像通りなら、既にドルトン親方は……。
そもそも二人が対処できる程度の魔物ならば大人であるドルトンが不覚を取るはずが無い。例えば大きな怪我をしていたり、動くことも出来ない状況ならともかく……。
「ギヒャー！」

何かの叫び声が聞こえた。そして不自然に明るい洞窟の奥。何か大きな、複数の灯し火が見えるが、それらの一つが二人へと近づいてくる。

「あれは？　ろうそくのお化け！？」

子供ぐらいあるロウソクに手足が生えたもの。さらに目と口、頭に火を灯し、好戦的な様子でやってくる。

「いけ、ブーメラン！」

リョカはその頭の灯火目掛けてブーメランを放つ。火はふっと消え、ロウソクの魔物は突然の暗闇にあたふたしながら壁に激突し、動かなくなる。

「あんな魔物、ここら辺で見たことがないわ！」

「けど、そんなに強くないよ。急ごう！」

「うん」

二人は急いで洞窟の奥の灯火の群れへと走った……。

＊＊

「こっちくんな！　くそ！　コイツに火がついたら、わしもお前らも全員ドカンだぞ！」

洞窟の奥でロウソクのお化けに囲まれていたのは、岩を背負ったドルトン親方。

「おやかたー！　無事ですか！」

リョカはブーメランを投げながら、ビアンカもおなべのフタで火消しをしながら急ぐ。

「おお、パパスさんの倅か……！　って、いやいやいや、危ないから逃げなさい！」

「大丈夫、こいつらを倒せば！」

火の消えたロウソクの魔物は一時停止するが、まだ火の残る者が再点火することで復活する。もし倒すのならば、それは一度に「全部をやっつける」ことが重要だろう。

「それよりもドルトン親方こそ逃げてよ。そんな岩抱えてないで……!?　それ、もしかして！」

ドルトン親方の背負う岩。そこにはぎろりと二つの目があり、なにが楽しいのかニヒルな笑顔が見えた。

「爆弾岩！」

かつてサンタローズの村を脅威に晒した魔物。それは爆弾岩だ。普段は大人しい魔物であり、唯一使える究極自己犠牲魔法も使うこともそうそう無い魔物だが、もし強い衝撃や炎を浴びたら強制的にそれが発動するという、まさに爆弾だ。

リョカもビアンカもその恐怖にたじろいでしまう。

「そんなの置いて逃げて……」

源たところこのロウソクのお化けはそれほど強い火力があるわけではない。もし爆弾岩を起爆させるにしても、十数分の余裕があるだろう。

この洞窟もきっと崩落するだろうけれど、爆発の方向を出口の方に固定できるので、村への被害も小さくできるはず。

リョカはそう考えていたが、それはドルトン親方も同じだろう。だが、よくよく目を凝らしてみると、周りには親方の抱えるよりずっと小ぶりの爆弾岩が複数いるのが見える。

「まさか、親子？」

「そうなんじゃ……」

苦々しく呟くドルトン親方。彼がこの状況で逃げないのはそれが原因。もしこの親子が連鎖爆発を起こせば、村にまったく被害が出ないとは言い切れない。

「ねえ何か方法はないの？　そうだ。ブーメランでそいつら全員一度に倒せたりしない？」

「無理だよ。せいぜい二、三匹だ……いや、あるぞ……！」

リョカはブーメランを腰のホルダーにしまうと、両手で印を組み始める。

「大地を駆ける風の精霊よ、今、我は汝の力を欲する時なり……。

唸れ真空刃！　バギ！」
　リョカがロウソクのお化けに向かって両手を向けると、彼が大気中から集めた風の精霊の力が集い、軽やかな轟音と共に空間のひずみが見える。
「ギヒコ！！」
「グヘェ！」
　魔物達の悲鳴が上がり、灯火がどんどん消えていく。
「すごいすごい！」
　だがそのうちの一匹は物陰に隠れ、彼の真空魔法をやり過ごそうとする。
「ビアンカ、お願い……」
　魔法が終ると同時にビアンカもその炎を絶やすべく、フタを持って駆け出す。だが、
「メラ！」
「きゃっ！」
　突然の反撃とさらに味方への援護。ビアンカは何とかそいつの炎を消すも、近くに倒れていたろうそくの一体に炎が向かう。
「くっ！」
　もう一度唱えるべきか迷うリョカ。だが、霧散した風の精霊を再び集めるには、洞窟という無風に近い場所では困難を極める。
「もう、ヒャド！」
　すると女の子の声がした。これまた簡易詠唱の氷結魔法。いくら初等とはいえ、そうそう使いこなすことができるものではなく、ある程度の実力の裏づけが見える。
　リョカは一瞬昨日の女性、アニスを思い出すが、声質からそれが年相応の女の子だと推察する。
「ギョヘィ！」
　炎を託されたロウソクだが、それは突然の氷結魔法により潰えた。
　洞窟の中は差し込む弱い光のみとなるが、一同、ほっとしていた……。

**

8　セカンドキス

「まったく！　爆弾岩がこんなに居たら危ないじゃないの。どうしてすぐに逃げないのよ……」
洞窟を出たところで、窮地を救ってくれた子がリョカに向き直り、その頬を突く。
「だって、子供が居たから」
「そうね。ここに二人もね」
小ばかにした態度の女の子にビアンカはむっとして突っかかる。
「何よ、貴女だって子供でしょ？」
「なによ。おばさんは今いくつ？」
「十三よ！　貴女は！」
「うっ……十二……だけど、もう直ぐ十三だもん！」
どうやら彼女も年功序列には逆らえないらしく、たかが数ヶ月という年齢差にややしおらしくなる。
「十二なら僕と一緒だね。ありがとう。僕はリョカ。君は？」
とはいえ助けてもらったことも事実。リョカが礼儀正しく挨拶をすると、彼女も上機嫌になる。
「ふふん、感謝なさいよね！　もし私が来なかったら今頃みんなどうなっていたんだかね！」
「そんなことないわ！　きっとリョカのブーメランで倒せたもん！」
「なによ。そしたらまたメラで復活させられてたんじゃないの！？」
「そしたらまたあたしが……」
たれらばの堂々巡りになりそうなところで互いに視線をぷいっとさせる。
どうもデジャブを感じるリョカだが、余計なことは言うまいと決める。
「あれ？」

よく見ると彼女の髪は青だった。天然色というにはやや強い青だが、ボルカノが言う「怒りっぽい」ところやアニスの言う「とても可愛らしい」も当てはまる。

「ねえ、もしかして君、アニスさんの知り合い？」

「アニス？　聞いたこと無い名前ね……」

しかし、彼女は知らないと言い、リョカは見当違いかと首を傾げる。

「ねえ、それよりあなたの絵をくれないかしら？」

「絵？　やっぱりアニスさんの知り合いじゃ……」

「だから知らないってば……。それより早く頂戴ってば！」

「う、うん。わかったよ……」

「ちょっとリョカ、なんでこの子にあげるのよ！　必要ないってば、こんな生意気な子！」

「うんでも、約束したんだ。アニスさんって人と……。その人僕のことを助けてくれて……」

「「だからアニスって誰よ！」」

二人の声が重なり、面食らう　ョカ。

「アニスってのは昨日坊主とちゅーしたショタコン女だよっと……」

突然の声に皆辺りを見回す。まだ爆弾岩を背負っているドルトン親方は岩と目を合わせるが、お互い知らないと首を振る。

「ここじゃここ……っと……、はぁ、苦しかったわ……」

リョカの道具袋が動いたかと思ったら、例の赤い羽根トカゲが顔を出す。

リョカの眼前で滞空するシドレーに皆きょとんとする。

「シドレーじゃない。もう、アンタが居るなら急ぐ必要なかったわ。氷の息でいちころでしょ？」

「「え！？」」

その膠着を破ったのは女の子。名前を呼ばれたシドレーも、目を丸くさせ、羽ばたくのも忘れてリョカの服にしがみつく。

「なんでお前、俺ん名前知っとるの？　てか、氷なんて吐けないで

？」
「え？　だっけ？　あ、ほんとだ、色が違う。赤いシドレーだ……」
「赤ってお前、俺の色違いがいるわけ？　てか、まず自分誰よ？」
「あはは……まあ、そうね。正義の味方？」
「生意気な……ね」
得意になる女の子に対し、ビアンカは半眼で嘯く。
「なによ！」
「そっちこそ！」
「「ふんだ！」」
どうしてか仲の悪い二人。それもこうして無事だからこそなのだろうけれど……。
「そうだ。僕今日のこと絵に描くね。それをあげればいい？」
「ん……そうね。今日のはいいわ。これまでのを貰える？」
「じゃあオラクルベリーの絵をあげるよ。一緒に来て！」
「う、うん……」
リョカが手を引くと、その子は不意を突かれた様子で顔を赤くして、彼を追いかけた。
それをつまらなそうに見つめるビアンカだが、ふとあることを思い出す。
「ん？　ねえ、メラリザードのシドレーだっけ？　リョカがちゅうしたってどういうことかしら？」
「ああ、坊主がね。昨日助けてくれた綺麗な金髪のねえちゃんにぶちゅうってされたん。いやあ、坊主ってばモテルのね……てか、何人これいるの？　両手両足で足りなくね？」
空中で器用に両手両足の小指を立てるシドレーは「つり目、垂れ目、金髪、青髪、金ジャリ」と数えだす。
「ちょっと、金じゃりって何よ！　金じゃりって……」
「え？　そな自分のこと決まってるでしょ。自分、昨日の姉ちゃんと同じ、金髪だで？　んだけど、まだまだションベン臭いじゃりじゃし、せやから金ジャリな。我ながら名案じゃろ？」

ふふんと胸を張るシドレーに対し、ビアンカはその首を絞める。
「きー、くやしい！　なんなのよ！　もう～～！！」
「ぐへぇ、くるじい、坊主、たしけてぇ～～！！」
例の夜のことを思い出すのは、何もリョカだけではなく、ドルトン親方はその様子にほっほっほと笑っていた。

＊＊

「待ってろよ。もう少しで出来るからな……」
作業場に戻ったドルトン親方は弟子のモートンと一緒にすぐに作業に取り掛かった。
ダンカンのクスリを処方しながら、片手で爆弾岩の手当ても行う手際はなかなかのものであった。
「……なるほどな。子供産むんで里帰りしてたんな……。そこでアイツラに囲まれてってわけか……。まったくお化けキャンドルどもも迷惑な話だな……」
魔物の言葉がわかるシドレーは爆弾岩と何か会話をしており、三人はその翻訳に「へぇ」と相槌を打っていた。
「で、これから死の火山に戻るのな？　まあきいつけて行けな。といってもお前らに挑むバカも居ないだろうけどな！」
「笑いごとじゃないわよね……」
「そうね……」
爆弾岩という存在はやはり気分に良いものではなく、ビアンカと女の子の表情は硬い。
「この絵でいい？」
リョカは部屋から持ってきたスケッチブックから、異国のお城の絵を出す。
「これは？」
「わかんない。前に父さんに連れられて行った場所なんだ。サンパョおじさんも居るよ」

「あ、ほんとだ」
リョカが指差すところには中年小太りの男性が子供を抱えて立っている。
「君、サンチョおじさんを知ってるの？」
「え？　ああ、さっきあなたのことを探しに行ったとき、サンチョさんに聞いたのよ」
「ああ、それで……」
「うん。それじゃあこれでお仕事完了かな……。この絵、大事にするからね……」
「お願いね。そうだ、君の名前は……」
「私は……アン……。そうね。アンよ」
「アンさん？　そう。よろしくね、アンさん！」
「ん～、なんか変ね……まあいいわ。また会いましょ」
アンはそう言うと青い髪を煩そうに掻き揚げ、立ち上がろうとする。すると……。
「んなあほな～！　自分、怖い顔して、大概にしなさいな！」
爆弾岩と盛り上がっていたらしいシドレーが空中でくるくる回りながらアンにぶつかり……。
「きゃっ！」
「危ない」
リョカがそれを支えようとしたとき……。
チュッ！
互いの唇がまるで引力でも発しているかのように近づき、重なってしまう。
「え～～！！」
最初に反応したのはビアンカだが、その間実に八秒。みるみるうちに二人の顔が赤くなり、アンはリョカを突き飛ばして、腰につけた道具袋せら聖水を取り出し、勢い良く嗽を始める。
「ちょっとリョカ、ほら、ここに聖水あるから、直ぐに嗽して！　ほら、はやくしないと！　三十秒以内ならノーカンにできるから！」

地方によってキスのリセットまでの猶予時間に違いがあるらしい。
リョカは言われるままに嗽をはじめ、外へと走る。
「んもう！　これならさっきちゃんとしとけば良かった！　リョカの意気地なし！」
ビアンカは作業場を走り出る二人の後姿を見つめながら、天に向かって叫んでいた……。

＊＊

「べっ、べっ、べっ……」
「はぁはぁはぁ……」
外にでて濯いだ水を吐き出す二人。リョカは笑顔だが、アンは怒ったまま。
「ちょっと、なんでアンタまで濯いでるのよ……。この変態！」
「変態って、僕はただ、ビアンカに言われて……」
「んもう！　人のファーストキス奪っておいて！　この変態！　ロリコン！　近親相姦！　極悪人！　鬼畜！　スケコマシ！」
「そんなに言われるほどかな……」
理不尽な気持ちになりながら頭を掻くリョカ。だがアンにしてみればそれは大層なことらしく、嗽を終えた後も唇を拭う。
「ふんだ！　人のファーストキス奪っておいて！　だいっきらい！」
そう叫ぶと、彼女はべこかへと走りさっていった。
どうやら聖水で濯ぐだけでキスの記憶をリセットできないのは、彼女も同じらしい。問題は好きと告白した相手。ビアンカがどう思うかということであり、リョカは後ろを振り返るのが怖かった……。

＊＊

ダンカンの風邪薬を処方してもらった翌日、ビアンカ母子はアルパカへと帰ることになった。
とはいえ、いくら凶悪な魔物が居ないとしても女子供の二人旅が

危険であることに代わりはなく、パパスが送ることとなる。
「すみませんねぇ。アルパカなんて目と鼻の先なのに……」
「いえいえ、何か間違いがありましたらこのパパス、一生の深くですから……。それにまだリョカもビアンカちゃんとお別れをしたくないように見えますし……」
リョカはビアンカの外套の裾を掴み、必死で何かを弁解している様子だが、当のビアンカは取り付く島もない。
「ふふふ……そうですね……。うちの娘もリョカ君とケンカ別れになったら後悔すると思いますし……」
ビアンカの母――ジルバ・ルードはそういうと口元を抑えておほほと笑う。
「それでは参りますか」
「ええ……」
パパスが先立って歩くと、ジルバ、それに続いてビアンカも村を出る。リョカはただ情けなく「あれは事故だってば～」と言い、その肩ではシドレーがつまらなそうに欠伸をしていた……。

＊＊

もの影からそれを見つめる女の子が居た。
「間違いないわ。あの子はきっと強い戦士！　あの青い髪の子も欲しいけど、どこかに消えちゃったし……。でも、あのアンディって子も誘って三人なら……。よし、急いで報告しないと！」
紫の髪をなびかせる彼女。人とは違う、長く尖った耳が特徴的で……。

9　アルパカの宿屋

「リョカ、行ったぞ！」
「はい、父さん！」
草原を走る赤いねずみ。それは普段台所をちょろちょろするものなどではなく、人間の赤ん坊くらいの大きさがあった。
孤立したリョカなら御しやすいとみたのか、彼に駆け出し、鋭い牙を剥く。
リョカは今回の旅の前に新調してもらったカシの杖を地面に突きつけると、ソレを足場に大きく飛ぶ。
目標を失ったお化けねずみはきょろきょろと辺りを見るが、上空からの影が大きくなり、銅製の剣の腹で頭を強烈に打ち込まれる。
「ギピィ～」
お化けねずみは頭を抱えて逃げる。すると劣勢を感じ始めたほかのねずみも逃走を始めた。
「ふむ……。なかなかやるようになったな。リョカ」
「はい、父さん」
自身の成長を認めてもらい、リョカはとても嬉しそうだった。
パパスは剣に残る油と血、毛を拭うと、大柄な両刃の剣をしまう。
「何故命を助けた？」
「え？　それは……、可愛そうだから……」
「そうか……。そうだな」
父はグリーンワームを二体、スライムに触手の生えた亜種であるホイミスライムを一体屠っていた。
その亡骸は弔われることもなく、餌を待つカラスがわさわさと集まってくる。
リョカは自分が「かわいそうだから命を奪わない」ということが、暗にパパスを責めているかのようで、それが心苦しかった。
「リョカ。今はそれでいい。お前が心優しい子に育ってくれて、父

は誇りに思うぞ」

そう言って頭をクシャクシャとしてくれる父。力強く、優しさを持ち、また厳しさを併せ持つ父のそれが嬉しかった。リョカは笑顔に戻ると、父を真似て折れた剣をしまう。

最近、パパスはリョカを積極的に戦闘に参加させていた。特別強い魔物がいないことのもそうだが、リョカの成長をパパスは見誤っていたと認識していたからだ。

息子は強い、いや強くなれる素質がある。

呪文も簡易とは言え治癒魔法、真空魔法を使えるようになっている。

そして、己を守り、さらには敵すら守ろうとする戦い方。

先ほどのお化けねずみもそうだ。闇雲な突進など、カシの杖でやわらかい腹を突けば手間も掛からずに絶命させられたであろう。けれど、彼は空中から壊れかけた銅の剣の平たい部分で一番堅いであろう頭蓋を殴った。哀れな剣は折れたが、ねずみは一目散に逃げていったわけだ。

アクロバティックな戦い方などサーカスに任せておけばよい。重要なのは「そうすれば命を奪わずに済む」という戦い方を即座に実行できること。

「よし、先を急ごう……」

そして、心配なのは、これから先彼が守るべきもの背負いながらもその戦い方で生き延びられるかということ。リョカが生き残ったとして、悲劇を背負うのならば、それは父と同じ苦しみを持つことになる……。

パパスはそのことが心配だった……。

＊＊

アルパカの村へとたどり着いたのは出発してから次の日のお昼過ぎ。途中魔物に襲われること数回、その対処に手をかけたのだ。

「本当にありがとうございます。パパスさんが居てくれて本当に心強かったですわ！」

ジルバは宿の奥の応接間で二人を労っていた。

「コイツなら魔物だって近所のおしゃべりでなんとでもできるもんですがね……」

病床にあったダンカン・ルードもゴホゴホと咳こみながらやってきて頭を下げる。

「何言ってるのよ、お前さん！　ほら、ドルトン親方特製のクスリをもらってきたから、さっさと飲んで寝てしまいよ」

「ああ、だが……」

ダンカンも亭主として妻のボディーガードをしてくれたパパスに感謝を示したく、無理をしているのが見える。

「まぁま、ダンカン殿もクスリを飲んで、しっかり風邪を治してくれ……それでは私はこれで……」

そう言って立ち上がるパパスだが、ジルバはそれを慌てて制止する。

「お待ちください。今村に着いたばかりだというのにもう戻るというのですか？　せめて一日ぐらいおもてなしをさせていただきたく……」

「そうですか……」

パパスはリョカのほうをチラりと見る。彼はまだビアンカと仲直りが出来ていないらしく、先ほどからビアンカを見ている。それは彼女も同じらしく、何かを訴えかけてくる視線にパパスが折れた。

「それではお言葉に甘えて……」

その言葉にリョカ、ビアンカの顔がぱっと明るくなる。

「ささ、それでは二階の特別室へどうぞ……」

「いやいや、私達はそういう豪華な部屋だとかえって寝付きが悪くなります。どうか普通の部屋で……」

「はいはい只今！」

ジルバこそ休む暇なく駆け出すと、シーツ片手に宿を闊歩した。

「ママ、私リョカと遊んでくるね！」
「ええ、ええ、仲良たね……」
「行こ、リョカ！」
「うん……」
二人の中のもどかしさが、少し薄れていたような……。

＊＊

村の中を探案内されるリョカ。道具屋で旅の必需品を買おうとしたらシドレーがリュックから顔を出してしまい、ビアンカが慌ててそれを追いかける。
リョカとしてはシドレーよりも二人きりで居たかったので、非常に不機嫌な様子。そんな折、店内を見回すと赤いヘアバンドが目に入った。
「これいくらですか？」
「ん？　これは十二ゴールドだね。まあ、もう古いものだし七ゴールドにしてあげるよ」
「本当ですか！」
リョカは先ほど買った薬草と交換でヘアバンドを手にする。
これをビアンカにプレゼントしてあげたら、きっと仲直りが出来る。今も仲直りの最中ではあるが、きっともっと深い仲になれるのではないか？　そんな甘い期待を持ちながら、リョカは揚々と店を出る。

＊＊

10　ネコとイジメと好きな人

「ちょっと、やめなさいよ！　可哀想でしょ！」
町の中にある公園に人だかりが出来ていた。その中心で聞き覚えのある声が聞こえる。
リョカは騒ぎの中心にビアンカが居ると知り、子供達の合間を縫って向かう。
「ビアンカちゃん！」
「あ、リョカ！　聞いてよ！　こいつら、猫を苛めてるのよ！」
「猫！？　え？　あれが……？」
ビアンカの指差すほうを見ると、黄色の毛並みに茶色いまだら模様のある、猫といえば猫なものがいた。頭は真っ赤な毛がふさっと生えており、ぼろぼろになりながらも懸命にいじめっ子を威嚇していた。
「ほら、男でしょ！　がつんと言ってやって！」
肩を押すビアンカに無理やり騒ぎの中心に出されるリョカ。この数ヶ月で確かにたくましくなっていたリョカだが、それはあくまでも魔物相手。単純な力なら彼らに負ける道理も無いが、力で解決する気にもなれない。
「あの、そういうのはやめたほうがいいよ」
「なんだようっせーな！　よそもんはひっこんでろ！」
いじめっ子の片割れがリョカを突き飛ばす。不意を突かれたリョカはそのまましりもちを着き、その様子に周りから笑いが起きる。
同い年の子に囲まれ、笑われる経験の無いリョカはどうしていいかわからず、ただ照れ隠しに苦笑い。
「もう、リョカったらだらしないわね！　ほら、いつものようにブーメランでも魔法でも使えばいいでしょ！」
魔法という言葉に一瞬どよめきが走る。
子供でも魔法を使える者はいる。だが、それは極めて一部であり、

富裕層や職業軍人、魔法使いの子供がほとんどだ。たまに独力で覚えるものもいるが、それもせいぜいホイミや照明魔法のレミーラなどの「使えたら便利」という程度のものしかない。

攻撃に使う魔法が使えるとなると、それは脅威の対象だ。

「おい、まじかよ……本当に使えるの？」

「いや、そんな危ないことはしません……」

リョカとしてもあまり目立つことをするのは好きではなく、また大勢の居る中で真空魔法などを放てば、たとえ微弱であろうと良い結果を招かないことを知っている。だから隠そうとしていた。

「リョセはねえ。お化けキャンドルに囲まれたとき、あたしを守るためにバギを使ってみせたのよ！　まあ、一匹は逃がしちゃったけど、でも本気になったら怖いんだから！」

だが、彼女は得意気に胸を張り、るでで自分のことのように言う。

そのそばでリョカはどんどん小さくなっていく。

「へえ……真空魔法ねえ……。お化けキャンドルねぇ……」

いじめっ子の片割れは面白そうに二人を見る。それを見ていない者からすればにわかに信じがたいことであり、それは周りも同じこと。

ひそひそ声が高まり、やがて「うそつき」と囁かれ始めるのも自然なこと。

「な！　本当だってば！」

「ビアンカちゃん、うそつきだ！　うーそーつーき！」

そして始まるうそつきコール。ビアンカはすぐに顔を真っ赤にさせ、「本当だもん」と声を裏返す。その瞳には涙が浮かんでおり、それをみたリョカは心が痛んだ。

「よーし、そんじゃあさ、嘘じゃないんならお前らちょっと頼まれてくれよ。この村の北にレヌール城ってあるだろ？　あのお化け城だ。あそこに最近お化けキャンドルが住み着いてるんだ。それを根こそぎ退治してきたら信じてやるよ」

「本当？」

「ああ。そうさ。たとえ真空魔法が使えなくても、あんだけの数を倒せたらそれ以上だしな！　どうだ？　やれっか？」
「ねえリョカ……」
「僕は……」
思い出されるのはここ最近の冒険劇。自身を過信し、デボラやビアンカを危険な目に遭わせたという事実。彼は首を縦に振ることに躊躇してしまう。
「もし退治したらこの猫を苛めるのやめてやるよ！」
「ねえリョカ！」
「だって……」
だがリョカは……。
「もういい！　あたしがやる！　あたしが一人で行ってお化けを退治してくるわ！　そんなの簡単よ！」
「ビアンカちゃん、危ないよ」
「うるさい！　意気地なしは宿で布団被って寝てなさい！」
ずんずんと遠ざかるビアンカにリョカが慌てて追いかける。しかし、心無い子の足にかかり、転んでしまう。その拍子に例の赤いヘアバンドがこぼれる。
「あっ……」
「リョカ！？」
物音に振り返るビアンカは駆け寄るべきか逡巡する。
「なんだ？　これ……。うわ、古くっさ……だっせ～！」
一人がソレを拾い、しげしげと見つめたあと、それをブーメランのように放り投げる。
「返してよ、それ、ビアンカちゃんにプレゼントするつもりなんだから！」
リョカはそれを追うが、無常にも空を舞い別の子に……。
「そんな古臭いの似合うの、うそつきビアンカぐらいだな！」
その言葉とリョカのだらしない態度に、ビアンカはプイとそっぽを向き、歩を急がせる。

すると、ちょうど道を塞ぐように立っていた子を突き飛ばしてしまう。
突き飛ばされた子は膝をすりむいたらしく泣き出してしまった。
「あ、大丈夫!?」
リョカはヘアバンドを忘れて転んだ男の子に駆け寄り、その傷を見る。
傷口に尖った釘が刺さっており、赤錆が血にまみれていた。傷口こそ浅いが、破傷風の可能性も心配される。
「痛いよう！　痛いよう！」
「ちょっと我慢してて」
リョカがソレを引き抜くと男の子は苦痛に顔を歪める。
「大丈夫。待ってて……」
両手で印を組み、船旅の合間に一通り読んで覚えた呪文を詠唱する。
「浄化の風よ、この者を蝕む壊疽の呪いから開放せよ……キアリー……」
静かにゆっくりと風が集まり、傷口から黒いモヤが出て、そのまま霧散する。
「あとは……ホイミ……」
簡単な印を結んだあと、詠唱を省略して治癒魔法を唱えた。
膝をすりむいた程度の傷口は直ぐに回復を始め、薄いピンクの皮膚が塞ぐ。
「あとでちゃんとルビス教会の神父さんに見せてね……」
「あ、ありがと……」
二種類の魔法を即座に詠唱するリョカに向けられるのは感謝の瞳と奇異の目が多数。
「それと、ビアンカちゃん、怒りっぽいところあるけど、本当は優しい子だし、嘘なんて言わない。信じてほしい」
「うん。信じる……」
呆然とする男の子だが、リョカのその実力が本物であることはわ

かる。きっとこの旅の男の子は初等真空魔法を使えるだろうと……。

＊＊

その日の夜、ビアンカは一言も口をきいてくれなかった。
ただ寝る前に一言だけ、「あの子は大丈夫だった？」と聞いてきたので、「うん」と答えた。
彼女は「明日、謝るから心配しないで」と言い、それっきり。

＊＊

「ねぇねぇ、起きてよ……、旅人さん、起きてってば……」
誰かが窓を叩いていた。誰だろう？　男の子とはわかるけれど、それ以外はわからない。
「ん～、だあれ？　デボラさん、またおしっこ？」
寝ぼけ眼を擦りながら起き上がるリョカ。窓を開けると、そこにはお昼に助けた男の子がいた。
「君か。もう足は平気？」
「うん。けど、そうじゃなくて……」
男の子はおずおずと赤いヘアバンドを差し出してくれた。それは土汚れこそ落ちているものの、どこか朽ちかけた箇所のある惨めな様相をしていた。
「ゴメン。探して洗ってきたんだけど、汚れちゃったんだ……」
すまなそうに言う男の子にリョカは笑顔で「ありがとう」という。
この古臭いヘアバンドをビアンカは受け取ってくれるだろうか？
ダサい、汚い、壊れかけ……。
「ビアンカちゃんに酷いことしちゃったし……」
そういう次元ではない失態を犯していることぐらい、リョカにもわかる。
「そのビアンカさんのことなんだけど、一人で行っちゃったんだ！」

「どこに？」
「レヌール城に……。僕がこれを探してたら、ビアンカさんがこっそり衛兵の脇をすり抜けていくのが見えたんだ」
「な！」
リョカは心底驚いた。今日の夕飯をまだ日が沈む前に済ませたビアンカ。彼女はお風呂に入ると、そのまま布団に入ったはず。それは、こうして夜に町を抜け出すための準備だったのではないか？
「どど、どうしよ！」
パパスに報告すべきか？　だが、父は調べ物があるらしく、夕飯後から外している。アルパカの町並みに詳しくないリョカが探すのは困難というものだ。
「ねえ旅人さんは強いんでしょ？　お願いだよ。きっとビアンカさん、キンタとサンタの言うこと真に受けて行ったんだよ！　だから……」
「う、うん。でもお城の場所が……」
「僕が近くまで案内するから……だから！」
男の子はぶるぶる震えながら懸命に言う。女の子を一人、お化けの巣窟に行かせたことを後悔しているらしく、その責任で奮い立っているのだろう。
「そう、お願いするよ！」
リョカは道具袋を取ると、寝ていたシドレーごと宿を出た……。

＊＊

11　レヌール城

「なあ坊主。あのな、あの猫なんじゃけど……」
道具袋で揺られるシドレーは、腕で枕を作りながらリョカに言う。
「ねえ、どっちのほう？」
だが、リョカはそれどころではなく、後からついてくる男の子をいらいらしながら待っていた。
「うんと、あの一本杉を目指したところなんだ」
平均的な体力しかない男の子にリョカを先導するのは無理というもの。おおよその場所を聞いたリョカはシドレーを袋から取り出す。
「わかった。ねえ、シドレー、この子をアルパカにまで連れて行って！」
「ええけど、んでも、あの猫は……って話は最後まできけー！」
走り去るリョカの後ろにむなしくシドレーの声が響いた……。

＋＋

かつてはアルパカ方面を統治していたレヌール国。
東国と西国を結ぶ中継点として栄えていたが、巨大にして凶悪な魔物により壊滅的な被害を受けた。
その後、魔物は封じられたが、領地はぼろぼろ。
当時の王は「城ありて国無しなど滑稽」と言い、これまでに蓄えた王家の私財を投げ出し、港の整備を行った。
そのおかげで現在も港街レヌールとしてアルパカの西に存在する。
ただ、王には子供が居らず、王家はそのまま断絶してしまった……。
紅茶の好きな王様だったという。

＋＋

暗い……というよりは黒い場所。一筋の明かりも見えない。
城が見えるころは月明かりが見えた。しかし、正門をくぐったところで突然の雷がなり、激しい雨音がし始めた。
そのまま逃げるように城へ入ったビアンカを待つのは浮遊する幽霊。
人の姿を模したそれはどういう理屈か黒の場所でもよく見えた。
それは彼女の頭を掠めるように飛び交い、ある場所へと誘導していた。
その場所とは……おそらく「箱」の中だろう。
「よい夢を……ラリホー」
暫く喚いたところで息苦しくなり、次第に……眠くなった……。

＊＊

リョカがたどり着いたとき、月明かりは群雲に隠れていた。
朽ちかけた城は外壁がところどころはがれ、たまに骨格がむき出しになっていながらも、今もなおそこにいた。
――ここにビアンカが！
今のリョカの畏れるものはない。彼は正門へと走り、そのドアを蹴る。しかし、それはびくともせず、まるで魔法による封印でもされているかのようで、彼の侵入を妨げた。
――く！
リョカは心の中で毒づくと、周囲を伺いだす。
どこかに別の入り口がないかと歩き回ること数秒、裏手に螺旋階段を見つけた。
ここを登ることで活路があるかは定かではないが、それでも焦る気持ちが後押しし、リョカを急がせた。
飛び飛びの階段を超え、リョカは走る。そこに何が待ち受けているのかなど恐れもせずに……。

螺旋階段を上りきると、内側に入れそうなドアを見つけた。リョカは遠慮なくそのドアを蹴破り、中へと向かう。

その時、かすかな物音がした。

魔物だろうか？　違う。こちらに対する敵意が無い。言うなれば好奇心が近いだろう。

リョカはその気配を無視し、さらに奥へと抜ける。

するとバルコニーに出た。

注意深く見ると通用路があり、リョカは進む。

もしかしたら誘われるまま、誘いに乗っているのではないか？

そんな焦りが出始めた頃、何かが視界を横切った。

「誰だ！」

それはリョカに気付かれたことに慌てて走り出す。通用路を走り、角を抜ける。この先がどうなっているのかはわからないが、それほど逃げ足が速いようにも見えない。

どんどんと距離が縮まり、次の角を抜けたところで追いつきそうになる。

リョカは角を曲がろうとしたそれに手を伸ばす。

「捕まえた！」

しかし、それは不自然にすり抜け、薄ら寒い感覚を残す。

「え！？　魔物じゃない！？」

リョカの知るこの世の存在といえば人、ホビット、魔物に動物など、生きているものが基本。

幽霊というのは大概無数の発光体の魔物が集まって出来ているものと認識しており、そこに手ごたえは薄いながらも必ずあると思っている。

だが、今こうしてすり抜けたそれは、かすかな手ごたえさえない存在だった。

抵抗の無い冷たい空間。そんな印象だった。

「ここまで来るとはなかなか度胸のある小童じゃの」
よく見ると、その存在は老人であり、貴族が着ている豪華な服に身を包んでいた。
「あなたは……？」
「ワシはレヌール城の王様……。元じゃけどな……」
「レヌールの王様？　となると、あなたがお化けキャンドル達を！？」
リョカはカシの杖を構える。正直なところ、この存在とまともに戦えるかといえばそれはわからない。悪意の集合体を浄化する魔法の存在は聞いたことはあるが、詠唱方法も使役方法も知らない。
「いやいや違う！　ワシじゃない！　ワシじゃない！　ワシはただ、后とのんびりここにいたんじゃよ。そしたら親分ゴーストとか言う魔物が現れてな、この城を乗っ取ったのじゃ。ワシはただ、あいつを何とかしてもらいたいなあと思っていただけで……」
「そうですか……。でも僕はビアンカを探しに来ただけで……」
ドンゴロガッシャーン！
激しい稲光がして、リョカは一瞬言葉を失う。
「はて、アイツをなんとかしてもらいたいなあって思っていただけなんだが、おぬしなら……」
「お～い坊主！　送り届けてきたで。まったく、えろう探したぞい！　ほら、はようあの金ジャリ探しに行くで！　……なんやこの小汚いおっさん。浮浪者かい？　ごっついパジャマきおってからに……、一体どこのおのぼりさん？　オマケに透けてるわでキモイし……。ほらほら、こんなんええからはようはよう……」
ドンゴロガッシャーン！
再び激しい稲光がして、それはシドレーを焦がす。
「ぎひゃー！　あちち！　ななんじゃい今の！　やべ、目え飛び出るかと思ったわ！」
「勇気ある少年よ……。ワシの願い、聞いてもらえるかな？」
「は……はあ……。ビアンカを探すついでにきっと……」

「うむ、ありがとう！　きっとそう言ってくれると思っていたわい！」

嬉しそうに笑う王様は、透けていながらも自分を触ることは出来るらしく、あごひげを梳いていた。

「なんじゃ、この爺さん、俺らが首縦振るまでこの茶番続けるつもりやったんじゃないか？」

「多分ね……」

毒づくシドレーだが、これ以上雷に打たれるのは辛いと、リョカの袋の中に隠れる。

「さて、こっちへ来てもらおうか……」

王様はそう言うとリョカに向かって指を鳴らす。すると彼の身体がふわふわと浮き上がり、三階にあたるテラスへと運ばれる。

「おっおっなんじゃ？　これ、俺も知らん魔法だど？　コイツ、ほんまはすごい奴なんじゃないんか？　つか、さっきいうとった親分何とかなんてコイツ一人で倒せると違うか？」

「ん～、さっきの雷撃といい、僕もそう思う……」

奇妙な浮遊感にむずむずした不安を感じつつ、リョカはシドレーに同意する。

「む～ん。すまんがワシ、暗いところ苦手で……。せっかくの力があってもあの親分ゴーストのところにいけないんじゃよ……」

「そうなんだ……はは……」

「なんじゃい、その中途半端な能力は……」

悪態をつくシドレーだが、半眼で睨む視線に気付き、そそくさと袋に隠れる。

「で、その親分ゴーストはどこに？」

「うむ、わしが手を出せないことをいいことに、城の中心部に居るわい。まあ、奴らの手勢が外に出ようとしたら、ワシの雷でいちころじゃがな」

「力関係は拮抗してるみたいだね」

「そうじゃな。じゃが、ワシも人間であったときの癖で転寝をする

ことがあるんじゃよ。すると、その隙をついてお化けキャンドル達が外へ出るわけだ」
「ああ、それでサンタローズにも……」
リョカは田舎の村に突然沸いたお化けキャンドルに頷く。
「それじゃあ行ってきます。そうだ王様、ビアンカの居場所とかわかりませんか？」
「さっき入ってきたおじょうちゃんかな？　金色の髪の……」
「うん！　そのこ！」
「そうじゃな、直ぐには殺されることはないだろうけれど、急がないと危険とだけは言っておこう」
「どあほ！　それを先言わんかい！　ほれ、リョカ急ぐど！」
「うん！」
シドレーは袋から出ると、闇を切り裂くべく小さな炎を吐いた……。

＊＊

12　箱の中

朽ちかけた城はあちこちに穴があった。リョカはそれを利用しつつ、城の中心部であろう方へと向かう。

その途中、シドレーの炎に誘われるかのように次々と魔物がやってくる。

海蛇の骨に人の頭骨をすげられ、そこに悪意が集まって動体をなすスカルサーペント。

発光物質を集め、それを悪意が指揮をとるウィルオウィスプ。

イタズラな生命体のゴースト。

これまで見たことが無い魔物を前に、一人と一匹は怯むことなく突き進む。

炎が闇を切り裂き、真空魔法が敵を霧散させる。

最初闇雲に進んでいたリョカ達だが、徐々に攻勢が激しくなる場所こそめぼしいと見抜き、先を急ぐ。

その推測は正しかったらしく、一際大きな扉を開けた時、一人異質といえる雰囲気をかもしている魔物を見つけた。

「お前がここのボスか！」

「ち、違います。違います。あたしゃただの魔法使いでげす。ここに座っているだけでいいって言われて……、親分ゴーストならもう逃げていまして……」

リョカが問うとボスはもろ手を挙げて平謝りをする。

「なんじゃい、気が抜けるな！　ま、俺ら無敵のコンビにゃ、たかが幽霊のボスなんざ尻尾巻いて逃げるほかあらへんしな！」

豪快に笑うシドレーだが、リョカは違う。

「でも、もし外へ逃げたのなら王様の雷が落ちるよね？　そうじゃないってことはコイツが嘘をついてるんじゃ……」

「あ～、かもな」

一人と一匹は、暗がりに隠れる魔物に武器や牙を構え、じりじりと距離を詰める。
「ビアンカちゃんを出せ！」
「ち、だまされていればよいものを！」
魔法使いを名乗っていた魔物はどこからか杖を取り出し、炎の塊を中空に作る。
「メラミレベル……というには、まだ弱いな……。危ないど、坊主には」
「はっは！　死ね！　メラミ！」
魔法使いの放つ火炎の塊にリョカはさっと身をかわす。だが、シドレーは微動だにしない。
「シドレー危ない！」
「ん～ん。全然……！」
シドレーは大きく口を開くと、カッと閃光を走らせる。それは魔法使いのメラミを飲み込み、逆に押し返した。
「な！　なんじゃって～！」
突然のことに驚く魔法使い。だが、容赦なく炎が彼を襲う。
「きひぃ！」
寸前で何とか避けるも今のが最高の魔法だったらしく、油汗をかく。
「おうおうリョカ。俺のこと散々メラリザードとか言ってくれたな？　どや。俺のメラは！　すごい威力だろ？」
ニヤニヤと笑うシドレーにリョカは「はいはい」と返すのみ。
「けどま、今のが全力なら、坊主が下がるだけで完封やど？　どうする？　自分」
「く、っくっくぅ……。だが、あの女の子はどうする？」
「金ジャリか？　まあそれ言われると辛いな。んでも、それ切り札になると思うん？　もし金ジャリ死んだら俺も坊主も手加減なしやで？　外も爺さん居るしな」
「なっ！」

「金ジャリ生きてる限りお前も生きてられる。けど、もしそうなったらなあ……」

シドレーは親分ゴーストの惑わしに乗っかるつもりは無いらしく、ふんと火の息をだす。

「シドレー、あんまり刺激しないで……」

対し、ビアンカの生死がかかる状況にリョカは、シドレーを諫める。

王様の話によればビアンカの生殺与奪があちらにあるのがネック。リョカとしては難しい状況だった。

「わ、わかった……。それじゃあこうしよう。その子の元へと案内する。その代わり、俺を見逃してくれ」

「わかった」

即答するリョカにほっとする魔法使い。彼は壁伝いに立ち上がり、暗がりにある紐を引っ張る。すると突然リョカの足元が開き、そのまま真っ逆さま。

「わ〜！！」

「おいリョカ！　おまえ、嘘言うたな！」

再び炎を溜め込むシドレー。けれど、

「ラリホー！」

睡眠魔法を唱えられたシドレーは目をしばたかせ、そのままふらふらと奈落へと消えた……。

「へっへっへ……これでお前らは餌だ……」

ほっと一息つく魔法使い――ではなく親分ゴーストは再び漆黒の闇に隠れた……。

＊＊

何か無数の手で押される感覚だった。そして狭い何かに突っ込まれる。

一つ一つが弱いにも関わらず抵抗ができない。

いつの間にか服をはがされ、冷たいものが肘や膝、太腿に当たる。
箱のようなものに閉じ込められているようだった。
それもすごく狭い。それに何かある。ちょっぴり温かく、やわらかいものだ……。
――なんだろう……。
暗がりの中、手を伸ばす。やわらかいものに触れると、それはびくっと動いた。
魔物だろうか？　いや、それなら身動きが出来る状態で一緒に閉じ込めるようなことはしないだろう。
さらに手で弄ること数回、やわらかく、しっとりとしたそれは、甘酸っぱい香りを放つ不思議な存在だった。
「何？　これ……」
リョカは正体を探るべく、両手で弄る。すると、そのモノが不意に意識を持ったらしく動き始める。
「誰！　人のお尻を触るのは！」
それはビアンカの声だった。
「僕だよ！　ビアンカ！　僕だよ！」
リョカは驚きと安堵の声を上げるが、
「このスケベ！」
ビアンカの手がリョカの太腿を思い切り抓っていた……。

＊＊

暗闇の中を過ごした二人。荒かった呼吸も収まり始める。
「ビアンカちゃん……」
「なに？」
「なんでもない……」
「そ……」
先ほどから何度も繰り返される問いかけ。本当は何か言いたいのだが、何を言えばよいのか見当がつかない。

本来、今逼迫しているのはこのがんじがらめの状況なのだが、今のこの箱の中は青臭く、快楽の残滓と倦怠感がだけが充満していた。

二人はもうただの友達ではない。いけないイタズラを共有した間。

「どうしようね……」

「さぁ？　でも、また……」

ビアンカの言う「また」の意味はリョカもわかっている。そして、もう一度それをされたいのか、身体が熱を持っていた。

たまにビアンカはその存在を玩び、くすぐり、彼を挑発する。リョカは彼女の太腿にキスをしてそれを諫めていた。

「……なんだ？　なんかこの箱、煩えぞ！？」

外から何か声がした。人、魔物というにはなにか不思議な感覚の声。男のような女のような……それが同時に一人の口で放たれたような不思議な声だ。

「ここには人間の子供をしまっていたはずだぞ？　もう起きちまったか？」

どうやら二人は調理を待つ状況だったらしい。

「ちょっと見てみろ。久しぶりのつがいだし、暴れられたらめんどうくせえ。もう締めちまおうか？」

笑い声のあと、箱の上のほうがぎぎぎと開き、暗い中でも何かが覗き込むのがわかった。

「メラ！」

その隙間から初級火炎魔法を放つビアンカ。覗きこんでいた魔物は驚き、二人を閉じ込めていた箱を放り投げる。

「くそ、このガキども！　料理の前に血祭りにしてやる！」

放り投げられたとき、箱が壊れ、リョカが裸のまま飛び出す。再び放たれた火炎による一瞬の明かりの下、武器となりそうな棒を見つけ、料理長らしき魔物に切りかかる。

「だあああ！！！！」

人間の骸骨にしては大きすぎる存在だが、その分、密度が薄いらしく、リョカの一撃で粉々に砕ける。

「ぐわぁぁ！！」

「やばいぞ！　料理長がやられた！　逃げるぞ！」

あまり統制の取れた魔物ではないらしく、それほど劣勢というほどでもないのに、一体が派手に砕かれたことで散り散りになる。そして聞こえる雷鳴の音。どうやら王様が雷で、出てくる魔物を滅しているらしい。

12　箱の中（後書き）

この話には削除された箇所があります。

13　光る玉

「ふう……なんとかなった……」
「みたいね……」
ほっとしたのかその場にしりもちを着く二人。
リョカは月明かりの差し込む中、ビアンカの無事を確認しようと振りかえる。
「こっち見ない！」
「あわわ、ごめんなさい」
振り返ったリョカにビアンカの声が響く。料理されかけた二人は素っ裸であり、いくら暗いとはいえ、黒が薄れた今、目を凝らせば体のラインが見える程度になっている。
リョカは慌てて周囲を探り、古びたドレスや礼服を見つけると、ビアンカに投げる。
「なんか、ほこりっぽい……」
「そうだね……でも、裸でいるよりはいいよ……」
「まね……」
リョカにも彼女の裸を見たい気持ちがあったのだが、それを言えばどうなるかわかっているので口を紡ぐ。
なれない燕尾服の袖を通し、武器になりそうな麺棒を手にする。
「あの親分ゴースト、絶対に許さない！」
自分どころかビアンカまでこんな目に遭わせたことに強い憤りを感じるリョカは、螺旋階段を駆け上る。
「待ってよ、リョカ！」
ビアンカも駆け出そうとしたが、ふと違和感を感じ、スカートを捲る。
何かが股間を伝うのを感じたあと、彼女は火炎魔法で明かりを取り、それが消えると同時にペタンと座り込んだ。

＊＊

再び親分ゴーストのいるであろう部屋へやってきたリョカ。彼は手近な窓から全て開け、月明かりを部屋に入れる。

「さあもう逃げられないぞ！　僕らを食べようとした魔物は既に王様に討たれた！　残るのはお前だけだ、覚悟しろ！」

威勢よく乗り込んだリョカを突然の業火が襲う。おそらく親分ゴーストの中級火炎魔法、メラミだろう。

「くっ！」

シドレーがいるのならまだしも、今は一人。咄嗟にマントで庇うがそれが果たしてどれだけの防御力を誇るのか？

「ああもう！　ヒャド！」

突然女の子の声と氷結魔法が飛んできた。それは空中で中級火炎魔法と相殺するどころか、放たれたほうへと氷の矢が向かう。おそらく詠唱主の実力は親分ゴースト以上なのだろう。

再び氷の矢に救われたリョカは辺りを見る。

「アン？　それともアニスさん？」

だが先ほどの声はどちらでもなご、知らない女の子の声だった。

「おーい、坊主！」

すると階下からシドレーが飛んでくる。

「あ、シドレー無事だったんだね」

「ああ、金髪娘に出してもらったわ。まあなんだ、俺もまだまだ甘いな……」

てれたように笑うシドレーは、リョカの肩に乗ると、大きく炎を吐く。しばらく灯された炎で部屋の隅々まで見たが、やはりいない。

「逃げよったか。まあそうだろうな……。けど……」

ドガッシャーン！

テラスのほうで音がしたのが聞こえた。おそらく雷が落ちたのだろう。

そして落ちた相手はきっと……。

「ま、爺さんが積年の恨みを晴らしたってことで、一件落着だな……」

シドレーはそう言うとリョカの道具袋の中にもぐりこんだ……。

＊＊

テラスに出ると親分ゴーストが着ていたと思しきグレーの布が、半分以上黒こげになってそこにあった。

王様はリョカに気付くと、にっこり笑顔で迎えてくれる。遅れてやってきたビアンカは、まだ魔物がいるのかと身構えたが、二人が事情説明することで誤解も解ける。

「ふう……これでレヌール城もお化けのお城といわれずにすむわい……。これもおぼっちゃん、おじょうちゃんのおかげじゃな……」

「おいおい、俺のことを忘れるなよ？」

シドレーはひょこっと首を出しながらそう言うが、王様はとぼけた様子で意に返さない。

「でも、どうしてあの魔物はこのお城に？」

「さあて……。やっぱり誰も居ないから拠点に使えると思ったんじゃろ？」

王様は特に感慨もなく、しれっと答える。

「なのかな……。なんかひっかかるんだ……」

「そうじゃなあ……そう言えばこの城には后の愛用していた銀のティーセットがあったが……あれはそこまで重要じゃないかの？」

「え？　ティーセットがあるの？」

「ああそうじゃな。おじょうちゃんには世話になったし、見つけたら持って行ってもいいぞ？」

「本当？」

「ああ。ただし、銀はしっかり磨かないと黒くくすむからな？　手入れをしてくれんと、枕元に后が立つぞ？」

「それはやだな……。でもいいや。ね、シドレーだっけ？　ちょっ

と来てよ。探すの手伝って！」
「なんでや。そんなん坊主とやれや。金髪娘」
「いいから！」
ビアンカはシドレーを引っ張ると、そのまま駆け出していく。
「それじゃあ僕らはこれで……。王様、さようなら……」
「うむ……いや、待てよ……。坊やにも何かお礼がしたいな……」
「え？　うわうわわ！」
再び例の浮遊感が袋を包む。
「ちょっと、お礼なんていいから、降ろしてくださいよ！　なんかこの浮遊感！　すごく苦手なんですってば！」
リョカは泣き叫ぶが、王様は「いいからいいから遠慮しない」と聞く耳を持たない。
「うわあああ！！！」
リョカの本日何度目なのか、情けない声がレヌールの上空に響いた。

＊＊

「これは？」
リョカが案内されたのは正門にあった墓石の前。王様が指を刺す先には金色に光る不思議な玉があった。
「これなんじゃが……宝石というわけでもなし、なんじゃろな？」
「へえ……」
「もしかしたらこれが魔物を呼び寄せたのかもしれん」
「でもまがまがしいとかそういう感じはしません。なんかこう、力に溢れるような、素直な感じが……」
「ふむ。幽霊のワシにはよくわからんが、できればこれを持って行って欲しい。お礼といっておきながらもう一つ頼みごとをするようで気が引けるが……まあ、その過ぎた力なんじゃないかと思ってな……」

「過ぎたる力？」
「うむ……。ワシもよく知らんのだが、かつてこの世界に竜の神様がいた頃の話だと、進化の秘法というものを用いた魔物が、その過ぎたる力によって暴走して破滅したという……」
「暴走……ですか……」
「うむ。おとぎ話みたいなもんじゃが、それと同じなのかもな……」
この王様はあまり深く物を考えるのが苦手らしく、自分なりの推測を告げると、ひげをいじって遊んでいた。
「よいしょっと……ねえリョカ！　見てよ！　このティーセット、なんかすごい綺麗だってば！」
「ほほ、よく后が磨いておったからの……」
ビアンカが輝くティーセットを抱えて戻ってくるので、リョカはそれを代わりに持つ。
「銀って本当に綺麗だね……」
「えへへ、これ宝物にしようっと！　リョカと冒険に出た記念と、それと、あたしが……まま、そういうことの記念ね！」
リョカはビアンカの意味深な物言いにやや顔を赤らめる。だが、ビアンカには別にもう一つあるらしく、もじもじと股間を気にしている様子。
「ん？　坊主も何かもらったん？　そんな、俺かてがんばったんだから、なんかくれよ！　このけちんぼ」
シドレーはリョカの持つ金色の玉に止まる。
「え……！？」
すると雷に打たれたかのようにシドレーは体を硬直させ、そのままふらふらと落ちる。
「え？　え？　何？　どうしたの？　嘘でしょ？　冗談はやめてよ！」
「わ、ワシは何もしとらんぞ？　このメラリザード、この玉に乗った瞬間……」

「と、とにかくホイミ！」

リョカは簡易治癒魔法を唱えたが、シドレーは動かない。

恐る恐る彼の心臓近くに降れると、心臓の音、呼吸は聞こえてきた。

どうやら死んでいるわけではなく、昏睡しているのだろう。ただ、その表情は安らかであった……。

＊＊

14　お別れ

まだ夜深いころ、リョカとビアンカは眠るシドレーを袋に入れながらアルパカの町に戻った。

原因不明のまま眠る彼だが、寝息、心音ともにしており、ビアンカが鼻をつまんだとき、苦しそうに手で払いのけた。

ひとまず様子を見ることにして、もしそれでも目が覚めないようならルビス教会へ相談しに行こうと約束した。

相変わらず寝ぼけている衛兵の脇をすり抜け、二人は何事もなかったかのように宿屋に戻る。その途中、二人を心配していたのであろう男の子が駆け寄ってきて、安堵のため息を着く。

男の子は銀のティーセットを見て驚きながら、明日は二人がお化け退治に向かったことを証言すると約束してくれた。

「よかった。これであの猫ちゃんも助けることができるわ……」

宿に戻ったところでビアンカがほっと息をつく。

「そうだね。でもビアンカ。一人で行くなんて無茶しちゃだめだよ……」

「ごめんなさい。でも、リョカが来てくれて嬉しかった……」

ビアンカはリョカの胸にそっと額を当てる。

「ね……ヘアバンド……くれないの？」

「でもこれダサいし、壊れちゃったから……」

「いいの。リョカからのプレゼントなんだもん。ダサいはずないよ……」

「うん……」

リョカは道具袋からはげかけた赤いヘアバンドを出すと、ビアンカにつけてあげた。

「んふふ……この髪型だと合わないね……。けど嬉しい……」

そう言いながら彼女は離れようとしない。

「ね、リョカ……、少しだけ、背伸びして？」

「え？　こう？」
リョカはつま先立ちになるが、ビアンカは違うと首を振る。
「そうじゃなくて、こう……んっ……」
ビアンカは爪先立ちになると、彼の唇に青臭さの残る唇を押し付ける。
柔らかく、苦く、青臭いキス。けれど、リョカはそれを愛おしく感じた。
「リョカ……オヤスミ……。またね……」
「うん……またね……」
二人は挨拶を交わすと、互いの寝室へと戻った……。

ベッドにもぐりこむ途中、寝返りを打ったパパスは、
「長いトイレだな」
と笑っていた……。

＊＊

「いつまで寝てるんじゃい、ボケナス！」
あくる朝、というよりは昼前、リョカはシドレーに起こされた。
「え？　シドレー？　大丈夫だった？」
「何が大丈夫だ、ドアホ。お前こそ寝すぎで脳みそ溶けてんじゃないか？　ほらほら、さっさと顔洗ってくる」
「はーい」
何がなんだかわからぬまま、リョカは洗面所へ急いだ。

昨日の夜遊びの件、パパスは不思議と何も言わなかった。
同じくお寝坊だったビアンカとは洗面所であった。彼女はストレートに髪を下ろしており、珍しくスカートを穿いていた。そして頭には例の赤いヘアバンド。リョカはそれを見るだけで嬉しくなった。
「お、金髪娘、今日はいつになく乙女チックだな」

「なによ。私だっていつまでもジャリじゃないのよ。わかる？」
「おうおう、わかるで。今日の昼飯はトマトリゾットやな！」
「うっさい！　このセクハラトカゲ！」
「？」
一人やり取りのわからないリョカは疑問符を浮かべていた
二人はお昼を取ると例の約束を思い出し、急いで公園を目指す。
ビアンカは例のティーセットを持って……。

＊＊

公園の広場には子供達が集まっていた。そして例の男の子も居り、リョカ達を見てぱっと顔を輝かせる。
「どうせ嘘だろ？　お前らがお化け退治なんてさ！」
「そんなことないわ！　これが証拠よ！」
ビアンカは銀のティーセットを掲げる。その一品は子供でも値戴ち物だとわかるのだが、だがソレがお化け退治とどう関係するかといえば疑問。
「これはレヌールのお后様が愛用していたティーセットよ！　これをお化けの王様からもらってきたんだから！」
「……ねえビアンカちゃん。それだと、まだお化けの王様がいるってことにならない？　多分まだいるだろうし……」
「あ……」
しまったという顔になるビアンカだが、キンタとサンタはそうではないらしい。年代物のティーセットには「……ボン・レヌール」と刻まれており、冷たい冷気が漂う雰囲気に、皆呑まれていた。
「キンタ、サンタ、みんなも聞いてよ。昨日ね、ビアンカさんは本当にお城に行ったんだ。僕見たんだ。で、怖くなって旅人さんに話して……案内した。でも僕は怖くなって逃げたんだ。それなのにこの二人はしっかりと、レヌール城に行って、このティーセットをもらってきたんだ。それに昨日はお城を抜け出るお化けキャンドルの

明かりも見えなかった。多分二人がやっつけたんだよ！　それに魔法だってそうだよ。キアリーにホイミ。皆も見たろ？　僕の傷を一瞬で治したんだ。だから、だから……」

早口で捲くし立てる男の子に、皆そうかもと頷き始める。そして劣勢に立たされつつあるキンタとサンタはたじろぎ、仕方なしに例の猫を差し出す。

「わかったよ。お前らは嘘ついてない。なら俺らも約束守ってやるよ。おら、こんな猫やるよ！」

二人は首輪につながれた猫を差し出し、ビアンカがそれを受け取る。

「よかったね。猫ちゃん」

「よ、よおし、そんじゃ俺らもカクレンボすっど！　おら、皆隠れろや！」

どうにも居心地の悪いキンタとサンタは急にそんなことを言い、集まっていた子供達を蹴散らす。

年長組はその様子をにやにや見ていたが、年少の子供達が木々に紛れるに連れ、それにあわせて散っていった……。

残されたのはビアンカとリョカと猫だけだった……。

＊＊

「ねえ、この猫の名前なんにする？」

ビアンカの腕の中で眠そうに顔を擦る猫。たまに欠伸をしたりするが、どうやら落ち着いているらしい。

「そうだね。僕考えたこともなかったよ」

「そうねゲレゲレなんてどうかしら？」

「金髪娘、ネーミングセンス最悪だな」

「うっさい！　んー、もっとカッコイイのがいいな。そうね、ガロンなんてどう？」

「ガロン？　そうだね。それはかっこいいや！　これからよろしく

ね。ガロン！」
　リョカがそう言うとガロンは「にゃあ」と答えた。
＊＊
「おーい、リョカ……もうサンタローズに戻るぞ？　したくはよいか？」
　宿の前で旅支度を終えたパパスが手を振っているのが見えた。
「あ、父さん！　ちょっと待って……」
　リョカは声を張り上げたあと、一度ビアンカに向き直る。
「ビアンカちゃん。僕ね、今は父さんと旅をしてるけど、もう少し大人になったらきっとビアンカちゃんを迎えに行く。僕、その時は……」
「その時は、そうね、続きを聞かせて……」
　精一杯大人びたつもりだったリョカだが、彼女の不思議とぞくぞくさせる微笑と、唇に当てられた人差し指の弱い力に続きが言えなくなった。
　リョカは力強く首を振り、父の元へと駆けていく。するとビアンカの腕の中で眠っていたはずのガロンもぱちっと目をさまし、それを急いで追いかけていった……。
＊＊
「なあ坊主。俺な、昨日夢見たんよ。あの金玉触った……なんかやだな。あれに触ったらな、なんかごっつでかい竜がいてな、そいつ赤くてやたらめったら威圧感半端無いのさ……。皆も……誰か知らんが、慌て逃げろっていうてたな。どうもそれ、俺の知り合いみたいなんな……んで、今の俺はまだ一番ひよっこみたいなもんなんだって……。ああ、そうそう……。あの猫な……やっぱ危ないで……。今は可愛いかもしれんが……って、まあ今の段階でかなり危険なんだけどな、コイツの顔みてっとそういう気がしないんだけど……。

おっ、おっ、おい、やめろよ……。こらじゃれんなって……もうかなわんわ～……まあ、そのうちでええか……」

リョカの道具袋の中では、シドレーにガロンが甘えたいらしく爪を隠して肉きゅうでぷにぷにとその顔を踏みつける。その柔らかな感触に何を言うべきなのか忘れたシドレーは転寝を始めた……。

＋＋

「うそ……あの猫……ベビーパンサーでしょ？　どうして人間に懐いているの？　いくら子供だからってそんなの無理！　やっぱりあの子、只者じゃない。うん！　あたしの目に狂いはないわ！　あの子こそ、妖精の国の窮地を救ってくれるはずだわ！」

紫の髪の女の子はそう言うと彼が向かうであろうサンタローズの村へと先回りを始めた……。

15　不思議な出来事

サンタローズに戻ってきたリョカの日々は、平穏としたものだった。

パパスはアルパカの酒場の店主から借りた本に掛かりきりであり、リョカもアニスとの約束を果たすため、レヌール城やサンタローズの日常を描いていた。

そんな折、村で不思議なことが起こった。

ドルトン親方の作業場で薬莢がなくなったり、道具屋と武器屋の品揃えが入れ替わったり……。

酒場のお煮しめをつまみ食いされたりと、どれも他愛の無いことばかりで、特にそう、気に留める人も居なかった。

「お茶が入りましたよ～」

「は～い！」

居間でサンチョの呼ぶ声がしたので、リョカは筆を止めて急ぐ。

テーブルにはキャラメルの匂いのする紅茶が三人分用意されており、一足先にパパスはスコーンをつまみながら啜っていた。

「ふむ、最近はバニアティではないんだな」

「それが、バニア産が行方不明でして……」

「うむ……。おかしいな。前に買ったばかりなのに……。リョカ、イタズラしてないよな？」

「え？　僕じゃないよ……」

疑われたことにむっとしながらも、前にお茶の缶をひっくり返して黙っていたことを思い出し、それも仕方が無いと思うリョカ。ただ、先日パパスが買い物から戻ってきた時には確かにあったわけで、それがこの狭い家でなくなるとそれは不思議なことである。

「おーい、なんか臭い葉っぱの缶があったで～」
　すると地下室からシドレーがガロンを連れてやってくる。シドレーが抱えているのは、行方不明のバニア産の紅茶だった。
「なんで地下室に？　……やっぱりぼっちゃんですか？」
　サンチョはそれを受け取ると、リョカをぎろりと睨む。普段優しいサンチョなのだが、イタズラ、特に厨房周りをいじくると、とても怖いのだ。
「ぼ、僕じゃないよ。だって僕、最近はずっと絵を描いてたし、ほほ、本当だよ！」
　リョカは慌てて否定するが、サンチョは聞く耳を持たない。
「あー、坊主じゃないと思うで？　これあったの坊主の手の届きそうにない箪笥の上じゃったし」
「じゃあシドレーさんということになりますな～」
　すると今度はシドレーほ視線が向かう。
「違う違う。俺が隠したならわざわざ持ってこないって……」
　慌てて弁解するシドレーに、サンチョもそれもそうかと頷き、では犯人は誰なのかと首を傾げる。
「もしかしたら、イタズラ好きなエルフの仕業かもな……」
　その様子を見ていたパパスは紅茶を啜りながら笑って言う。
「エルフ？」
「ああ、普段は人里離れたところにいるらしいが、たまに人間の住みかにやってきては他愛の無いいたずらをするらしい。最近この村でもそういうイタズラめいたことが多いし、もしかしたらな……」
「じゃあそのエルフを捕まえてイタズラしないように言わないと！」
　リョカは疑われたことを根に持っているらしく、憤慨気味だった。
「そうですねえ。でも、私としては焼きたてのパンが、ミミだけ残して行方不明なほうが不思議なんですけどね～」
「え？　あ……それもきっとイタズラエルフが！」
　しれっと言うサンチョの言葉にリョカはそう叫ぶと、こっそりと出ようとする。

「坊ちゃん、コンテを消すのに使っていませんよね？」
「ごご、ごめんなさ～い！」
リョカは捕まるまいとばかりに脱兎のごとく飛び出した。
ハイヴ家のイタズラ坊主はまだまだやんちゃの盛　なのかもしれない……。

＊＊

「あーあ、帰ったらサンチョに怒られるのかな……」
コンテを書き直すのにパンを使ったことを後悔するリョカ。普段なら少しの書損じぐらいは無視するのだが、今回の作品は人にあげるもの。会心の出来を差し出したいというプライドが彼にもあった。
それに受け取り主が何時くるのかがわからないのもあり、出来るだけ完成を早めたい一身で、焼きたてのしっとりふわふわのパンを使ったわけだ。
「なあ坊主、最近感じとったんだけど、お前の周りに誰かいるで？」
「え？」
「さっきのパパさんの話聞いて眉唾思ったけど、本当にいるかもな、イタズラエルフ……」
「そんな、シドレーまで……」
普段は実利的というか、自分の見たものくらいしか信じようとしないシドレーだが、今回は妙にエルフの存在を信じているらしい。
「まあなんだ。俺、多分エルフとか見たことあるからなんだろうけど、それにしても今回のはちょいわざとらしすぎるな」
「そう？　でもちょっと会ってみたいな。そのイタズラエルフに……」
「イタズラじゃなーい！」
リョカがくすっと笑うと、背後で女の子の声が響いた。驚いて辺りを見回すが、誰も居ない……かに見えた。
「誰？　どこにいるの？」

リョカはキョロキョロしながらも武器を構える。
「危ないな……。武器なんてしまいなさいよ」
「でも、姿が見えないし……」
「もっと目を凝らして、感覚の目で見るの……」
「感覚の目って……」
「うふふ、嘘よ……。アンチレムオル……」
リョカの前で光が人の形に散りばめられたと思ったら、知らない、紫の髪の女の子が立っていた。
イタズラっぽい二重の瞼と気の強そうな釣り目。鼻が高く、上唇のふっくらした感じの唇。なにか楽しそうで笑窪が出来ている。
彼女は腕組みをしたままリョカに歩みよる。
「私はエルフのベラ。ベラ・ローサ。急で悪いんだけど君にお願いがあるの」
「僕にお願い？　いいけど……、そうだ、君がこの村でイタズラをしていたの？」
「ええ……。みんな気付かないから楽しくってね……。でも焼きたてのパンを消しゴム代わりにしたのは私じゃないけどね……」
「うう……」
「坊主の悪さはしっかり筒抜けだわな。しゃーない、サンチョにはこってり油絞られて来い」
くくっと笑うシドレーと憂鬱になるリョカ。ガロンは健気にも主人を元気付けようと周りを走る。
「あのね、早速だけど実は妖精の村が大変なことになっているのよ。世界に春を呼ぶための春風のフルートが盗まれちゃって……」
「春を呼ぶための？　もしかして最近がまだ寒いのって……」
「そう。それが原因なのよ。で、なんとかしてそれを取替えさなきゃいけないんだけど、あたし達エルフ……、エメラルドエルフって言うんだけど、魔法とか好きだけど、戦いとか苦手なのよ。だから、人間の戦士に協力を求めているの」
「協力ってあんた……、そんなん坊主に頼まないで、坊主のパパさ

んやらもっと強い人誘えばいいんでないの？」
　もっともな疑問を口にするシドレー。確かに子供にしては強いリョカだが、戦士を生業としている者のほうが適任と言えるだろう。
ベラはその問いに、難しい顔で頷く。
「それがね、エルフの里があるんだけど、そこが人間の……特に欲望に塗れた大人に知られると困るのよ。だから里に案内できるのはまだ欲の少ない子供に限られるの」
「なんじゃそりゃ……。そんなん言うてる暇があるのかいな……」
「そうなのよ。でも、おえらいさんの方だと、まだ逼迫した状況じゃない、ルビーエルフの戦士を呼べばとかのんびりしたことばっかり。もし春が来なかったら植物は育たないし、人間の世界は大変なことになるわ……」
　深刻そうな話なのだが、せこいイタズラをして回っていたベラを見ていると、それが伝わってこないところがある。ただ、彼女が必死であることは理解でき、最近の寒さにはリョカも不思議だと思っていた節がある。
　それに加えて自分を頼りにしてくれることが誇らしく思え、寝る前に読む「巡る世界のアルベルト」の主人公になったような気分だった。
「わかった。それじゃあ僕らはどうすればいいの？」
「うん。まずはエルフの里に案内する。捉まって」
　リョカは差し出された手を掴む。ベラは片手で器用に印を組むと、大気中から時の精霊が集まりだし、二人と二匹は光に包まれる。
「ルーラ！」
　そして、空へと消えた……。

＊＊

16　妖精の里

リョカが目を開けると、最初に飛び込んできたのは雪一色の世界。
「雪だ……、こんなに積もってるなんて見たことないや……」
「ぼうず～！」
「なに？　シドレー……うわっぷ！」
リョカが振り向くと小さい雪の玉が投げつけられる。鼻先で、もふっとはじけて冷たさを残す雪球に、リョカも負けじと足元の雪で玉を作り、投げ返す。
「ふふん！　当たるか、そんなひょろだま！」
シドレーはひょいとかわすも、続く玉がバスンと顔面に命中。
「やったな、坊主！　うりゃ、うりゃ！」
シドレーは雪の上に降り立つと、小さな手で雪をほいほい投げ始める。
「お、やるか！　どうだ！」
リョカも同じくやり返すが……。
「きゃっ！」
その玉はベラにぶつかり、彼女は怒りにぷるぷると震えだす。
「このアホガキ共！」
ベラはそう言うと足元の雪で玉を作り、リョカに投げつける。
「はは、ベラさん、こちら！」
こうして始まった雪合戦。ガロンは雪の冷たさで震えながら、休める場所を探していた。
すると、そっとガロンを抱きかかえてくれる手があった。
ガロンは嬉しそうにその手の中で丸くなり、ごろごろと喉を鳴らす。
「あらら、可愛い猫さんね……」
青い髪の少女はガロンを撫でながら、未だに雪合戦を続ける二人と一匹のほうへと歩み出る。

「三人とも、子猫ちゃんが寒がっていますわよ～。早く村に参りましょう……」
その呼びかけに、夢中で走りまわる彼らは気付かない。
「どうしたどうしたー！」
「きー！　まちなさい！　このバカとかげ！」
「ねえ、ベラさ～ん」
間延びした声は興奮した彼らを冷やすことはなく……。
「ほらほら、リョカさんも～」
シドレーに向けられた雪球が、少女のほうへと向かい……。
「きゃっ！」
顔面にぶつかった……。
ガロンは驚いて彼女のほうを見るが、その表情にぶるっと身震いすると、無理やりにでもその腕の中を逃げようとした。だが、彼女はそれを許さず、なれた手つきで背中を撫でる。ガロンは寒さとは別の理由で震えていたが……。
「あ、ごめんなさい……」
「ご、ごめん！」
「いやな、このアホエルフがいけないんやで……」
二人と一匹は青いロングヘアーの少女に気付いたらしく、口々に謝りだす。
「リョカさ～ん、ベラさ～ん、それにメラリザードさん？　ちょっといいですか？　お話しがありますんで……」
ぱらぱらと雪を払う少女はにっこりと微笑んでいるものの、額には怒りの四つ筋が浮かんでおり……。

＊＊

「まったく、妖精の国が大ピンチというから来たというのに、ベラさんは雪合戦のお相手を探していたというのですか？　リョカさんもメラリザードさんもそうです。春風のフルートが無いと人間界に

も春が来ないんですよ？　今はまだ肌寒いで済むでしょうけれど、季節はずれの雪が降った日には農作物に甚大な影響が出ます。飼料がなければ町と町、村を結ぶキャラバン隊にも影響が出るんです。そうしたら世界中で子供達がおなかを空かせることになるんですよ？　私達はその事態を解決すべきためにここに呼ばれたのでしょう？　確かに一面の雪にはしゃぎたい気持ちもわかります。恥ずかしながら私も雪ウサギの家族を作っておりましたし。けれどそれはベラさんがもう一人の戦士を呼ぶまでのあいた時間の暇つぶしです。今こうして戦力が集まった以上、すべきことは雪合戦のほかにげるのではありませんか！？」

「「「は～い、すみませ～ん……反省してま～す……」」」

妖精の村の宿屋の隅っこにて、リョカ、ベラ、シドレーは正座させられながら青いロングヘアーの少女、フローラ・レイク・ゴルドスミスにお説教を受けていた。それもかれこれ小一時間。一体どこから叱る材料を持ってくるのか、彼女の台詞は多岐に渡り、しまいには古語、故事、最近の出来事に至るまでになる。

「あの……そろそろですね……」

恐る恐るベラがお説教の中座を求めるが……、

「まだ話は終ってません！」

とぴしゃりと一喝される。

リョカは前にデボラが妹の説教を恐れていたことを思い出し、そしてそれを実感していた。

「いいですか？　……クドクド……。でしてね……クドクド……」

まだ終わりを見せない説教は、いちいち反論のしづらい言葉選びに三人ともすっかり消沈気味。

「……フローラさん、その辺にしてあげてはいかがかしら……」

ドアがキィと開き、青い派手さはないが豪華な服装に身を包んだ上品な女性がやってくる。

「ポ、ポワン様！」

ベラは慌てておでこを床にこすりつける。フローラもその威厳と

いうべきものを感じたのか、ようやく口を閉じた。
「ベラ。この方達が貴女の選んだ戦士なのですね？　なんとも可愛らしい戦士ばかりですが……」
ポワンはフローラ、リョカを見ながらそう言う。
「はは、はい！　このリョカはこの見てくれですが、この年にして独力で回復魔法、解毒魔法、それに真空魔法を覚えております。それに武器などの扱いにも精通しており、なにより地獄の殺し屋といわれるキラーパンサーの子供を手なずけております」
その地獄の殺し屋の幼子は先ほどから暖炉の前でごろごろ寝返りをうち、店主から与えられたマタタビで気持ち良さそうにしている。
「そしてあの……、本当はアンディという少年を連れてくるつもりでしたが、何かの手違いでフローラさんを連れてきてしまい……。直ぐに送り届けますので……」
「あら、ベラさんは私が戦士だと不服だというのですか？」
「いえいえ、滅相もありません。むしろ、私を含めても最強かと……」
先ほどの攻撃ならぬ口撃を見るにそうそう適う相手ではないと判断するベラ。むしろ別な理由で彼女を送り返したいのが本音だろう。
「私だって回復魔法はベホイミまで使えますし、氷結魔法、爆裂魔法、火炎魔法も中級までは覚えておりますわ……」
「へえ、フローラちゃんは複数の系統の魔法を使えるんだ……」
リョカは素直に驚いていた。彼も複数の魔法を覚えているとはいえ、攻撃系を複数に覚えるというのは至難のこと。というのも、魔法を放つに当たって必要なのはイメージ。
魔力を媒体に精霊を使役する。真空なら風の精霊を呼び、炎なら火の精霊を呼ぶ必要がある。だが、その際イメージが伴わなければ正しく精霊を呼び寄せることが出来ない。例えば火炎魔法を使った直後だと上手く他の精霊をイメージすることができず、氷結魔法に限らずほかの系統が使えないこともある。
普通、魔道士とされる者ならともかく、一般には一系統を覚えれ

ばそれで十分とされるのは、それが原因である。「ええ。そのうち真空魔法も覚える予定ですし、閃光魔法も初級なら問題ありません」

得意そうに言う彼女は、普段姉の影に隠れる控えめな子に見えない。

「だだけど、女の子に危ないし……、アンディ君は剣も使えるから……」

ベラはなんとしても帰したいらしく、仕切りに別の子の名を告げる。

「あら、ベラさんも女の子でしょ？　貴女に出来て私に出来ないとでも言うのかしら？　それに危ないならこそ回復魔法が使える私が必要になりませんか？」

「そうだね、僕も回復魔法はホイミしか使えないし……」

頼りにしていたリョカにまで見放され、ベラはがっくり膝をつく。

「そうですか……わかりました。ですがご無理はなさらぬようにお願いします。あなた方が傷付いて悲しむものも居ります事をくれぐれもお忘れなく……」

ポワンはそう言うと深くお辞儀をして、また元のように戻っていった。

17　ルーラ

ポワンの姿が見えなくなると、リョカの影からシドレーが顔を出す。何かにおびえていたのか、その額には汗がうかんでいる。
「なんかすごい圧力だったな、あのおばちゃん……」
「そうなの？　普通の優しそうな人じゃないか……ってエルフか」
「いやいや……、おい、ベラ。あの人、ただもんじゃないだろ？　なんつうか、種族を超えているというか」
「……ええ……。少なくとも貴方ごときメラリザード、片手で灰に出来るわね……」
ごくりと息を飲むシドレー。
「ならおばちゃんが行けばいいんじゃないの？」
「それが出来たらそうしてるわ。このエルフの里は貴方達人間の世界のどこかに必ずあるのよ。人間達も人が増えれば新しい土地を探す必要がある。最近はより安全で、恵みの多い土地を求めているでしょ？　エルフの里をそういう人間達から隠すためには結界を張る必要があるのよ。それをしているのがポワン様。もしポワン様がみだりに動けばバランスが崩れて人に発見される恐れがある。だからポワン様はいけないのよ……」
「なるほどな……。まあ、しゃーないな……。よし、俺らでちょいとその何とかのフルートってのを拾ってくるか……」
「ええ、まずはそれを盗んだとされる極悪非道の罪人、ザイル・シードをしょっぴいてあげるわ！」
こぶしを天高く掲げるベラにリョカとフローラも「おー」と続く。ガロンはただ「にゃぁ」と鳴いていたが……。

＊＊

ザイルはホビットの親方と一緒に住んでいるらしく、村の西の庵

にいるとのこと。
　リョカ達は防寒具に身を包みながら向かう。特注の手袋というか足袋で四肢を防寒したガロンは元気よく荷物を載せたソリをひく。
「なあ、なんでルーラつかわんの？」
　せわしなく周囲を飛ぶシドレーは自然な疑問を口にする。
「アンタだってその葉っぱみたいな羽つかってないでしょ？　もっと大きくてカッコイイドラゴンならあたし達皆を一度に運べるのにさ……、せいぜいトカゲのシドレーちゃんにはそれも出来ないもんね……」
「うっさいアホ！」
　フンと火の息を吐くシドレーに、ベラはニヒッと笑う。例のイタズラも本当にこの子の性格が原因なのだろうとリョカは思えてきた。
「でも、ルーラのような古代の魔法が使えるなんてベラさんもすごいですわね……。私達人間はある理由で禁止したそうですが……」
　魔法に特別興味のあるフローラはふうとため息をつく。
「え？　禁止したの？　どうして？」
「もともとルーラっていうのは、拠点を制覇することに起因しているのよ。今の世界は……人間の世界だけど、大陸ごとにある程度まとまっているわけ。けど、当然ながら火種は持っている。人が増えれば領土が必要になる。だから新たに土地を求め、場合によってはほかの国を滅ぼしたり従属させる必要がある。つまり、戦争ね」
「戦争……」
　リョカはその言葉を深くかみ締める。彼が生まれてから大きな戦争はなかったが、東のラインハット国では平和的な王が再軍備を行っているとパパスがサンチョと話しているのを聞いた。
　それが本当なら、西に位置するサンタローズにも、侵略の歩が向けられるのかもしれない。
「もしルーラなんてあったら、斥候を走らせて大部隊を送ることができる。それは互いに同じことだけど、まあ千日手になりかねないってことよ。で、戦争を続けるにはお金やら兵站っていうか、単純

に食料とかが必要になるわけ。でも、働き手が槍をもって駆り出されるわけだから、その先に待ち受けるのは……」

「なるほど……」

荒れた田畑と悲しみに暮れる村人達。リョカはこくりと頷く。

「で、そういったことを防ぐためにも人間達はルーラを禁止したの」

「へぇ……でも、昔はどうして平気だったの？」

「昔は……確かポワン様のおばあちゃんのおばあちゃんの頃なんだけど、地獄の帝王っていうのが復活してね、人間同士が争っている暇なんてない、協力する必要があったのよ。だからルーラで互いの繋がりを持っていたわけ。でも今は魔物の活動も比較的減って……」

人間同士の戦いへと変遷した。エルフのベラでも言いにくそうに語尾を濁してしまう。

「嘆かわしいことですわ……」

そう言うフローラは、意外そうにしていた。というのも、彼女はルーラが封印されたもう一つの理由を知っているからだ。

戦争の回避は表向きな理由だが、本当は経済界の圧力。経済を牛耳る方法の一つとして流通の掌握がある。

平地よりも危険で大型の水棲の魔物がいるというにも関わらず船を動かすのは、そうすることで商品の値段を維持できるから。

当然世界の富豪、十指に名を連ねんとしたいゴルドスミス家もまた、その恩恵にあずかっているわけだ……。

半分真実、半分流言であるルーラ封印の理由がエルフの里にも流れていることにフローラは驚きを感じていたのだ。

「んで？　その講釈と妖精のイタジャリがルーラで移動しないのはどういう理由なん？」

「それは……私がホビットの庵の場所を知らないからよ……」

「か～、そんなん俺ら呼ぶ前に調べとけっての。そうすりゃわざわざ荷物ソリに乗っけて移動する必要ないじゃん……」

「う、うるさいわね！　っていうかイタジャリって何よ！」

「イタズラばっかりするジャリん子だからイタジャリ。我ながらナ

イスなネーミングセンスだろ？」
「き～、誰がジャリよ！」アタシはれっきとしたレディだってば！」
「はいはい、まだトマトリゾットも出されていないションベン臭いジャリは黙っていてください」
　また例の単語を出すシドレーにリョカは疑問符を浮かべるしかない。だが、心当たりのあるフローラと今まさにバカにされたばかりのベラは顔を真っ赤にしている。
「いいでしょ！　エルフはそういうのが人間より遅いんだから！　ねーフローラさん！」
　女の子というか人間の性徴を知る者ならばある程度見当の付く会話。振られたフローラはやや申し訳なさそうに俯くと一言。
「えと、私はもう……」
「え……もう？　嘘、アタシより年下なのに……」
「その、ごめんなさい……」
　何がごめんなのかわからないリョカ。楽しそうに飛び回るシドレーと、真面目に走るガロン。ベラは八つ当たり気味に雪球を投げるが、空中を飛び回るシドレーに当たるはずもない……。

＊＊

18　鍵の技法

村を出て三時間程たったころ、ようやくそれらしき山小屋が見えた。

看板には「デルトンのお家」とあり、近くの小屋の煙突から白い煙が上がっている。

「ここがザイルのアジトね！　見てなさい。フルートを盗んだこと、後悔させてあげるんだから！」

「まぁまぁ、落ち着いて……」

鼻息をあらげるベラを宥めるリョカ。

「変ですね。極悪な罪人が隠れているにはあまりにも無防備すぎませんか？　何か罠とか仕掛けているかと警戒していたのですが……」

庵の周りを見ながらフローラは言う。ここまで来るにいたって特別何かがあるわけでもなく、今こうして目の前にある小屋も危険のきの字も見えない。

「ん～、それもそうね。よし、シドレー、あんたに名誉ある任務をあげる。私達はここで待機するから小屋の中を偵察してきなさい！」

「なにが名誉あるだよ……ったく……」

そう言いながらもシドレーは入ろうとドアを引く。だが、押してもびくともせず、しょうがなく空へ飛ぶと、煙突のほうから入っていく。

しばらくして中の様子があわただしくなり始め、きいとドアが開く。

出てきたのはサンタローズの村にいたホビット、ドルトン親方に良く似た小男で、驚いた様子で目をぱちくりしていた。

「君ら、ポワン様の使者なのかい？　ザイルが春風のフルートを盗んだというのは本当かい？」

「ええそうよ！　盗人のザイルを匿うのなら貴方も同罪よ！　さあ、神妙にお縄につきなさい！」

びしっと決めるベラだが、この雪の中歩いてきたせいか鼻水がずる……。

「とりあえず中に入りなさい。ここではなんだし……」

ホビットはとりあえず三人と二匹を小屋に招きいれた……。

「まぁ、デルトン親方はここで鍵について研究を……」

白湯の入ったマグカップを持ちながら、フローラは驚いた様子で話を聞いていた。

「ええ、ただまあ、こういう研究でしょ？　泥棒に使おうとするものが弟子入りしてくるので、しょうがなくここの小屋に移り住んだわけですよ。それをザイルが何を勘違いしたのかポワン様に追い出されたと言い出しましてね、それで仕返しをすると言って出て行ったのです……。まったく困った弟子だ……」

ほっほと笑うデルトン親方はドルトン親方にそっくりで、違うところがあるとしたらおでこに大きなほくろがあることぐらい。

「ねえ親方。もしかしてドルトン親方の兄弟？」

「ドルトン？　これまた懐かしい名前だなあ。弟は元気にしているかい？」

「ええ。この前は爆弾岩に囲まれて大ピンチだったけど……」

「はっはっは、まだアイツも難儀な……」

笑い方はやや違うが、その仕草や雰囲気は良く似ている。これは兄弟だからなのだろうか？

「で、ザイルはどこに行ったのかしら？」

歓談になりかねない空気に、ようやく鼻をかんだベラが真面目な顔で切り出す。

「うむ。ザイルなんじゃが、ここにいないということはおそらく氷の女王の城かもしれん。いくら春風のフルートが奪われたとはいえ、今回の猛吹雪が説明できん。おそらくザイルの奴、女王にそそのかされて奪ったのかもしれんな」

「氷の女王？」

まるで童話の中の話。いや、エルフの里という時点ですでにそうなのだが、「巡る世界のアルベルト」にも光の巫女の故郷を荒らす悪い魔物として出てきたのを思い出す。

「また厄介な奴が出てきたわね。せいぜい冬の間だけいい気にしていればいいごものを！　エルフの里に二人も女王が要らないことを教えてあげる必要があるわね！　それじゃあいくわ……は、は、はくしょん！」

盛大に噴出した鼻水は空を飛んでいたシドレーをしっかりと捉えて……。

＊＊

小屋を出て氷の城に向かう一行。

リョカは印を組み、先ほど教えてもらった新たな「技」を練習している。

ガロンは相変わらずけなげにソリを引き、シドレーはその上で転寝。

フローラは顎に手を当てながら考え事をしており、それはベラも同じ。

――坊やに特別に『鍵の技法』を教えよう。これは簡単な鍵を開けてしまえるという特殊な技法なんだ。いわゆる禁止魔法の類じゃな。まあ、なんだ、あまり行儀の良い技ではなくてな。坊やみたいな心の清らか……というと色々語弊があるが、不思議と澄んだ目をしている子になら教えてあげてもいいと思う。本当ならワシが行けばよいのだが、生憎ぎっくり腰で寒さが堪えるんじゃ。いや、それだけじゃない。これは付け足しみたいに聞こえるかもしれんが、坊やにこそこの技法を教えるべきなのではないかと思えてな……。そう、かつてある賢者が馴染み深い塔にて盗賊から万能な鍵を奪ったことがあっての、じゃが使い道がない。しょうがなく昼寝をしてい

たら、ある勇敢な若者がある日訪れる、その者にこそ鍵を渡す必要があるとお告げじみた夢をみたそうだ。実はわしも最近変な夢を見てな、素朴だがやや女子にだらしない少年にそれを渡すという夢なんじゃよ……。あ、いやいや坊やが女性にだらしないというつもりはないぞ？　ただまあ、ほら、可愛い娘さんたちに囲まれておるし、そういう意味では夢の通りじゃし、まあそのなんだ、とりあえず、ザイルのバカを正気に戻してやってくれ……。

「……鍵の技法がもしアバカムのような禁魔法の類なら……」

フローラは神妙な顔つきでぶつぶつと独り言。

「もう、どうしてあたしに教えないのよ！　人間の子供に教えるなんてデルトン親方もどうかしてるわ！」

当然といえば当然。わが身を振り返れば納得いくことなのだが、どうにも当人にはそれがわからないらしい。

「そんなん当然だろ？　イタジャリなんかに教えたらイタズラに使われるっての……」

眠そうにそう呟くシドレーには雪の玉が投げられ……。

＊＊

「でっかいな～」

氷の城を前にして、リョカは呟いた。

雪の降りしきる中、轟然と佇む氷の城。扉も城壁も全て氷であり、屈折率の違いのせいで七色に輝いている。

いかんせん氷のためか、中の様子がうっすらと見え、玉座と思しき場所には誰かが宝箱片手にいるのが見えた。

「あれがザイルね……、よーし、いっちょシドレー、アイツに火炎をおみまいして！」

これまでの旅路の寒さ、疲労、それに鍵の技法の件について不満たらたらなベラはシドレーに言う。

「無茶言うな。なんぼ透けてる言うても、あそこまで炎が届くかいな。せいぜい壁をちょっと溶かして終わりだっての……」

小さく炎を吐くと、壁の一部が少し溶ける。だが、溶けた水もしばらくすればまた凍りつく。

「さて、それじゃあリョカさん。鍵の技法で扉を……」

フローラに促されて城門に出るリョカ。ただ、彼女の嬉々とした視線の前でどうにもやりづらいのが本音。

「ま、いっか……」

リョカは親方に教えてもらった印を組むと、雪の下から大地の精霊の力が集約されていく。

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我は彼の者の戒め破らんと願うなり……、戒めを解け、……アガム……」

リョカの声に合わせて精霊達は城門の鍵へとまとわり付き、そして開錠の音が聞こえた。

――やはり禁魔法、アバカムの類なのね……。ルカニに似た印だけど、デルトンさんはおそらく簡易型しか発見していない。これでは魔法による鍵を開錠することは無理かしら……。

フローラはリョカに隠れてみよう見真似で印を組む。すると、それをシドレーに見られたので、笑顔で誤魔化していた。

「さて、そんじゃいくべか～」

シドレーはのんきにそう言い、城門を潜った……。

19　氷の城

氷の城の廊下は当然氷。気を抜くとつるつるすべり、そのたびに壁にぶつかったり転んだり。

城の中央では彼らの侵入に気付いたのか、玉座にいる覆面を被った少年が、その様を指をさして笑っていた。

「きぃ～、絶対に許さないんだから！」

今ぶつけたばかりの額を摩りながら、ベラはザイルと思しき存在に毒づく。

迷路のような、それも透明で、行けるようで辿り付けない城を練り歩き、最後には交代で左手を壁に添えて玉座を目指した討伐隊。徐々に盗人の笑い声が近くなり、玉座への道であろう門の前にたどり着いた。

「よーし、リョカ、お願い！」

「う、うん！　……アガム！」

二度目ともあり、省略しながら魔法を唱えるリョカ。比較的初級の魔法のおかげで直ぐに使えるようであった。

扉はギシっと音を立てた後、氷の床を滑るように開き、そのまま外れてしまう。

「うは……あぶね……」

倒れてきたドアが氷の壁につっかえることで、なんとかぺしゃんこを免れたシドレーはほっと一息。

ベラは門を飛び越え、玉座に続く赤い絨毯に立つ。

「なんだお前ら！　ここをどこだと思ってるんだ？　ここは氷の女王様のお城だぞ！　控えろよ！」

玉座の少年は手斧をぶんぶん振り回しながら喚いているが、ベラは怯む様子なく啖呵を切る。

「そっちこそ神妙になさい！　世界に春を呼ぶための春風のフルート！　それが無いおかげでどれだけの人が迷惑していると思っているの！」

「へんだ！　ポワンがデルトン親方を追い出したのがいけないのさ！　親方が帰るまで俺は絶対に返さないぞ！」

「なにをバカなことを！　デルトン親方は研究のために庵を移したって言ってるでしょ！？　全部あんたの勘違いなのよ！」

「嘘だ！　だって、氷の女王様が……」

「何が氷の女王よ！　春を来させないことで力を伸ばしたいだけの小物でしょ？　アンタは騙されてるのよ！」

「俺が騙されてるって、証拠あるのかよ！」

「そんなの、周り見ればわかるでしょ？　冬が長引くことで得する人なんているわけないじゃない！」

「けど……だって……」

彼もこの寒さに辟易しているのか、身震いしながら白い息を吐く。

「その寒さだって、氷の女王のせいなの！　いい？　もう一度言うけど、アンタは騙されているの！」

「嘘、嘘だ……そんなの……」

かじかんだ手は斧を持つ力も入らなくなったらしく、コロンと氷の床に落ちると、そのまま慣性に従って滑る。

リョカはそれを拾うと、ゆっくりとザイルに近寄る。

「ザイル君、大丈夫？　手がこんなにしもやけになっちゃって……。ほら、デルトン親方からもらってきたヌーク草の実。これを食べると温まるよ」

「ん、あんがと……」

ザイルはかじかんだ手を白い息でふーふーしながら、リョカからヌーク草の赤い実をもらう。それを噛み締め、「辛い」と呟く。

「ベラの言い方はケンカ腰だけど、でも春が来ないのはおかしいことだよ。本当なら今頃いろんな草花が芽を出すはずなんだ」

「けど、ポワン様が親方を……。あんな寂しい場所で一人なんて…

…」

「親方の家にも鉢植えがあったよね？　あんまり寒いとどれも芽が出てない。そしたら親方だって寂しいと思うよ」

「うっ……うぅ……」

リョカの優しい物言いに素直に反論しづらいザイル。斧を受け取る手を握られると、その温かさがかじかんだ手をかゆくさせる。

「それに、今こうしてお弟子さんのザイル君が親方の庵を飛び出したら、もっと寂しいと思うんだ。たとえポワン様が追い出したにせよ、せめて君だけは一緒に居てあげて欲しい」

しばらく黙り込むザイル。

最初はいらいらしていたベラも、リョカの雰囲気にふぅとため息を着き、表情からも険しさが消える。

「そっか、俺、親方のことも考えないで皆に酷いことしてたのか…」

ザイルは覆面を取り、生意気そうな瞳でリョカを見る。いがぐり頭の少年は、まだまだ悪戯盛りの子。ちょっとした優しさの誤解でこうなってしまったのだろう。リョカもかつて似たようなことをしてパパスに叱られたことを思い出し、くすっと笑う。

「笑うなよ……」

「ゴメン。でも、まだ僕らの世界はそんなに影響が出ていないけど、これが続けば取り返しがつかないことになるかもしれないんだ。だから……ね？」

「うん。わかったよ。俺が間違ってた……」

ザイルはそう言うと斧を背中にしょいなおし、玉座に乗せていた宝箱から宝石の散りばめられたフルートを取り出す。

「これ、返す。そして俺、ポワン様に謝るよ」

「うん」

ザイルの素直な言葉にリョセは微笑みを返す。

「ふん！　正義は勝つ！　当然よ！」

ベラはことの成り行きが良い方向に向かったことで、腕組みをし

ながら高笑いをする。
だが……、

20　凍りの女王

――ほーっほっほっほ！　やっぱり子供だねえ～！　大人しく騙されていればいいものを！　見てなさい春なんか来させやしないんだからね～！！

一陣の風、いや吹雪がリョカとザイルの間を縫ったと思うと、それらが集まりだし、人の形を成す。

「うは、寒いで～！」

ふわふわした粉雪の青いドレスに身を包む女性。美しくも冷たいその存在は、右手にフルートをしかと持っている。

「お前が氷の女王ね！　愚か者のザイルを謀り、春風のフルートを奪った罪、今ここで裁いてあげるわ！　ポワン様の懐刀、知識の探求者にして深遠の好奇心、ちょっぴりおしゃまな女の子、エメラルドエルフの……って、ちょっと待ちなさいよ！」

「ぐるるる……」

真の悪の登場に、ベラは再び啖呵を切ろうとするが、その脇をガロンが走りだし、小さいながらも鋭い牙を剥く。シドレーも口上の終わりを待つことなく先手必勝とばかりに、大きく口を膨らませ、火炎の塊を放つ。

「ぐっ！　まずいわね～」

ガロンの牙を左腕で払いのけるが、続く炎の塊には冷や汗も凍るほど。女王は咄嗟に作った氷の盾でそれを弾く。盾は炎の威力に圧され気味で、一瞬にして半壊していた。

「今だ！」

リョカは間髪いれずにブーメランを投げる。それは右手首を強く打ち、フルートを落させる。

「いただき！」

ちょこまか動いていたベラはフルートを拾い、扉へ走る。

「みんな！　逃げるわよ！　これさえポワン様のところに戻れば女

王も力を失うわ！」

勝利の予感に喜びの声を上げるベラだが、皆表情が暗い。

「出られたらの話かな……」

リョカの言葉の直ぐ後に、扉のほうで破裂音がした。

玉座と廊下を結ぶドアが崩れ、さらにその外側でも起こっているらしく、うっすらと見える第一の城壁が崩れ、出口を塞いでいた。

「お前達さえ逃がさなければ春風のフルートはポワンの元へいかない。そうすればこの世界は永遠の冬になる。私の時代よ！　あの忌々しい姉さんだって手が出せない、氷の楽園をつくるのよ！」

「まあ、恐ろしいことですわ……」

わざとらしい驚いた口調で言うフローラが前に進み出る。彼女は、そっと両手を広げると、大きな火炎の玉が二つ作り上げる。それが空中で合わさると先ほどシドレーが放ったそれよりも一回り大きなものになる。

「なっ！　なんじゃそりゃ～！」

「メラミ？　いや、メラゾーマ？」

ベラはその塊に冷や汗を垂らしながら呟く。せいぜい詠唱の仕方を知っている程度だろうと高をくくっていたベラだが、中級というには申し分ないどころでない迫力に気圧される。

「ただのメラですわ。でも、両手で出すとこんなに大きくなって、物騒ですわね……」

ふうと困ったようにため息をつくフローラだが、彼女を除くほとんどの者がありえない大きさのメラ（×2ではあるが）に驚きを隠せない。

「そ～れ！」

「ひ！」

無情にも投げつけられた火焔球は、ものすごいスピードで女王へと向かう。再び氷の盾を作るが、それらは触れると同時に蒸発してしまう。

「ぎやぁあああぁぁぁ！」

そのまま体の半分を持っていかれた女王。それでも火焔球の勢いは衰えず、城の屋根をぶちやぶって外へ消えた。

「あらあら、粉雪のお召し物が台無しですわね……。私、夏に一着欲しかったのですが……、諦めますわ……」

「き、きぃ～」

美しく切れ長の瞳が大きた見開かれ、白目が充血しだし、黒く変わる。歯軋りをする口元が耳まで裂け、剥きだしになった犬歯が鋭く光る。顔の中心に皺が寄りはじめ、一瞬にして女王の仮面が破られた。

女王は彼我の明らか過ぎる戦力差におびえ、歪み、魔物の性分ともいえる醜い顔を見せたのだ。

「わ、わあ！　化け物だ！」

ザイルはリョカの背後に隠れがたがた震えだす。

「よくも私の服を、城を、半身を……！　お前だけは許さない。お前だけは氷付けにして、ばらばらにしてやる！」

そう叫ぶと女王はかなりの勢いでフローラに突進する。

「バカやな～、あの威力を見てまだ行くんかい……」

のんきに呟くシドレーは、勝利を確信しながらフローラを見る。

「それが……、先ほどの魔法でここら辺の火の精霊さん達がいなくなってしまいまして……、連発は無理ですわ」

窮地であることを臆すことなく語るフローラに、再び唖然とする面々。女王のみがにやりと笑い、氷の槍と化した右腕を構え、フローラに襲い掛かる。

「ですが……、氷の精霊さんならいくらでも……」

「バカが！　雪の女王に氷が効くとお思いかい？　そのお花畑な脳みそぶちまけな！」

「あらあら、そんな言葉遣いだとお里が知れますわ……」

やれやれといった様子のフローラは空中で円を描き「ヒャダルコ」と呟く。

それは氷結系の中級魔法ではあるが、たとえどんなに魔力の差、

錬度があろうと、氷の魔物に効果があるとは思えない。
「フローラさん！」
リョカは臆することなくカシの杖を構えると、彼女を庇おうと前に出る。
「大丈夫……」
だが、それは軽い真空魔法で弾かれてしまう。一体何が大丈夫なのかわからないリョカだが、それは数秒と経たずに理解できた。
氷の槍を構えた女王が空中で、フローラにまったく届きそうに無いところで止まっていたのだ。
「な、なんだ！　バカな！」
なんと氷結魔法が氷柱をなし、女王の体を捉えていた。
「本当は氷の中に留めてしまおうと思ったのですが、意外とスピードがありますわね？　それとも私の詠唱が遅いせいかしら？」
フローラは女王が動けないことを確かめもせず、近寄ると、さらに氷の精霊を集めだす。
「ぐ、まさか、氷の、私は氷の女王だぞ！　なんで氷に！？　まさか……私が……！」
断末魔の悲鳴を上げることも赦されず、氷漬になる女王。完全に氷柱に閉じ込められた彼女はもう身動きを取ることもないだろう。
彼女が望まぬ春が来ようとも……。
「嘘……、だって氷の女王だよ……」
「氷の女王を名乗られましても水妖マールのように氷を使役できるわけではないでしょう？　風邪を引かないようにお気をつけ遊ばせ……は、は、くしゅん……」
寒さのせいか可愛らしいクシャミをするフローラは照れたように鼻をかむ。
だが、彼女がそんな可愛らしい存在とは誰も思えないわけで……。

＊＊

21　アン

扉を壊された氷の城からは、フローラの開けた大きな穴からルーラで脱出した。

けれど、寒さと疲労で魔力が乏しいベラでは里まで飛ぶことができなかった。

ソリを引くリョカとザイルとガロン。乗るのはフローラとベラの女の子二人組み。

勝利の凱旋には、今しばらく労働がつきまとうらしい。

「でも、フローラさんすごいね。あんなに魔法が使えるなんて思わなかったよ」

「ええ、けれど、私一人ではどうにもなりませんでした」

「またまた、謙遜しちゃってぇ！　このバカトカゲなんかよりず～っとすごいわ！」

「はん、前口上に忙しくて何もせんかったお前が言うな。それにまあ、俺の炎のおかげやろ？」

リョカの肩に止まるシドレーがボソッと言うと、ベラがむきになる。

「何が俺の炎よ！　全部このフローラ大先生のおかげじゃない！　ああん、私は最初からずっとやれる子だって信じていました！　貴女を見たときからきっと名のある大魔道士の卵だと！」

目をきらきらさせるベラに、フローラは落ち着いてと手をかざす。

「シドレーさんは気付いておられたようですので種明かしをしますが、あの場で火の精霊を集めるなんて無理です。けれど、シドレーさんが炎を吐き出したおかげで私、そこに集まってきた精霊を誘導しましたの。それに、リョカさんや皆さんの奮闘のおかげで魔力を練ることが出来ましたわ」

その言葉にリョカとベラはへーと頷く。

「あれはメラゆうか、あそこにいた炎の精霊を集めたわけやな。俺

の炎にお嬢ちゃんの魔力を上乗せしたって感じか？」
「ええ、ご明察です。ですから、メラではありますわ」
「んでも、なんで炎で倒さなかったの？」
「あの状況だと、女王は外に逃げられます。そうなると私達のほうがずっと不利になります。それならいっそ閉じ込めてしまえばいいと思いまして……、それで氷柱に封じ込めましたわ。もちろん、彼女に氷を打ち破る力がありましたらお手上げですけどね……」
「んでもま、俺が火を噴けば、また使えるんだけどな……」
ぼっと炎を噴いてみせるシドレーだが、ベラは調子に乗るなと頭を叩く。
「でもすごいや。魔法って本当に強力だね！　僕もちゃんと勉強しないと……」
「ええ、ですが、魔法には脆弱性があります。いくら威力がありましても、それを練るまでの時間があります。そして、その間に攻撃されたら私のようなか弱い者など倒されてしまいます。それらを守る戦士というのは、やはり戦いにおいて重要なポジションなのですわ」
「ふうん……」
「ですから、リョカさんも魔法に拘るのではなく、守ることも勉強することも重要なのです」
「うん。わかったよ。ありがとう。フローラさん」
「はい」
にこりと笑うフローラにリョカはやや照れてしまう。
「ね～、講釈もいいけど、お前もちゃんとひっぱってよ～」
そんな中、ガロンとソリを引っ張っていたザイルは泣き声をあげていた。
「ま、おまんが余計なことしなければ今回のこともないわけやし、罰だわな……」
「お願いだよ～！　手伝ってよ～」
「ははは、がんばろうね、ザイル！」

リョカはそう言うと、綱を肩から背負い、ソリをぐんぐんと引っ張った……。

＊＊

春風のフルートが奏でる音色。それは世界に春を知らせるもの。
雪を降らせていた暗い雲が流れ、暖かな日差しが差し込む。
それはエルフの里にも、人の世界にも広がるであろう。
リョカの足元の、雪解けをしていた地面ではむくりと小石が持ち上げられ、寝坊を取り戻そうとしているのか、双葉がわかれ、どんどんと芽吹いていく。
それはまるでおとぎの世界の話だが、触れることでそれが真実であるとわかる。
「うわ〜、すごい……」
「本当……、生命、植物の神秘を感じますわ……」
リョカは思い出したように道具袋を開けると、持ってきていたスケッチブックと貴重なカラーコンテを取り出す。
「僕、この絵を描くんだ。そしてあの女の子にあげないと……」
「あのアンとか言う生意気な青ジャリか……。一体何者なんじゃろな？　俺のこと知ってるしで、気味悪いわ……」
「誰が気味悪いの？」
シドレーがぶつくさ言っていると、青い髪のおかっぱの、青いリボンをつけた女の子が笑顔でやってくる。
「わ！　出た！」
「アンさんだ。今描いているんだけど、どうしようかな……」
リョカはまだ描き始めたばかりの絵を見て手を急がせる。
「んーとね、この前描いたものでいいの。えとえと……」
アンはリョカのスケッチブックを開くと、ごそごそと探し始め、そしてこの前書き上げたサンタローズの洞窟の絵を選ぶ。
「え？　これでいいの？　他にももっと……」

「ん～、お……リョカさんの絵はステキだけど、順番があるの。それで、本当は全部もらいたいんだけど、そうすると他の……んと、私も困っちゃうのよ……」
「そうなんだ。はい、君にあげるね……」
「うん、ありがと」
アンは礼儀正しくお礼をすると、絵をくるくるとたたんでリボンで結ぶ。
「なんや、この前と違ってえろう素直じゃな……。それになんかちっさいし……？　縮んだと違う？」
サンタローズで会った時の生意気そうな雰囲気がなく、ニコニコするアンを不思議そうに見つめるシドレー。
「え？　あ、あはは……シドレーさん、そんなことないよ……」
そして、その丁寧な口調にも、首を傾げてしまう。
「自分、この前俺のこと呼び捨てにしてなかった？　まあ、さん付けのほうが気分悪くないけど……」
なにか引っかかることがあるらしく、シドレーはくるくる空中で回る。するとそれに気付いたガロンが何かの遊びなのかとじゃれ付き始めた。
「あは！　ちっちゃいガロンだ。可愛い！」
女の子はシドレーにじゃれたいガロンを抱き上げると、頭をなでなでする。
「なんじゃ？　お前、ガロンのことも知ってるのか……？　こうなってくると、ますますわからんな……。俺の昔の知り合いってわけでもなさそうだし……」
「まま、いいからいいから……」
追及にギクリとしたアンは、ガロンを手離してしまい、ガロンも急に落されたせいで着地に失敗してしまう。
「あらあら、ガロンちゃん、乱暴に扱っちゃめーですよ？」
ガロンが走った先にはフローラが居り、やっぱり抱きかかえながら戻ってくる。その手には何か本を持っている。それはかなり古臭

く、そして厚いのがわかる。
「フローラさん、それは？」
「ええ、今回のことでごほうびをいただけると聞きましたので、魔法に関する本を一冊借りましたの……。読み終わりましたらベラさんが別のを届けてくれると仰るので、うふふ、らっきーですわ」
本を掲げながら嬉しそうに微笑むフローラ。するとアンは驚いたようにリョカの後ろに隠れる。
「どうしたの？　アン……」
「えと、その……」
「まあ、貴女も呼ばれたの？　本当にベラさんたらそそっかしい人……」
ふうとため息をつくフローラは彼女に歩み寄り、その顔を覗き込む。
「アンさんでしたか？　もう怖い氷の女王はこのお兄さん達で退治しましたから、安心してくださいね？」
「は、はい、ありがとうございます！」
にこっと話しかけるフローラと対照的に、アンは直立不動の敬礼しかねない様子で言う。
「あら？　このリボン……」
フローラは彼女のおかっぱの髪を結っているリボンを見て呟く。
「こ、これ、お母様から頂いた大切なリボンなの！」
「そう。私のお気に入りのと似ているから、つい……」
「へ～、そ、そうなんですか……とてもセンスがいいものだから、多分流行っているんですよ！」
「変ね～。これはヴルトン工房で親方さんに特別に刺繍してもらったものなんだけど……」
「あ、いや、だから、多分イミテーションと言いますか……」
「イミテーション？　ふふ、おかしなことを言うのね。リボンにそんなことをする必要があるのかしら？」
何か言うたびにボロが出るアンは、しどろもどろになりだす。さ

らにはシドレーの半眼もあり、焦っていた。彼女はリョカに助け舟を求めるかのような視線を送り出す。
「あ、フローラさん、妖精の村から帰るまえに何かお土産を買っていこうよ。ほら、エルフのお守りとかいろいろあるみたいだよ？」
リョカは大振りでフローラの視界を遮り、彼女の肩を押しながら露天へと送る。
「あ、ありがと……」
「ん～ん、この前失礼なことしちゃったお詫び……」
キスのことを思い出すリョカだが、アンはなんのことかわからない様子できょとんとしていた。
「とにかく、フローラさんは引き受けるから、アンはもう行きなよ……」
「はい！」
不自然に素直なアンは、そう言うと宿屋の陰へと走って消えた……。
「へえ……姉さんにも何かお土産を買っていこうかしら？　ねえ、リョカさんなら姉さんにどれが似合うと思います～」
「きっと赤いものが似合うと思うよ」
デボラのことを思い出すとややげんなりするところもあるが、フローラのお小言を思い出すとまだデボラのからっとした態度のほうが懐かしく思えるから不思議だ。もちろんそれを態度に表せば、きっと帰宅時間が大幅に遅れるのだろうけれど……。

＊＊

「ただいま、サンチョ！　おなせ空いたけど、夕飯はまだ！？」
家に帰ったリョカはいの一番に台所にいたサンチョに声を掛ける。
「夕飯ともうされましても、まだお昼を食べて二時間程度ですよ？　お腹が空かれたようならおやつを用意しますが……」
そう言ってサンチョはフライパンを温めだす。

「……ねぇシドレー。もしかして妖精の国と僕らの世界じゃ進む時間が違うのかな？」

「……どうだろうな？　まあ腹時計で確認する限り、そうらしいが……」

こそこそ話をする二人。五分と待たないうちにホットケーキの香ばしい香りが漂い始める。

「うわーい、サンチョのホットケーキは綺麗な狐色なんだよ！」

皿に盛られたケーキはこんがり狐色の円を描いている。

「うは、こんな風に綺麗に焼けるとか、あんたプロだな！」

「いっただきまーす！」

二人は口々にそれを頬張る。だが、その笑顔は一瞬にしてくずれ……。

「に、にがーい！　なにこれ、苦いってば！」

慌てて水を飲むリョカにシドレー。一体なにを間違えればホットケーキが苦くなるのか？

「今朝のことなんですけどね？　朝食に食べようと思っていたパンがミミだけを残して……」

「ご、ごめんなさ～い！」

リョカは今朝の軽率な自分を、ちょっと、いやかなり、反省していた……。

＋＋

「フローラ！　一体どこに行っていたんだい？　外で魔物に襲われたのかと思って心配したよ……」

フローラがサラボナの街に戻り、噴水の傍で佇んでいると、金髪の少年が慌てて走ってくる。彼の名はアンディ・ラーズ。ラーズ商会の一人息子で、フローラの幼馴染だ。

金糸で刺繍のされた服は品のよい調和を誇っており、年のわりに大人びている風もある。

「ええ、ちょっとイタズラな風に誘われまして……」
「風に？　そう……でも急にいなくなったりしないでくれ。僕は君にもしものことがあったら心配で心配で……」
ほっとした様子で肩をすくめるアンディ。
「ええ。ですがきっとアンディなら私のことを守ってくれると信じていますわ……」
フローラは彼の左やや後ろに立つとその腕を取り、
「頼りにしておりますわ、アンディ……」
そう呟く。
「ああ、君が困っていたら僕は何をも省みず、きっと助けにいくよ！」
そう誇らしげに語るアンディの背後でそっと覚えたての印を組むフローラ。そして……。
「……大地のイタズラな精霊よ……、えい、アガム！」
彼女がそう言うと、かちゃりと音を立ててアンディのベルへのバックルが外れ、ずさっと落ちてしまう。
「わわ！　なんだ！」
慌ててズボンとパンツをあげようとするアンディだが、可愛らしい象さんはしっかりとフローラの目に焼きついており。
「まぁ！」
彼女は頬を赤らめながら口元を両手で覆う。それはもちろん、笑っていることを隠すため。彼女が鍵の技法を教えてもらえなかった要因だろう……。

22　不思議な時にアニス

妖精の里の事件を解決してから一ヶ月たった頃、サンタローズの村にもようやく若葉が生い茂る。

リョカはその様子を絵にしてアンに贈ろうと思い、いつものようにスケッチブックを持って出かけていた。

外に出るのは気分転換と父の調べ物の邪魔をしないため。人気の無いところに行くのはリョカが邪魔されないためと、アンを待つためだ。

サンタローズに滞在している間に妖精の国、レヌール城、村の北の洞窟、サントフィリップ号の船室など色々描いてきた。そしてリョカが描き上げると、例の女の子がやってくる。それも決まって人がいないときだった。

不思議なのはその態度で、礼儀正しいときや妙に不機嫌だったりと様々。しかも数週間程度なのに雰囲気が幼かったり大人びていたりと、とにかく不思議な女の子だった。

――変な子。

リョカはそんなことを思いながらコンテを持つ。

ガロンはシドレーを追いかけて遊んでいるので、写生に集中できる条件がそろっていた。

だが、今日は別の誰かがやってきてらしく……、

「元気？」

すっと前が暗くなり、視界が誰かの手で覆われる。

「わ！？」

リョカが驚いて後ずさりすると、今度は柔らかな刺激が後頭部に触れる。

無理やり上を見上げると、少し前に窮地を救ってくれた、あの端整な顔があった。

「あ、アニスさん……」

「ごきげんよう。リョカ」
アニスはリョカを正面に向き直らせ、そのまま抱きしめる。同時に甘い花の香に包まれ、思わず鼻息を荒くしてしまうリョカ。
「わわ！　アニスさん、苦しいよ！」
口ではそう言うが、春の日差しと相成って柔らかな心地よさに抵抗する気持ちを失い始める。そして……。
――あっ、また……。
最近よく起こる身体の変化。
おしっこに行きたいわけでもないのに、おちんちんが大きく、固くなること。何度もトイレに行っては出ないのを確認するのが最近の朝の日課。気恥ずかしさからサンチョはパパスに相談することもできず、リョカは困っていた。
「アニスさん、苦しいよ！」
現象を知られたくないリョカは慌てて彼女の肩を押して距離を取る。だが、締め付けの緩いズボンではそれが隠れることなくパンパンにテントを張っていた。
「なにしとんじゃ、ショタコン娘！」
ぼうっと大きな火炎がリョカの背後から走る。
アニスは瞬間、指先を光らせて空中に文字を書く。精霊に呼びかける方法は何も印を組むことや声で求めるだけではない。精霊文字を空中に魔力で描くというのは高レベルな魔法使いにのみ可能な技であり、当然リョカには何をしているのかはわからなかった。
次の瞬間、リョカとアニスは光の衣に包まれる。それは火炎の勢いを弱めることができるらしいが、それでも火の手はアニスに襲い掛かる。
「ほんと邪魔の、このホモトカゲ。バキマ！」
アニスはやはり指先の動きみだけで風の精霊を使役する。その場で突風が起き、弱まった火炎はそのまま消えていく。
「おい坊主。そいつから離れろ。アブナイ奴だ」
パタパタと羽ばたきながらリョカの肩に止まるシドレーは、身振

りも踏まえてリョカを急がせる。
「え？　でもアニスさんは僕らのこと助けてくれたし……」
「そうじゃない。そういう意味じゃないほうのアブナイだ……」
彼はアニスに敵意というよりは、胡散臭いといった視線を投げていた。
「まったく……。この前のちゅーといい、おま、本気の変態だな？」
「あら、人聞きの悪いことを……。私はただ可愛い男の子の穢れない身体に興味があるだけよ？」
「はん！　包茎の恥垢だらけのちんちんのどこが穢れてないんだか！」
「ちょっと二人とも、やめてよ……あぶないよ……」
恩人であるアニスと友達であるシドレーがぶつかるのはあまり好ましいことではない。さらに言えば殺傷能力のある炎を吐ける竜と、それを軽減するどころかかき消してしまうほどの力を持つ魔法使い。この静かなアトリエが荒地になりかねない。
リョカは二人の間に割って入り、そのにらみ合いを止める。
「ごめんなさい。リョカ……。その、ちょっと私もおかしかったわ……」
「……ま、坊主が言うならやめるけど、変な大人にほいほいついていくなよ？」
「アニスさんは僕のことを心配して……」
「それより先にショタコン娘の頭を診てもらえっての……」
「忌々しいトカゲね……まったく……」
ケンカこそ終ったものの、やはりこの二人も仲が悪いらしく、互いに睨み合っている。
一触即発な雰囲気に、リョカは何か話題をそらせないかと思案にくれた。
「あ、そうだ。絵のことですか？　えっと、今も描いていますけど……」
ようやく思ごついた話題だが、シドレーが彼の前に出て、フンと

鼻を鳴らして腕を組む。
「こう見えてうちのリョカ画伯大先生は忙しいんやけどねぇ、邪魔せんといてくれますか？　アンとかいう青ジャリの仕事間に合わせなあかんし、仕事のほうなら受付のガロンを通してくださいね」
　いやみったらしく言うシドレーだが、遅れて走ってきたガロンは、アニスに警戒することなく近寄っていく。
「あらガロン。ご機嫌ね……」
　アニスはガロンを抱き上げると、そのまま胸にだく。ガロンもその扱いが嫌ではないらしく、ごろごろと喉を鳴らす。
「まさかガキならなんでもいいんか？」
「違うわよ。ガロンはまあ……、そうね。なんでか私にも懐いてくれるのよ。ねーガロン」
　ガロンを見るアニスの視線は彼女の言う穢れのないものであり、とても子供っぽいところがあった。
「ん？　なんでお前ガロンのこと知ってるん？」
　ふと首を傾げるシドレー。リョカもその指摘に「そういえば」とアニスを見る。
「え？　だって……今、シドレーが言ってたでしょ？　ガロンさんを通してくださいねって……」
　アニスはシドレーの口真似をしながら言うが、シドレーは不満気味。
「普通、受付通せって言われて猫がガロンだと思うか？」
　墓穴を掘るアニスは目を泳がせながら「まあ、そういえばそうね」と言い訳が見つからない様子。
「ねえ、それより今日はどうしてきてくれたんです？　僕この前のお礼も全然だし、そうだ。サンチョにパンケーキを焼いてもらうよ。ね？　一緒にお昼を……」
　また険悪なムードになりかねないとリョカは慌てて話題を換える。
「ええ、それは嬉しいんだけど、でもちょっと別に用があるのよ……」

「なんだ？　チンコ見せろってのか？　この変態女が……」
「ちが！　そりゃまあ……って違うわよ。いい？　この前レヌール城の絵をアンに渡したわよね？　それで……もしかして何かこう、金色の玉を見つけてない？」
「なんだ、やっぱり坊主の金玉に興味があるんか……」
「だから！　もうこのバカトカゲ！　ここで灰にしてあげたら全部解決するかしら……まったくもう……」
ぶつくさと不満たらたらなアニスだが、リョカはこれ以上彼女の機嫌が悪くならないように道具袋から例の金色に光る玉を取り出す。
「これですか？」
「ちょっと見ていい？」
「はいどうぞ……」
アニスはガロンを離すと、リョカの差し出した光の玉に手を伸ばす。
リョカは疑う様子なくそれを渡すので、アニスは「ありがとう」と受け取り、それを太陽に翳す。
リョカもシドレーもそれを見るが、木漏れ日に視界を遮られる。
「ん、ありがと……。そうね。ちょっと違うみたいね」
「アニスさんも探し物？」
「ええ。これじゃないんだけど……」
そういってアニスは玉を返してくれる。
「そう。父さんも何かを一生懸命探しているんだ。僕もそのお手伝いがしたいんだけど、全然弱くて……。だからアニスさんやボルカノさんみたいに強くなれたらいいな……」
リョカはそう言うと照れたように笑い、頭を掻く。
「そう……。そうなのよね……。それは多分、覆せないこと……なのよ……」
アニスはそう言うと瞳を潤ませる。そして急にしゃがみこむと、また彼を抱きしめた。
「お、コイツまだ諦めてないのか！　リョカ、さっさとその変態シ

ョタコン娘から離れろ！　妊娠するぞ！」
シドレーは苦々しげに呟くが、アニスはそれに乗る気配がない。
微かに動いた長い睫、横顔に太陽の光が不自然に反射していたのが見え、シドレーも言葉を止める。
「アニスさん？」「ごめんね。私はリョカを守れない。貴方が本当に辛いとき、何もしてあげられない。だけど君は強いから、きっと大丈夫。どんなに苦しいことがあっても、きっと希望を見つけ出せる人だから……。私は強くないかな……」
後半涙に掠れる声にリョカは心が痛んだ。自然と彼女の頭を撫でているのは目上の女性に対して失礼なこと。にも関わらず、リョカも彼女もそれが普通のようにしていた。
「大丈夫。僕は負けない。それにアンさんにも絵を描いてあげる約束をしたんだ。だから大丈夫だよ……」
リョカは彼女を優しく受け止め、涙に震える彼女が落ち着くまで、そうしていた。

「ごめんね。大人のくせに泣くなんて恰好悪いよね？　強いなんていっても、せいぜい魔法が使えるだけだもの、私なんて……」
両目をウサギのように真っ赤にさせたアニスは彼から身体を引くと、照れ笑いをしながら涙を拭く。一体彼女がどうして突然泣き出したのかはわからないが、それでも何か強い不幸があったのだろうと察し、リョカは辛かった。
「んっ……」
すると彼女は突然目を閉じ、唇を突き出してくる。シドレーは「またか」とぼやきながら、リョカに判断を任せてガロンと一緒にそっぽを向く。
「駄目だよ。キスは大切な人とする行為、本当に好きな人としないと……」
リョカは彼女の下唇にそっと人差し指を当てると、ちょっと強く

押す。
「……むぅ、貴方はいつもそう……」
アニスは酷く残念そうにそう言うと、すっと立ち上がる。
「それじゃあ私はこれで……。きっとまた出会うことになると思うけど、私はいつでも貴方の味方だからね……」
「うん。僕はアニスさんのこと信じてますよ。すごくカッコイイ魔法使い！　憧れます！」
「本当！　嬉しいな！」
アニスは「こまっちゃうな～」などと嬉しそうに身体をくねらせるので、シドレーは我慢していた一言をポツリ……。
「坊主の貞操の敵」
「死ね、トカゲ！」
無詠唱の炎はシドレーの居た空中を通過して、空へと消えていった……。
＊＊

23　来訪者

物陰から客人が帰るのを見送ったあと、リョカはそっと家に戻る。
居間には独特の臭いのするバニアティが手付かずで残っていた。
リョカもあの香りが好きではないのだが、パパスはなぜかそれを好み、それはサンチョも同じだった。
パパスはじっと何かを考えている様子で、リョカがやってきたことにも気付いていない様子。
「ねえ、父さん。さっきの人は？　ラインハットの人？」
「ん？　ああ、居たのか。どうも困ったことがあってな……」
話しかけるとようやく気付いたらしく、ふうとため息をつく。
「また旅になるな……。今度はラインハットか……」
「そう。どれぐらいになる？　支度しないと……」
リョカはキャンバスを抱えながら二階へ走ろうとする。
「いや、今度の旅にリョカは連れていかないつもりだ……」
「え？　なんで？」
リョカは素直に驚いた。これまでの旅はどんなに過酷であろうとリョカを連れたパパスが、今回に限ってそれをしないという。
「うむ。それほどかかる用事ではないし、お前も絵を仕上げたいんだろ？　だから……」
「やだよ。僕も行く。父さんと一緒に連れて行ってよ！　勝手なことしないから、邪魔にならないようにがんばるから！」
置いていかれたくないと必死なリョカは父の腰にすがりつく。
「いや、お前が邪魔というか足手まといなことはないのだ。むしろ最近のリョカは十分旅に堪える力を身につけているしな……。そうではなくて……」
パパスはリョカの頭を撫でながら言葉を選んでいる様子。すると、
「ぎゃー！　き、き、き、キラーパンサーだ！」
外で悲鳴が聞こえた。裏返った老人の声はどこかユーモラスだが、

その後に聞こえる金属の滑る音は尋常ではない。
「キラーパンサー？　まさか！」
リョカは外で転寝をしていたはずのガロンを思い出し、外へ出る。
「ガロン！？」
外へ飛び出るとフーッと唸るガロンとそれに槍を構える二人の兵士。老人は腰を抜かしているらしく、へたりこんで動けない。
「やめてください！　その子は危なくないです！　僕の友達なんです！」
リョカみ兵士の前に出て、両手で必死に制止しようとする。
「なななにを言っている！　そいつは地獄の殺し屋、キラーパンサーだぞ！？　危なくないはずがないじゃろ！」
老人はなおもそう叫び、兵士も矛を収めない。
「そんなことないです！　ほらガロン、おいで……」
リョカがそう言って手を差し出すとガロンはひょいっと腕に飛び込む。
「なんと……地獄の殺し屋がこんな子供に……」
ようやく立ち上がった老人は別の驚きでまた腰を抜かしそうになる。
「ふむ……、まさかなあ……、子供、お前は一体……」
「それは私の息子のリョカです……」
「なんと、パパス殿の息子……となると……」
老人が何かを言いそうになったところをパパスは慌てて人差し指を立てる。
「そうか……。なるほど。パパス殿の息子となればまああるいはありえるかもしれんな……。しかしベビーパンサーをのぉ……」
老人はずれた眼鏡を直しながらリョカに近づき、ガロンに手をかざす。だがガロンは敵愾心むき出しでフーッと唸る。
「ほほ、嫌われたもんじゃな……。少年よ……、おぬしはまさか魔物と意思の疎通が出来るのか？　ふ～む、いや、だが、これはもって生まれた才能というべきもの。年端も行かずほそれに目覚めたこ

とこそ賞賛すべきことか……、にしても気性の荒いとされるキラーパンサーを子供とはいえ……」

口をもごもごさせながらぶつくさ言う老人はもう一度リョカに向き直り、両肩を叩く。そしてまっすぐ瞳を覗き込んできて、

「ふむ、やはり透き通った目をしている。これまで何人かのモンスタマスターを見てきたがお主ほどの逸材はそうそう居ない。お主も『銀髪の剣士』を目指して精進すると良いぞ」

老人は満足そうに言うと、もう一度パパスに一礼して兵士を連れ、去っていった。

「ねえ父さん、『銀髪の剣士』って何？　モンスターマスターなのに剣士なの？」

「うむ、『銀髪の剣士』というのは昔、ずっと昔の、竜の神様がいたころの話よりさらに昔に居たとされる伝説のモンスターマスターのことだ。その剣士は雷を操る剣と緑の竜を筆頭に数多の魔物を従えたという。そして一時の間、自らを魔王として世界に君臨したらしい」

「魔王！？」

魔王といえば、かつて神と対峙したとされる地獄の帝王や、人間もエルフも魔族、魔物でさえ超越されたと『存在』がそれに当たる。だが、それを名乗ることを許された人間が居るとなれば、それはどれだけの力の持ち主なのか？

「うむ。伝承によれば人魔王とされているが……、同じくモンスターマスターの兄妹によって討たれたらしい……。ま、全ては御伽噺だ」

だが、パパスにしてみればそれはただの子供だましの絵空事でしかないらしく、はっはと笑ってそのまま家に戻っていた。

「やっぱり嘘なのかな……」

リョカがそう呟くと、道具袋がごそごそと動く。

「坊主は騙されやすいからな……」

「そうなのかな……」

シドレーの言葉にリョカはただ素直にがっくり来ていた……。

＊＊

「旦那様、坊ちゃま、お気をつけて」

ラインハットへの旅立ちの日、サンチョはお手製のサンドイッチのお弁当とバニアティの水筒をくれた。リョカとしてはキャラメルティが良かったのだが、旅の途中で飲むものなので甘いものは控えた。

「うむ。今回はまあそうだな、すぐに帰るつもりだ。うむ、大丈夫だ……、さ、行くぞ、リョカ」

パパスはまだ心残りがあるのかしばし黙っていたが、決心したらしくサンチョに頷くと、リョカの肩を押す。

「うん！」

リョカは今度の旅も連れて行ってもらえることに喜んでおり、いつもの旅の始まりよりも、気合の入った返事を返す。それに勇気付けられたのか、パパスも軽い足取りで村を後にできた。

「そうだ、サンチョ！　もし僕の留守に青い髪の女の子が来たら、僕の描いた絵が二階にあるからって教えてあげてね！」

「はい、わかりましたよ～坊ちゃま！　どうかご無事で～！」

しばらくしてもまだ見送りを続けているサンチョも、しばらくして見えなくなった……。

＊＊

東へ向かう旅も二日目、何度か魔物の群れに遭遇するも、戦力の頭数が増えたリョカ達が苦戦することはなかった。

もともとパパスの剣だけでも余裕であったのだが、ガロンの小さくとも鋭い牙、シドレーの燃え盛る火炎に魔物達は恐れをなし、無用な戦いを避けることが出来た。

緩やかな山道に差し掛かった頃、パパスは歩を止める。
「このままのペースなら明日には着くだろう。だが今日はもう日が暮れるだろう。だからここいらで野宿をするぞ……」
日はまだ西の空に傾きかけたばかり。だが、今進むとなれば山道で夜を明かすこととなる。夜の山の天気は変わりやすいのが常識であり、下手に進んで野営の準備ができなくなるおそれもある。
リョカは荷物を降ろすと、辺りを見回して燃えやすそうな木々を拾い集める。
シドレーは一本の生木に火をともすと、リョカが集めてきた枯れ木をくべる。父が野宿の準備を始めたので、リョカは夕飯の準備をしようと干肉、固めに焼いたパンを出す。
こうして旅のひと時の安らぎの時間が訪れた……。

＊＊

24　焚き火

侘しい夕飯を終えたあと、リョカは寝袋で横になる。
ゆらめく炎をみていると、昼間の疲れからか、すぐにうとうとしてしまう。
明日の山越えを終えたら、東国の境界となるライン川にたどり着くだろう。
子供の頃のうろ覚えの記憶だと、水と緑の豊かな国だった。越えた土壌を誇るのんびりとした農業国とサンチョにも言われていた。
だが、焚き火の向こうのパパスは険しい顔つきで剣を磨いている。油断怠りなき父ならいつものことなのだが、今回の旅ではやや違う。
例えばリョカの装備だ。これまで使ってきた銅の剣を廃し、代わりに鋼の杖――明らかに攻撃力のありそうなもの――と刃の施されたブーメランをくれた。そして旅人の服も新調し、さらに鎖帷子も用意していた。
旅に出る時も何か険しい表情で戸惑っていた感があり、父なりに何か胸騒ぎを感じているかのよざに思えた。
「父さん、まだ寝ないの……」
いまだ剣の手入れに余念の無い父にそっと声をかける。
「ああ、眠れないのか？　すまんな。もうすぐ終る……」
「そうじゃなくて、そんなに危険なのかな……」
パパスはその問いかけに少し考えたあと答える。
「うむ……。そうだな、不安なのかもしれんな」
「不安？　父さんが？」
父のような戦士にも不安があるのだろうか？　あまりにも意外な答えにリョカは勢いで起きてしまう。
「私だって不安はあるさ」
息子の驚きにパパスは笑って答える。
「だって父さんはすごく強いじゃないか……」

「お前から見ればそうかもしれんな。だが、私の強さはせいぜい身の回りの人間を守れるぐらい……、いや、それも出来ないか……」

ため息をつく父の姿は非常に小さく見えた。そして、身の回りの人間を守れないという言葉に酷く違和感を覚えた。

今日までの旅路で、パパスがリョカを守れなかった時があっただろうか？　思い出しても、それはリョカがパパスに隠れてオラクルベリーの外へ出たときくらい。

「父さんは僕のことを守ってくれてるよ……」

その感謝の気持ちからか、うなだれる父に何かを言わないと気がすまなかった。

「ああ、私の最後の希望だからな……」

そう言うとようやくパパスは剣の手入れをやめ、焚き火を小さくする。

「明日も早いからな。私も寝るとしよう……」

「はい、おやすみ……」

リョカは静かに目を閉じたが、パパスはしばらく焚き火の向こうに居る息子を眺めて居た……。

＊＊

25　脱皮

なだらかな山地を越えると、大きな川が見えた。アルパカ地方とラインハットを分断する、ハイム川だ。

ラインハット領に渡る橋には関所があり、越えるには、入国許可証を発行してもらう必要がある。

今回の旅ではパパスが既にラインハット国の入国許可証を発行されており、さらには「至急」と赤い印を押されていることから優先的に通された。

地方と国を結ぶ大橋にリョカは目を見開いた。

見たことも無い楽器を抱える楽士や、牛皮で覆われた曲刀を帯刀する剣士、大荷物を抱えながら地図を見る老人、薄い着物でおへそを露出させた若い女性などさまざまだ。

幼い頃にもせわしない情景を見た記憶があるが、改めてみることで、その規模がわかる。

大きな荷車が橋の真ん中を走っていく。弾みで積み荷いっぱい載せられた南国のフルーツの一つがこぼれたが、気付くはずもない。

「らっき～、いただきまーす！」

シドレーは遠慮なく拾うと、ガロンの背中に跨ったまま口いっぱいに頬張り、果汁を飛ばしながらしゃくしゃく食べる。

迷惑な乗者にガロンは追い払おうとくるくる回る。

「だめだよシドレー。落し物は届けないと……」

「硬いこというなや、つか、こんなもんどこに届けるんだっての。腐る前に食ってあげたほうが幸せだって。この味は初めてだ……、あまずっぱ～」

嬉しそうに言うシドレーに生真面目なリョカは険しい顔。

「あれ？　シドレー？」

ふと気付く。彼の羽の付け根の赤い皮膚がはがれ、緑の皮膚が見えた。

「シドレー、大丈夫？　怪我してるんじゃない。痛くない？」
「おれ？　え、痛くないけどな……つか、かゆい？　ちょっと掻いてくれる？」
　のんきに言うシドレーに、リョカは恐る恐る剥がれ掛けた皮膚に触る。するとそれはぺりぺりと剥がれていき、徐々に緑色の皮膚が広がり始める。
「もしかして脱皮？」
「なんや、人のことハ虫類みたいにいうなや……って、なんか言われたらだんだんかゆくなってきたな……」
　シドレーは芯だけになった果物を川に捨てると、身体を掻き始める。するとどんどん皮が剥がれ、緑の身体に変わっていく。
「え？　もしかしてシドレーってメラリザードじゃなくて、ドラゴンニュートなの？」
「アホ、そんなんあるかい……。って、なんか気味悪いな……、病気？　いやいやいや、いたって健康やし……」
「ね、寒くない？　熱があったりとか……」
「ないない。平気……、いや、まだ頭がかゆい……」
　シドレーが頭を掻くと、最後の皮が捲れ、緑の羽根トカゲに変わった。
「ん～、なんか変な気分だな……」
　自分のことながら気味悪がるシドレー。まだ残っている手のひらの皮を剥ぎながら、ん～っと唸る。
「そういえばこの前」
　リョカが気付く。この前にアンが言っていたことを。
「ねえ、アンが言ってなかった？　シドレーの色が赤いって……。もしかしてシドレーは成長すると色が変わるんじゃない？」
「なんのために？」
「それはわからないけど、ほら、氷の息が吐けるとかいってたし……」
「氷ねえ……よっしゃ、ためしに……って思ったけど、ここは人が

多いな。ま、宿に着いたらちょっと試してみような……」
「うん。そしたら何かシドレーのこと、わかるかもしれないね」
「そうさな……」
頷くシドレーはガロンの尻尾を無理に引っ張ると、橋の向こうを目指して駆け出していく。
「待って！」
リョカがそれに続くと、パパスも早足になった……。

＊＊

「氷の息か……、いや、これはそういうんじゃないな……」
ラインハットの城下町にたどり着いたリョカ達は、宿の手配を終えたあと、さっそくシドレーに何か特殊能力がないかと試していた。
その結果、リョカとガロンは間抜けな恰好で地べたにへたりこんでいる。
シドレーが吐き出した息は氷とは似ても似つかない甘い息。リョカとガロンはそれを正面から吸い込み、そのままうとうとと寝息をたててしまったのだ。
「俺は何者なんだ？　どうしてこんなことが起きるんだ？」
他にも何かできないかと試してみると、今度は空間が歪むような焼け付く息が放たれ、さらには草木がしおれる毒の息も出る。
「……なんか俺、ばい菌？　いやいやいや、そんなはずないわ……。そうだ、あの玉触ったときから変なんだから、もしかしたら……」
シドレーは寝たままのリョカの腰から道具袋を取り、例の光る玉を探す。
「おお、あったこれこれ。きっとこれに俺の今回の変調の理由があるんだな……」
光る玉を両手で掲げるシドレーだが、別段変化はない。あのときは確かに触れた瞬間、何か遠い記憶が呼び起こされるような刺激がげったのだが、今は弱い振動がコメカミのあたりにうずくだけ。

「なんや、ネジでも切れたんかいな……」
振ってみるが、何も音を立てない。
「参ったな……、坊主も猫も寝たまんまやし、俺一人じゃ運べんし……。いくら町中とはいえ風邪ひくっての……」
まだ目を覚まそうとしない二人を前にシドレーはため息をつく。
「こういうときこそ、あのショタコン娘の出番だろうに……」
苛立ち紛れにアニスを思い出すシドレー。彼女なら強制覚醒魔法も使えるだろう。だが、彼女が現れたら眠るリョカに何をしでかすかわからない。むしろその方がリョカの貞操の危機であろうと、シドレーは首を振る。
「ザメハだっけか？　俺にもできっかな……印はたしかこうで、イタズラなる風の精霊よ、汝に求める、かの者達におびただしい目覚めの洗礼を……」
一瞬シドレーの手の間に風の精霊達が渦をなすが、すぐに消えてしまう。
「なんでや！　なんで上手くいかんのかな……」
ぐちるシドレーだが、もう一度気を取り直して印を組む。
「そうじゃないでしょ。覚醒魔法は時の精霊よ。詠唱も間違っているし。おびただしい目覚めって何よ？　慌しいだってば……、ザメハ……」
聞き覚えのある声がしたと思うと、時の精霊達がガロンとリョカの周りを舞い始め、眠気を鼻の穴から吸出し、霧散させる。
「あ、あれ？　僕は……、あ、アニスさん？」
「にゃぁ……？」
目を擦りながらゆっくりと起き上がるリョカ。彼には緑の羽根トカゲと、青い髪の魔法使いが見えた。
「お、目覚めたか……。つか、ま、ショタコン娘にしてはフェアやな。どうせリョカの寝込み襲うやろ思ってたけどって、お前だれや？」
「アニスさんじゃない？」

雰囲気、顔立ちはアニスによく似ているが、背格好、とりわけ目つきが違う。他にも青い髪を赤いリボンで一つに束ねており、アップさせていた。

「アニスじゃないわ……、そうね、私の名前なんてどうでもいいし……。それよりリョカ、絵をもらうわよ……」

「え？　はい……」

その女は名乗ることもせず、ただ彼のリュックからスケッチブックを漁り、その中から一枚取り出す。

髪を留めていたリボンをほどき、絵をくるくる巻き上げる。

「それじゃ……」

「それじゃってお前、なんか他に言うことあるないんかい？　この前の青ジャリはちゃんとお礼いっとたで？」

「私は二人を起こしてあげたでしょ？　その報酬として絵をもらったの。他に何か必要かしら？」

あからさまに不機嫌な彼女は、先を急ぎたいらしく半身しか振り返らない。

「それじゃあね」

そう言うと彼女は見慣れない精霊を集め、そしてふわっと浮かび空へと消えた。

「またルーラか……なんだい、この世界ではルーラは封印されてるんと違うか？　なんであないほいほい使える女がいるん……」

「さあ。でも、今の人……アニスさんの知り合いじゃないのかな……」

リョカは不思議に思いながら、ばらばらと散らかされた絵を拾い集めていた……。

26　朝の出来事

次の日の朝、パパスは早くから出かける支度をしていた。ただ、その服装はいつもと違い、旅人の服に外套ではなく、濃い青を基調とした礼服だということ。

「リョカ、私は王宮に用があるのだが、お前はどうする？」

リョカは寝巻きから普段着に着替えていたが、生憎パパスのように見栄えの良い服はない。いくら子供であっても、さすがに普段着でおいそれと入ってよいはずもなく、ぶんぶんと首を振る。

「そうか。今回の旅は……、そうだな。しばらくここに滞在するだけのつまらないものになりそうだが、見聞を広めるによい機会だ、お小遣いをやるから、何か珍しいものでもビアンカちゃんに買ってあげなさい」

パパスはそういうと財布から百ゴールド紙幣を取り出し、リョカに渡す。

「え、こんなにいいの？」

「ああ、だが滞在する間はこれだけだぞ。変なものを買ってお金が足りなくなってもやらんからな」

この国に来てからようやく笑ったパパスに、リョカもつられて笑う。さらに、突然の百ゴールドというお小遣いに財布も心もにんまり。

「うはっ！　百ゴールドか！　んならあそこで焼き鳥買おうぜ。なんか昨日からずっといい匂いさせてよって……」

舌なめずりするシドレーを横目にリョカはお金を財布にしまう。

「だめだよシドレー。これで買うのはビアンカちゃんへのお土産。それからそうだね……、この国の何か記念になるようなもの……」

「そんなん、適当に緑色の絵の具塗りたくって二本線引けばええやろ。むしろここでの郷土料理をだな……」

あくまでも食い気のシドレーと、ガロンも昨日から外で香る香ば

しい臭いにそわそわしている。
「しょうがないなあ……、でも少しだけだよ？」
かくいうリョカも興味がないわけではなく……、お小遣いで最初に買うのは宿屋の隣に出張っている焼き鳥に決まった……。

＊＊

炭火焼き鳥の屋台は盛況で、早朝も列を成していた。
リョカ達は待っている間、何を食べようかと真剣に悩む。
ラインハットで最近品種改良されたとされた地鶏は油の乗った皮、ぷりぷりの腿肉、独特の触感の砂肝と、いずれも垂涎の一品らしい。セットメニューで一匹分を串にしたものがあり、リョカ達はそれを頼むことで合意した。
「ひっひっひ……、久しぶりの鶏肉か……。それも新鮮、油の乗った最高級！　いやあ、今からよだれがとまらんわ～」
その気になれば自前で焼き鳥を作れそうなシドレーに、リョカは首をかしげてしまう。
「そうだ、父さんが帰ってきたら一緒に食べよう」
「おい坊主。冷たくなったらせっかくの味が逃げるで？　美味しいものをわざわざまずくしてから食べるのは料理に失礼だ。残すなんてせんで、俺らで食おう」
「でも……」
「なに、親父さんも食いたいなら買うだろ？　つか、王宮に呼ばれてるわけやし、ちょっと口利きしてもらえばどうにかなるんじゃないか？」
今頃父はどんなもてなしをされているのだろうか？　もともとパパスは招かれた立場であり、その相手はラインハット国だ。特産品の地鶏……、焼き鳥という形式ではないだろうけれど、もしかしたらもっと高級な調理法による一品を堪能しているかもしれない。
「そうか……、そうだね」

リョカは自分に都合のよい言い訳をして、どの部位を食べようせとひたすら空想する。

「おいお前！　張り紙を見たのか？　一人一セットまでと書いてあろうが！」

列の前のほうから声が聞こえた。どうやら少年の声で、何か言い争っている様子。

「なんだ～、ちょっと見てくるな……」

シドレーはガロンに跨ると、人ごみの足元を縫って列の前のほうへと行く。

＋＋

「がきは引っ込んでな！」

身長二メートルになろうという大男が、その半分よりやや大きいといった程度の子供を相手にすごんでいた。

「これが引っ込んでいられるか！　列を割り込んだだけならまだしも、お一人様一セットの地鶏焼き鳥を三セットもせびりおって！　ルールというものを守れんのか！」

対し子供も負けておらず、男を睨み返す。

少年は質の良い緑の髪が印象的で、意思の強そうな太い眉毛とやや上がり気味の瞳は青く燃えている。また地味目な羽織を着ているものの服も上質なものであり、見る人が見ればその出自がただものではないとわかる。

「兄上、その辺で……」

意気込む少年の影で震えるのは弟だろうか？　髪の色が金色であり、複雑な家庭環境にあるのだろうとわかる。こちらの少年は優しそうな、ともすれば気弱そうな垂れ目であり、兄がこれ以上相手を刺兼しまいかと、ひやひやしている様子が見て取れる。

「なんだ、ケンカか……、アホらし、行こうか……」

「デールよ。今ここでこの者らの横暴を許せば、早くから並んでま

で買おうとした地鶏焼き鳥セットが売り切れてしまうのだぞ？　それでも良いのか！」

「なぬ！」

それを聞いては黙って帰れないシドレー。もちろんこの行列の中で高々二セットを取り上げたところで自分達が買えるわけでもない。だからといって暴漢にみすみす美味しい思いをさせるのも癪である。

「くそ、こいつこそ焼き鳥にしてやるか……。んでも、目立つのもあれやし……」

「シドレー大丈夫？」

するとリョカもやってくる。騒ぎを見ていてもたってもいられなかったのだろうか、それともシドレーが無茶をしないかと心配になったのか？

「ああ坊主か……。まあ並んでても買えないししゃーないか……。それよりほら、あのガキとおっさんがな、どうやら最後の焼き鳥セットを取り合いしてるみたいなんだ。まああれだ、食いモンのなんとかやし、引っ込みがつかんじゃろうな」

「そうなんだ……。あーあ、がっかり……」

「しゃーない。また明日並べばええやろ……」

そういってリョカを宥めるシドレーだが、彼もまたがっくりとため息を着く。

「おら、どけ！」

ひとだかりが出来始めたことに男は苛立って少年を突き飛ばす。強引にこの場を去ろうという算段なのだろうが、少年は踏みとどまり、さらに腰から鞭のようなものを取り出す。

「大人しくしろ。痛い目に遭いたくなければな！」

「兄上！」

少年が武器を構えたことに弟が驚いてそれを制止しようとする。だが、少年は軽く弟を押し退け、びゅんびゅんと鞭を振るう。それは子供の遊びをはるかに越えており、砂埃を巻き上げながら、空を切る。

「うは、なんだあのガキ……、ただものじゃないぞ……」
シドレーの言葉にリョカも無言で頷く。
少年の持つそれは蛇皮の鞭だろう。しなやかさと丈夫さ、そして伸縮性を持つ初級から中級者の扱う鞭だ。
「ガキの相手なんてしてられっか！」
男はそう言いながらも、気迫に圧されているのが見えた。
「どこがいい？」
そして不敵に言う少年。
「あん？」
パシィィッ！！
空で音がした。それと同時に男は左腕を庇う。
「ラインハット仕込の操鞭術、たかが子供と侮るなかれ……、鞭の先端の威力は長さに比例し、勢い如何によっては乗数的に増幅されるのが通説。さあ、次はどこを狙って欲しいか聞いておろう？」
ひゅんひゅんと風を切る鞭。それは円運動をしながら男の右膝をかすり、肩口をかすり、さらに鼻の頭をすれすれにかする。
「くっ……」
男の鼻の頭からすうと血が垂れる。
「おいていけ。さすればこれ以上その低い鼻が低くなることも無い……」
それが冗談に聞こえなくなったとき、男は包みを地べたに置く。
遠巻きにそれを見ていた人達もまさかの少年の勝利に喝采をわかせる。
「ふふん、正義は勝つのだ！」
少年は得意そうに言うと、ようやく鞭をしまう。
「兄上、またご無理をなさって……」
兄の乱暴を心配そうに諫める弟。少年はただその頭をぽんぽんと撫で、いい気な様子で高笑い。
だが、その勝利ムードに生まれた隙に、男は手放した包みを拾い上げる。

「あ！　コイツ！」
　少年が気付いて鞭をかまえようとしたが、男は土のつぶてを投げる。
「ぐ、卑怯なり！」
　少年が叫ぶも、もともと暴漢、誹られたところで痛む腹もなし。
「逃がすな！」
　その声にリョカは携帯していたブーメランを構える。ただ、それが刃の施されたものであると思い出し、代わりに道具袋にしまっていた鎖帷子を投げる。
　着るものではあるものの、それは丁度良く解けて男の両足に理み付く。
「げっ！」
　突然のことに倒れこむ男。それでも包みが散らばらないように抱えて倒れることに感心してしまう。
「くっくっく、やはり天命は我にあったようだな……。さて、いかに料理してやろうか？」
　土を払い落した少年が無様に倒れる男に歩み寄り、その包みを奪う。
「ぐ、くそ！」
「ふん、もとはといえば貴様が横入りをしたのだ。本来買うべきであった俺が手にするのが道理だろうが……」
　言い放つ少年だが、ふと思い出したように財布を取り出すと、三セット分と思しき代金を男に投げる。
「このまま取り上げては貴様と同じになってしまうからな。金だけはやろう。憲兵が来る前にさっさと消えうせることだな！」
　少年は包みを弟に渡すと、再び鞭を構える。男は鎖帷子を外すと、悔しそうな顔をして走り去る。
「ふぅ……。なんとか包みは無事と……。ふっふっふ、ようやく待ちに待った地鶏セットが拝めたわけだ……」
　包みを見る少年だが、リョカ達の呆気に取られた視線に気付く。

「むう、貴様らもご苦労であった。しょうがない、分けてやろう……」

そう言って少年はリョカに包みを差し出してくれる。

「ありがとう……。お金を……」

リョカは小銭入れから代金を取り出し、少年に渡す。

「ふむ、まあそうだな。うむ……」

これでようやく地鶏焼き鳥とご対面となるはずの少年だが……、

26　朝の出来事（後書き）

ここからは皆様お待ちかね、ヘンリーが登場します。

27　ヘンリー・ラインハルト

「貴方が列の一番前にいましたよね？」
リョカは少年の前に居たと思しき男性に包みを向ける。
「ちょっと形が崩れてしまったかもしれませんが……」
「え？　いいのかい？」
男性は驚いた様子でそれを受け取ると、代金をリョカに渡す。
「ありがとう坊や。まさか買えるとは思っていなかったよ」
男性は喜んだ様子で去っていった。
「「おい！」」
少年とシドレーの突っ込みにリョカは驚いた様子で振り返る。
「貴様、せっかく褒美に一つ譲ってやったというのに、どうして他人にまた譲るのだ！」
「そうだ、俺らが食えるせっかくのチャンスやど？　坊主はお人よし通り越してアホや！」
だがリョカはその剣幕にも関わらず、少年から包みを取り上げると、本来買えるであろう順番の人に手渡し、代わりに受け取った料金を少年の弟に渡す。
「「ドアホ！」」
もう一度、二人の声が重なったのは言うまでも無い……。

＊＊

リョカ達は焼き鳥やの屋台を離れ、のんびり出来そうな広場に来ていた。
「まったく、坊主はアホか……」
「そうだな。こんなアホ、東国では見たことが無い……」
少年とシドレーはベンチに深く腰を下ろしながら、何度となく同じことを呟く。

「僕そんなにおかしいかな？」
「いえ、貴方はとても正しいことをしたとおもいますよ」
そう言ってくれるのは弟ぐらい。リョカは頭を掻きながら、笑っていた。
「ときに貴様、名はなんと言う？」
「えと、リョカ……、リョカ・ハイヴァニアです」
「年は？」
「十二です」
「そうか、俺と同い年か……。だが……」
「まったく世間というもんを知らんやっちゃでぇ」
「その通りだ……」
そしてまたこのやりとりに行き着く。
「まあ渡してしまったものはしょうがない。だが、これでは分け前が減るな……」
「え？」
少年は弟の持つ包みを開けると、ごちゃっとなった焼き鳥の数を数え始める。
「そっちの猫は一本あれば十分か？　だが砂肝はやらんぞ。俺も食べたいのだからな……」
「僕らは別に……」
「俺は言っただろ？　褒美をやると。ふん、貴様のようなバカには過ぎた褒美だが……、そうだな、俺様の子分になるというのなら分けてやるぞ？」
少年は腿肉を串から抜いてガロンに与えており、ガロンも夢中で頬張っている。
「子分？」
聞きなれない言葉に首を傾げるリョカ。だが、それを遮るようにシドレーが前に出る。
「なりますなります！　俺ら二匹と一人、あんさんの子分になります！」

「ちょっとシドレー、僕らはそんなに長くは……」
「いいんやて、コイツはそういうの確認しないで俺らを誘ったん。つか、これが世渡りってもんやで？」
ひそひそ声で言うシドレーはなんとも侘しい処世術を伝授してくれる。
「ふむ、ならばリョカ・ハイヴァニアよ、俺様の子分となった証として、この雛皮とねぎ間をくれてやろう。大事にするがよい」
「ははぁ……」
大げさに言う少年に対し、リョカもあわせて跪いてそれを受け取る。
「ねね、俺には？　俺には？」
シドレーは少年の周りを煩く飛び回りながら、意地汚く催促する。
「ふん、ドラゴンニュートなどという下級モンスターの子分などいらん」
「そんな～せっしょうなこといわんと、坊ちゃんさま～！」
「それに俺は坊ちゃんではない。ヘンリー・ラインハルトという立派な名前があるのだ」
「はは～、ヘンリー様、どうか私めにも……」
反射的に跪くシドレーだが、その名前に「ん？」と気付く。
「「ラインハルト？」」
それはラインハット王国に一つしかない姓。ラインハット王家の苗字だった……。

＊＊

「そうか、坊主兄は王子様か……。あぐあぐ……」
リョカと同じくねぎ間と雛皮で従属を誓ったはずのシドレーだが、すぐにいつもの通り、男は坊主扱いしだす。
「お忍びではあるがな……」
「兄上、あまり身分をおいそれと話すようなことは……」

「心配するな、コイツはハイヴァニア……。あのパパス殿の息子だ」
ヘンリーは確認を取るようにリョカを見るので、彼は二度肯定の頷きを見せる。
「リョカさんはパパスさんの息子さんでしたか……。通りで機転の利く……」
弟は感心した様子で呟くので、シドレーが「坊主の親父はどんだけ有名なんだ？」とリョカに聞く。とはいえリョカも詳しくは知らず、曖昧に笑うだけ。
「こいつはデール・ラインハルト。俺の弟にして一の子分だ。頼り無い奴だが敬うように」
「はい、ヘンリー様」
リョカは別段気にしていないらしく、むしろ新しい友達との変わった遊びという感覚だろう。
「おいおい、ヘンリー様はないだろ、呼ぶのならヘンリー親分だが……なんかしっくりこないな……」
「ガキが親分いうてもな……」
食べ終わったところで憎まれ口をたたき出すシドレー。ヘンリーは食べ終わった串を投げつけるが、それはへろへろと地面に落ち、ガロンがべろべろと舐め始める。
「リョカよ、このベビーニュートはなんなのだ？　先ほどから人語をしゃべるが……」
「えと、シドレーはベビーニュートじゃないんです。というか、僕も本人もわからなくて、それにこの前まではメラリザードみたいに赤かったし……」
「ほう、奇妙な魔物……というにはその猫ほど威圧感も無しか……。貴様一体なんなのだ？」
ヘンリーは首を傾げて彼を見る。
「ああ、それは俺も知りたい。つか、俺のこと知ってる奴の話だと、もっと別の……、氷の息とか使えるみたいでな……」
「兄上、前に伝承を記した絵本に竜の神様が居られましたが、もし

かしてこの方はその幼態かもしれませんよ？」
　控えめにデールが口をはさむと、三人の反応は様々。
　リョカは光の玉の一件を思い出し、「そういえば……」。
　シドレーは「やっぱ俺様偉いんだろうな」としたり顔。
　ヘンリーは「トカゲが竜の神？」と半信半疑。
「ねえ、その本に光る玉について書いてなかった？」
「光る玉？　そういえば伝承によると、天空にある城の原動力は竜の神様の力を封じたオーブとされていました。それのことかもしれません」
「ねえシドレー、もしかして君、本当に竜の神様の関係なの？」
　力強い波動を持つ玉とそれに影響を受ける存在。その二点だけで竜の神と結びつけるのはいささか早急だが、シドレーの正体のてがかりになればと考える。
「ふむ、このバカ面がそうとは思えんがな……」
　ヘンリーは立ち上がると、膝のあたりを軽く払い、リョカを見る。
「さて、もうすぐケイン老が来る時間だ。戻るぞ、デールよ」
「はい、兄上」
「リョカよ。今日はそうだな、もしそのトカゲについて気になるのであれば一緒に来るか？　たいした書もないだろうが、暇つぶしにはなるだろう……」
「え？　いいの？　だってお城でしょ？　僕みたいな恰好で……」
「裏口から入れば小間使いとしか思われないだろう。ついでに十一時になったら台所からレモネードを持っぶきてくれ。そうだな、お菓子はスコーンで良いぞ」
「あ、うん。わかったよ」「よし、それでは向かうか」
　ヘンリーはそう言うと、先頭を切って歩きだした。

＊＊

28　古びた本

ラインハット城の裏口から入る一行。リョカはともかく、どうしてヘンリー達が正門から入らないのかは、兄弟が城をこっそり抜け出してきたからだ。

通路に誰も居ないのを見計らい、ヘンリーは像の近くに隠してあった鉤付きの棒を天井に向ける。やや手間取りながらも何かに引っ掛けると、蓋が開き、ばらばらっと縄梯子が落ちる。

「これを上るんだ」

「へぇ……」

ヘンリーはまずお手本を見せ、するすると登る。次にリョカがガロンを背負いながら上る。その様子を見ながら「不便だね～」とシドレーも上がる。最後にデールが縄梯子に捕まったのを見て、上から一気に引き上げる。

「アイツはまだ小さいから自力で上がれないんだ……」

ふんと笑うヘンリーは、なかなかの親分気質のようだ。

「さて、老いぼれが来るまでにはしばらくあるだろう。デールよ、そのものらを書庫に案内してやれ……。その前にしっかり口元を拭いておけよ？」

ヘンリーは笑いながらデールの口元を指さすが、自分の唇も……。

＊＊

デールに案内されながら宮中を行くリョカ達。たまにすれ違う女中は見慣れぬ少年を不思議そうに見ていたが、ヘンリーの親分ごっこのお相手と見てなのか騒ぎ立てる様子もない。

「そういえば鍵が掛かってたっけ……」

城の一階の端っこの少し薄暗い通路の先まで来たところで、デールは思い出したように呟く。

「どうしよう。書庫の鍵は大臣が管理してたし、貸してって言って貸してくれるかな……」
「鍵は魔法の鍵なの？」
「んーん、普通の鍵だよ」
「そう。なら大丈夫だと思うよ。案内してよ」
「大丈夫？」
デールは不思議がりながらも先へ行くことにした。

やや厳かな扉の前に来て、デールはその鍵がしまっていることを確認する。
「やっぱりだめか……。どうしよう……」
「大丈夫だよ。ちょっと離れてて……」
リョカは印を素早く組むと「アガム」と唱える。すると地面から大地の精霊が集まり、錠が下りる音がした。
「今の魔法？　君、魔法使いなの？」
「これはホビットのおじさんに教えてもらったんだ」
「へぇ……。僕も魔法の練習してるんだけど、あんまり上手く出来なくて……。せめて兄さんみたいに鞭が使えるとかならいいんだけど、運動も駄目だし、さっぱりだよ」
デールは自嘲気味に笑い、ドアをあける。
「そんなことないよ。デールさんだって練習すればきっと出来るようになる。さっきの魔法は簡単な鍵ぐらいしかあけられないけど、そんなに魔力を集中するものじゃないから練習すればすぐにできるようになるよ」
「でも、僕には無理だよ」
「大丈夫。本当はあんまり人に教えちゃいけないんだけど、デールさんは王子様だし、泥棒をしたりしないよね？　だから詠唱法を教えてあげる」
リョカは手で印を組み、デールに真似をさせながらゆっくりと唱える。

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我は彼の者の戒め破らんと願うなり……、戒めを解け、……アガム……」

デールも同じようにそれを唱えると、二人の手の間に大地の精霊達が集まり始める。

「わわ、本当だ……。僕が精霊を、魔法を使えるなんて……」

喜びのあまり集中が途切れてしまい、精霊は好き勝手に消えていく。

「デールさんはまだ練習が必要みたいだけど、でもきっと出来るようになる。だからやる前から諦めないでね」

「う、うん！　ありがとうリョカさん！」

デールは初めて明るい笑顔になると、鼻歌混じりに部屋を行く。

ヘンリーとの力関係を見るに、デールは常に庇護の対象なのだろう。武術、胆力に優れた兄が、優しい面を持っているのは城を一緒に抜け出しておやつを買いに行くことでわかっている。ただ、そこにどれだけの「侮り」があり、それが弟の克己心を阻害しているかを、二人とも気付いていないのだろう。これを機会にデールが自分に自信をもてたならと、リョカは人事ながら思っていた。

「えっと、この本棚の……、これかな……」

デールは一冊の古い本を手に取り、ぱらぱらと捲る。

「あった、これだ……。竜の神に関する伝承……」

本には黄金の竜が描かれていた。大きな玉座に鎮座する竜はシドレーとも似ても似つかない荘厳な存在。その周りには羽根の生えた人が複数おり、天空人とされていた。

＋＋

かつてこの世界には地獄の帝王とされるものが居た。

その存在は長い間眠りについていたが、人間の欲望がそれを呼び起こした。

竜の神はそれを打ち破るべく、預言の内容を実行したらしい。

だが、魔王の出現が近未来にいたる預言を狂わせた。
竜の神は焦り、再び預言を実行しようと、魔王を招いた。
そして……。

＊＊

そこから先は水に濡れており、滲んでいた。
「ん～、これと俺、なんか関係あるん？」
「そうだね。シドレーとは似ても似つかないし……。まさかシドレーも黄金になるの？」
「さあな。そしたらドラゴンキッズに間違われるな……」
なははと笑うシドレーだが、いい加減間違われることに慣れてきたらしい。
「えと、あと他にも……」
デールは他のページを捲りだす。
「ほら、ここ……」

＋＋

空に浮かぶ城。天空城に関する謎。
それは竜の神の力の込められたオーブにより維持されている。
たとえ竜の神が不在であろうと落下しないのはこのためである。
また、そのオーブは妖精の王がこの世界にもたらしたとされており、人の手で複製することはかなわないとされている。

＊＊

「なんじゃい。どうも胡散臭いな……。竜だと思ったら今度は妖精？　なんでそないな奴が城浮かべるのにオーブ作るのよ」
「ん～、やっぱり御伽噺なのかな……」
そういって本を閉じるデール。彼も半信半疑らしく、あまり落胆した様子が無い。
「つか、一体誰が書いてん、こんなアホな絵空事……」
本の表紙を見ると、やや汚れているが、そこには「レイク……」とあった。
「レイク？　もしかしてアニスさんが書いたのかな？　ほら、あの人、レイクニアって言ってたし、光るオーブを探してるって……」
「まさか、あのショタコン娘がか？　いや、でも、たまたま同じ姓とか……」
もう一度著者名を調べるシドレー。ごしごしと乱暴にこすると、著者の名前がうっすらと見える。
「いやいや、名前あるで？　ほら、ポロ……、ポーロ・レイクなんちょかさんの著書だな」
「あ、本当だ……」
想像通りとは行かずがっくりとするリョカ。とはいえ、ここまで本がここまで傷むのならそれなりの年月が必要となる。アニスはどう見ても十代後半程度。普通に考えて彼女が書いたはずもない。
「リョカ君はいろんな知り合いがいるんだね。やっぱり旅をしているから？」
「え？　ああ、そうだね。でも、旅をしているってことは、出会いの数だけ別れがあるんだ……」
「そっか……」
リョカは笑顔で答えるが、デールは楽しいだけが旅ではないと知り、浅はかなことをいったことを省みている様子。
「だから僕、そういうの絵にしてるんだ。これまでに行った町、そういうのを忘れないためにもね……」
「へえ、リョカさんは絵も描けるんだ。ますます尊敬しちゃうなあ

！」

「あ、いや、人様に見せるほどじゃないんだけどね……」

ますます尊敬の眼差しを強めるデールにどうにもやりにくさを覚えるリョカ。最近出会ってきた子達のように、そういう垣根を作らない関係のほうが気楽でよいと考えてしまう。

「それじゃあ僕ももう直ぐ勉強の時間だし、行くね……」

「うん。……そうだ。僕もヘンリー親分にレモネードを届ける約束をしてたんだっけ……！」

二人はぷっと笑い合うと、黴臭そうな部屋を一緒にあとにした……。

＊＊

「おかえり。リョカ、こんな時間までどこに居たんだ？」

宿に戻るとパパスが先に戻っていた。

「ただいま。友達が出来て、一緒に遊んでいたんです」

リョカはヘンリーのことを伏せる。それは父に心配をかけたくないというよりは、ちょっとした秘密を持つことでの子供らしい優越感から。

「そうか。友達ができたのか」

息子に友達が出来たことについては素直に嬉しいこと。だが、今はただの旅路の寄り道に過ぎず、またすぐに別れる日がくる。例外なのは、サンタローズに近いアルパカのビアンカぐらいで……。

29　策謀

「うん。だからこれでラインハットに来る楽しみが増えたよ」
父の憂いを知ってなのか、リョカはポジティブに自分の状況を捉える。
「うむ。そうだな……。きっとまた、ラインハットに来ることになるだろうからな……」
そう言うパパスの表情は険しい。それは「遊びに行く」や「調べ物があるから」などの安易な訪問には見えない。もっと違う、別の次元の用事を連想させる……。
「それじゃあおやすみなさい」
リョカはそう言うとさっさとベッドに入る。
明日もまた親分に朝から呼び出しを受けているのだ。

＊＊

ラインハット城下町、ヘンリーはリョカを引きつれ闊歩していた。
「ふむ、どうだリョカよ。ラインハットの街は。ここまでの賑わいを見せるのは、世界においてこのラインハットだけであろう？」
ヘンリーはリョカが各地を旅していたときき、お国自慢をしてみたかったらしい。もちろん、他国の情勢を子供ながらの視点で聞きたいという気持ちもありつつだ。
「ええ、賑わいだけなら初めてです」
リョカは素直にそう答えていたが、当然ヘンリーは渋い顔。「賑わいだけ」と言われたのが面白くないらしく、リョカに詰め寄る。
「おい、賑わいだけとはどういうことだ？　他にこれだけの発展を見せる国があるというのか？」
「いえ、その……、前に父さんと旅をしたサラボナの街はもっとこう、商業のレベルが違うというか……」

幼いリョカにしてみれば、ラインハット国の情勢は十分目を見張るもの。ただ、世界の経済都市となりつつあるサラボナと比べれば、まだまだ田舎臭さがあり、それはオラクルベリーに比べても感じられることだ。

「うむ。やはりサラボナか。俺もあの街の噂は聞いている。人々の誰もが金持ちで、金粉をまぶしたパンにサラダ、はては便所のそれにも使われているのだろう？」

「そんなことはありませんよ」

さすがにそれは誇張のされ過ぎとリョカは笑う。

「違うのか？　では支払がオンスというのも嘘か？」

「オンス？」

「……重さの単位ですよ。金を量るとき、ラインハットではオンスを使っています」

デールの解説にようやく理解が追いつたリョカ。もしそれが真実ならば、財布はどれだけ頑丈でなければならないのか？

「それは嘘ですよ。船を買うならともかく……」

言いかけて思い出すサントフィリップ号の乗船客たち。彼らの会話にはたびたび商船を購入したとか店を新規出店したあり、あながち金塊で取引をしていてもおかしくないのかもしれない。

「そうか……。だが、貴様の目にもサラボナのほうが発展しているといえるのだな？」

「ええ、まあ……」

「なるほどな。ふむ。俺もお前のように世界を見て周ってみたいものだ」

そういうとヘンリーは考える様子で下を見る。

「兄上はいつも国をどうするか、それを考えております。きっとすばらしい王になるでしょう」

自慢の兄を心から尊敬しているであろうデールはヘンリーを頼もしい視線で見つめている。リョカも同年代でありながら、王の子として既に政治、経済に興味を示している彼をとても大人びているとと

思えた。
「さて、そろそろケインが来るころだろう。すまないがリョカ、今日も十一時頃にレモネードを頼むぞ。それと少し甘めにな。どうも頭を使うと糖分が恋しくなるんだ」
「はいはい」
リョカが給仕の真似事を断らないのは、台所でおやつのつまみ食いが出来るから。昨日はバターたっぷりのパンケーキで、今日はなんだろうか？　そんな期待を持ちながらヘンリーに続く……と、
「……キャー！　泥棒！」
屋台の一角で女性の悲鳴が聞こえてきた。
「このラインハットで狼藉を働くとは不届き者め！　我が操鞭術から逃れられると思うな！」
「落ち着いてよ、ヘンリー。この人ごみでは逆に危ないよ」
ヘンリーが携帯していた鞭を構えるので、慌ててリョカが止める。
「だが、このまま見過ごせというのか？」
義憤に燃えるヘンリーを止めるつもりはリョカにもない。ただ、人で賑わう街では彼らの携帯する武器は周りに被害をもたらしかねない。
「ねえシドレー、ガロンと一緒にお願いできる？」
「ん？　ああ、ええで、いくぞガロン！」
シドレーはガロンに跨り、とさかの赤い毛に掴まる。
「にゃ～」
なんとも気の抜ける声のあと、ガロンは人々の足元をすり抜けながら声の方へと走る。
「僕らは先回りをしましょう」
リョカの言葉にヘンリーは無言で頷き、路地裏を示して走り出した。
人の流れを不自然に遡る暴漢。突き飛ばされる人々は驚き、たまに罵倒しながらそれを見送る。

「まてや～！」
そしてそれを追うトセゲを乗せた猫一匹。暴漢は何度か振り返るも、声はすれど姿の見えない追っ手に眉をしかめるのみ。先ほどから路地裏に逃げようとすると、それを先回りしているかのように存在感があり、いまだ人ごみから出られない。
だが市場もどこまでも続くわけもなく、ようやく人の切れ間が見え始める。そしてとうとう抜けたとき、マントをなびかせる少年が現れる。
「そこまでだ！」
広場にて鞭を構える少年。ここでならそれを自在に操れるとばかりに、縦横無尽に砂埃を巻き起こす。
「神妙にしろ！　この不届き者が！」
「くっ……」
足元を掠める鞭の先端は見切れるようなものではなく、鋭く抉られた地面にその痛みを想像してしまう。
「ぐ……！」
男はさして抵抗をせず、盗んだと思しき財布をヘンリーに投げつけると、怯んだ瞬間に逃げ出す。
「待て！　逃げるな！」
ヘンリーはそれを追おうとするが、手に持った財布からばらばらと小銭がもれる。
「くそ、小銭が……」
律儀に小銭を拾う内にどんどん男は去っていく。ヘンリーはそれを歯軋りしながら見送り、財布を閉じる。
「あ、ありがとうございます！」
財布の持ち主であろう女性が彼の前にやってくる。
「なんのこれしき、朝飯前だ。だが、警備の者は何をしているんだ。こんなときこそ出番だろうに……」
市場の警備に不満を愚痴りながらヘンリーは財布を返す。すると、その手をぐっとつかまれ……、

「なんだ？　離せ……」
手首を力強く掴まれたことに驚くヘンリー。女に向き直ると、目と目の間にひとさし指を付きたてられる。不意のことにそれを見つめてしまい、
「手をかけさせないでね、腕白王子……、ラリホー」
強制睡眠魔法の罠に落ちた。
「な、ヘンリー！」
「兄上！」
ヘンリーが攻撃されたことに気付いたリョカとデールはかけよろうとする。しかし、背後から大きな麻袋を被せられ、声を出そうにも、もごもごと言葉にならない。
「行くぞ！」
男の低い声が聞こえたと思うと、次に聞こえたのはいななく馬の声と走りだす車の音だった……。

＊＊

「ったく、逃げ足の早いやっちゃ……。つか、リョカ達どこや……」
逃げた男を追いかけていた二匹はリョカ達と合流すべく市場に戻ってくる。しかし、そこには影も形も無く、また何かがあった痕跡すらなかった。
「ん？　坊主たちどこ行った？　迷子か？　ほんまにしょうのない奴らだ……」
ぶつくさいうシドレーだが、ガロンは地面を嗅ぞながら路地裏へと行く。
「おいどこ行くん。お前まで迷子になったら困るで……って……」
ふらふらと飛びながらついていくと、その先には緑色のブローチが落ちている。
「これは……あのガキのか？」
緑の二本線はラインハットの紋章であり、それはヘンリーのマン

トを肩口で止めていたものと同じものだった。

＊＊

パパスは窓の外を眺めていた。現王、チップ・ラインハルトが病に伏せたことを知らされ、助力を頼まれて来たのだ。

けれど、昨日から側近と名乗る者がかわるがわる顔を見せに来るだけ。せめて王の見舞いにでもと申し出るも、それも断られる。

軟禁されたというのが正直なところだろう。

――ふむ、どうしたものか……。

パパスは着慣れぬ礼服の袖をまくり、手で仰ぐ。春が遅刻してきたと思ったら夏が駆け足できたかのような最近、どうにも暑くてかなわなかった。

控えていた部屋のドアがノックされる。きいと扉が開き、兵士が一礼してから用件を述べる。

「パパス殿、王が内密の話があるとのことです。ご同行願えますか」

「うむ」

パパスは頷くと、兵士の後に続いた。

30　謀殺

ラインハットの王、チップ・ラインハルトとパパスは旧知の間柄であり、前の后であるミリア・ラインハルトとの結婚式にも招かれていた。

そのミリアが子を残して病没した後も、リョカを連れて城を訪れたこともある。

互いに同い年の子を持つ父として、また若干の差異はあるものの、奇しくも似た不幸な境遇を慰めあったものだ。

「陛下、パパス殿をお呼びいたしました……」

寝室と思しき豪奢なドアを前に、兵士がそう告げる。

「どうぞ……」

すると中からはチップではなく女の声がした。

前后が亡くなったあと、同じ頃に子を授かった側室を后に迎えたと聞いており、傍で看病しているのだろうと察する。

「失礼する」

パパスは軽くノックをしてからドアを開き、天蓋付きのベッドへと歩み寄る。

ふと気付く。

臭い。

部屋中に篭る御香の臭い。それは気分転換などと呼べるものではなく、何かを誤魔化すためのものに感じられる。

「よくお越しいただきました。パパス殿。チップも喜んでおりますわ……」

そう言って出迎えてくれたのは、二十そこそこのうら若き女性。

白を基調としたドレスは、身体のラインを現し、女性としての象徴とでもいうべき胸元が大きく誇張されていた。その隙間にラインハットの紋章入りのペンダントが飾られている。

カールした金の髪を軽くとめる黄金のティアラ。それほど富める

というわけでもないラインハットにおいてその装飾は、たとえ王族とはいえ贅沢といえるもの。

にこやかな笑顔だが、やや上がり気味の瞳がその気の強さをうかがわせ、不自然に赤い唇は生々しく艶やか。

とても看病をかってでる婦人のいでたちとは思えなかった。

「チップはなんでもお二人でお話しがあるとのこと、私、お暇しますわね……」

「そうですか……」

たいした挨拶もなく后はパパスの脇をすり抜けると、そそくさと部屋を出る。

「ふむ……」

その慌しさにも何かきな臭さを感じるパパス。だが、一番のそれは、この部屋に微かにある臭い。

死臭だ。

旅の途中、リョカの目にこそ触れさせないよう気をつけていたが、何度か潜り抜けてきたもの。問題は何故、この部屋にそれがあるのかということ、そして、先ほどから一言もしゃべらない古い友人についても……。

「チップ王……、チップ!!」

布団に触れた時に感じた。パパスはそれを剥ぎ、愕然とする。

「なんと……痛ましい……」

布団に覆われていたのは腐乱を始めてしばらくした先王の死体だった。

胸には深く銀の剣が刺さっており、目は大きく見開かれたままだった。

「チップよ、安らかに……」

パパスは亡き友にせめて死後の安らぎをと瞼を閉じ、印を組む。

「光の精霊よ、我が友を空へと解き放て、ニフラーヤ……」

パパスの詠唱の後、窓を透過して集まり始めた光の精霊が、無残に朽ち始めるチップの身体にまとわり付き、黒い霧を発散させる。

ニフラーヤは死後、弔うことも荼毘にふされることもないモノが悪霊に魅入られた際に、それを祓う禊の魔法である。もしそれを行わないと、生きる屍となり、現世を彷徨い始めることもある。とりわけ高貴な身分のものは悪霊も好み、その危険性が高いのだ。

それが所謂「腐った死体やワイトキング」となり、悪霊の依り代になる。

「パパス殿、どうかなされましたか？」

タイミングを見計らったかのようにノックなしで開けられるドア。その角度からでは天蓋のおかげでチップの姿は見えないのだが、

「だ、だれか！　王が、チップ王が殺された！」

弔いもせず悪霊に夫を晒していた女が喚くと、直ぐに衛兵達がやってくる。

「ちぃ、罠か！」

パパスは窓へと走り、そのまま飛び出す。

ガラスの破裂音の数秒後に地面に転げるパパス。生傷に回復魔法を唱える暇もなく、目指す先は……。

＊＊

「おーい、おっさん！　おっさん！」

宿に戻ったパパスに一番に声を掛けたのは緑の羽根トカゲ。一瞬なにものかと目を疑うが、人語を話す羽根トカゲがそう居るはずもないと気付く。

「お主は確か……、すまないがリョカはどこだ？　いますぐここを発つ必要がある」

「それが、坊主がさらわれたで！」

「なんだと！？」

「一緒にあそんどった坊主……えと、ヘンリーの着てたマントのこれ見つけてな！」

シドレーは手にしていた緑の紋章入りのブローチを渡す。

「ヘンリー？　まさか王子の身にも何かがあったのか？　というか、リョカが王子と？」
予期せぬ交友範囲に混乱するパパス。
「そんなんあとでええねん。それよか早よ行くで！　ガロンが臭い追えるけど、風吹いたらアウトや」
焦る羽トカゲの急き立てに我に帰るパパス。
「そうか、頼む！」
一人と一匹は宿を駆け出し、街の北を目指した……。

＊＊

麻袋に詰め込まれたリョカは、馬車に揺られること数時間、暗い場所で目を覚ました。
黴臭く、湿っぽく、肌寒い感じがする場所。当然ながら見当もつかない。
――どうしよう。ヘンリーは大丈夫かな？　デールさんも……。いやいや、おちつけ、今は焦ってもしょうがない。
ひとまず落ち着かせようとダンスニードルの数を数えるリョカ。脳裏ではサボテン達が互いの棘を痛がるコミカルなものが浮かぶ。
――さてと、まずは……。
周囲に人がいないか意識を研ぎ澄ます。
足音は無い。衣擦れ、呼吸も聞こえない。たまに雨音がする程度。
「風の精霊よ……、バギ……！」
リョカはせわしなく印を組むと、真空呪文を詠唱する。
自分ごと巻き込む真空刃だが、この状況で集められる風の精霊は乏しく、せいぜい服が破かれる程度。麻袋も同じく破れ、リョカは開いた穴から腕を出し、びりびりと破く。丈夫ではあるが、繊維の方向には弱く、すぐに出られた。
「ふぅ……。ここは一体……」
リョカの押し込められた部屋こそ暗がりであったが、隣の部屋か

らドアを縁取って明かりが漏れている。
「誰かいるかな……？」
リョカは静かにドアに忍び寄り、そっと隙間から外を見た。しかし、心配を他所に誰も居ない。
――誰も居ない……。
よく考えてみれば一緒にさらわれたのはこの国の王子。それを知らないとしても、その恰好からして、貴族やその関係だとすぐにわかるだろう。
対しリョカはというと、旅人の服に紫の外套をまとっているだけ。身代金が釣れるはずもないのは誰の眼にも明らかだ。見た目もただの子供。麻袋から自力で逃げられるはずもないと判断されたのだろう。
――どうしよう。父さんに知らせないと。でも、ここがどこだかわからない。それにヘンリーは……。
あの女は最初からヘンリーを狙っていた。きっと窃盗騒ぎも全て罠。おそらくは人々の意識を窃盗に向けさせ、その間に誘拐するのが目的だったのだろう。
ヘンリーが物取りを追いかけたことで多少の手間をとらせたわけだが、まんまと捕まってしまった。
――やっぱり先にヘンリーとデールさんを探したほうがいい。
リョカは自分が誘拐の対象ではないのなら比較的安全だと判断し、扉を開けた。

部屋から廊下に出ると松明が設置されており、歩く程度には支障が無かった。
驚くべきは壁にいくつもある模様。大半は繰り返しであびたが、それには見覚えがある。
――古代文字かな？
魔法の練習もしていたリョカは、古代文字を目にすることが多い。多少ならパパスやサンチョも知識としてもっており、訳してくれた。

壁の文字の詳しい内容こそわからないが、それは何かを諫める文句が読めた。

『悲しみに暮れる者、讒言にすがり、そして道を踏み外した』

それが何を表すのかわからずにしばし悩むも、そんな場合ではないと思い直り、明かりを辿って移動する。

しばらく進むと広い場所に出た。

まるで小さな町のような造りで、小屋がいくつか見える。

――どこかにヘンリーも居るのかな？

リョカは目を瞑り耳を澄ますが、キーんと耳鳴りがするぐらい。

――近くの部屋から見てみよう……。

とりあえず直ぐに入れそうな小屋へと走った。

＋＋

31　脱出

薄暗い中、目が覚めた。額に水が滴り落ちたおかげだろう。
松明の火が揺れるのがわかる。ぼやけていた視界もまた定まり始める。
「お目覚めかい？　王子様」
聞き覚えのある声がした。先ほど不覚を取った相手の声と知ると、ヘンリーは立ち上がり、腰を探る。しかし、装備しているはずの蛇皮の鞭はない。
「危ないおもちゃはここに……」
声の方に振り返ると、女が鞭を掴んでいた。
「くっ……」
劣勢を知るヘンリーは無意味に騒ぐことはしなかった。そして、
「ほーら！」
頬を掠める鞭の先端にも、やはり騒ぐことをしなかった……。

＊＊

音がした。
空を切る音だった。
ヘンリーと出会ったときのこと、焼き鳥屋の列に横入りした男を咎めようとしたときに似た……。
――違う？
だがよくよく耳を澄ますと、そのキレが違うことに気付く。そして、今この場所で鞭を振るわれる対象が誰であるかを考えると、リョカの足は自然と早足になっていた。

＋＋

「へぇ、王子様、がんばるじゃないか……。これが生娘ならとうにお漏らしして許しを請うてるよ？」

女の操る鞭を受けていたヘンリー。彼の衣服はところどころ破けており、血が赤く滲んでいた。

もちろん、彼もただそれを受けていただけではない。インパクトの瞬間をそらして（この場合は女の手でそれを把握している）ダメージを減らしていた。

「くっ……」

とはいえ痛みは蓄積しており、拷問が始まってから初めて膝を着く。

「ふふん、ガキがいきがるなっての！」

容赦なく振り下ろされる鞭。ヘンリーはそれを肩で受けつつ、苦悶の表情になる。

「さっきから生意気だね。あんたのその顔見てるといらいらしてくるよ」

女は鞭を構えると、ヘンリーの顔に向かって再び鞭を振るう……が、

「……！？」

振るわれた鞭は飛び出したブーメランに絡みつき、軌道がおかしくなる。

「なっ……！？　誰だ！？」

驚く女はブーメランの投げられた方を向くが、次の瞬間襲ってきたのは弱いながらも真空魔法。反射的に顔を庇おうと両腕を構えるが、弱い指先を掠めたとき、痛みでそれを離してしまう。

「しまった！」

手繰り寄せられる鞭を見て女は叫ぶが、そこには生意気なガキがしっかりと鞭を携えており……、

「女、世話になったな……」

床を二三度叩くと、それはごうごうと音を立てて……。

＊＊

ヘンリーが二度三度床を叩くと女は大人しくなり、リョカが近くにあった荒縄で縛る。そのまま部屋の奥に押し込めたあと、二人はようやく息をつく。

「礼を言うぞ。リョカよ」

「んーん、ヘンリーこそ無事で良かったよ。待ってて、今ホイミをするから……」

リョカは念入りに印を組むと、ヘンリーの痛々しい傷口に手を翳す。

「ほう、回復魔法まで使えるのか……」

「簡単なのしかできないけどね……」

驚くヘンリーに照れながら言うリョカ。彼と会ってから出し抜くというか驚かせるのはこれが初めてかもしれないと、ちょっと得意になってしまう。

「ますますお前を部下にしたいな……。いや、もうお前は俺の子分か……。いや、良い子分を持ったものだ」

「ははは……」

癒え始める傷口を擦りながら、ヘンリーは唇を噛みしめる。

「奴らは何者だ？　俺を王子と呼んでいたし、やはりそれを知っての賊か……。となるとデールも危ないな。リョカよ、すまないが付き合え」

「はい、僕もそのつもりだよ」

一転して真面目な表情になるヘンリーに、リョカは力強く頷いた……。

周囲を伺い、気配を探る。たまに魔物の姿を見かけ、すれすれで戦闘を回避する。

いくつか小屋を探ってみたが、デールと思しき者はいない。それでも二人は必死で古代遺跡の中を巡っていた。

「……いったいどうなっているんだろうな。この廃墟、迷路のようだ」

しばらく歩いていたヘンリーは、この複雑な造りに辟易したように呟く。

古代遺跡内部にはそこそこ深い水路がいくつもあり、それをわたるには、たとえ直ぐ目の前であっても大きく迂回して立体交差路を通る必要がある。

水路を横切ることも考えたが、足跡が残ることや水の音で脱走がばれると大変なので、仕方なしに遠回りをする。

「……なにか理由があるのかな？」

リョカは不思議に思いつつ、今は先を急ぐべきと、微かな疑念を飲む。

「むっ……、なんだか大きな小屋……というのも変だが、あるぞ」

ヘンリーの示す方向には「大きな小屋」があり、そこから明かりが見える。

「デールさん、あそこにいるのかな……」

「うむ。だが……、何故俺達は別々に閉じ込められたのだ？　三人一緒のほうが監視も楽だろうに……」

「さあ？」

「まあいい、今はデールのことのほうが心配だ。いくぞ、リョカ」

「はい」

ヘンリーは鞭を握りなおし、リョカもやや刃こぼれが目立ち始めた刃のブーメランと、鋼の杖を構えた。

＊＊

「……兄上をどうするつもりなんですか？」

「ご心配なく、デール様はただ大人しく時が来るのを待てばいいの

です。さすればラインハットの王となれるでしょう」
「なにを言っている！　まだ父は健在だ。それなのに……」
「ほほほ、本当にそう思われますか？」
「まさか既に父上も？」
「ここまでして生かしておいでと思うとは、さすがデール様」
「だが僕は王位に興味はない。兄上、ヘンリーこそが時期王に相応しいお方だ」
「そう謙遜なさらずに……。貴方には貴方にしか出来ない才能がありますゆえ……、時期王にはデール様が即位なさるべきでしょう」
「ならば時期王として命じる！　そして兄上とリョカさんを解放しろ！」
「ほほほ、貴方の命令など誰が聞きますか？　貴方が王となり最初にすべきことは傀儡……、操り人形になられることです。そう、誰の言葉に素直に頷き、ただただ愚かな王を演じること、それが貴方の才能……」
「ぐっ！　貴様、無礼な！　兄上！　リョカさん！」

＊＊

壁に耳をつけながら中の様子を伺う二人。中からは気味の悪い男の声とデールの声が聞こえ、今回のおおよその因果がわかる。
「……なるほどな、アルミナ義母様か……」
「アルミナ？」
「うむ、デールの母だ。俺の義理の母でもある。女狐だとは思っていたが、まさかここまでだいそれたことをしようとはな……」
話の内容から察するにすでに父は廃されており、その後継を継ぐべく第一王子であるヘンリーを誘拐し、おそらくは父と同じ運命にあわせる算段なのだろう。
「ひとまずデールの安全は確保できたわけか……。だが、おおよそのことを知ってしまった俺とリョカは追われる身……か」

デールの安泰に一息つくヘンリー。自らは王位どころか命の危険が迫っているというのに、不安を見せない。それは彼なりの強がりなのか？

「となれば俺も流浪の身分か……。そのときは世話になるかもな、リョカよ」

等身大の笑顔を浮かべるヘンリー。もしかしたら彼は王族という身分を……。

「ヘンリー、こんなときに何を……」

まだ二日程度の付き合いでしかないが、自信を喪失しかけている彼が酷く小さく見えた。リョカは何故か悔しさを抱き、彼を叱咤するかのように肩を掴む。

「冗談だ。俺はラインハット国をより豊かな国にする責任があるのだからな……。それよりデールを救出するぞ」

ヘンリーは小屋のドアノブに鞭を掛け、リョカと共にデールに近い窓枠へと移動する。リョカは素早く印を組み、窓の鍵を開ける。

「ほお、そんな魔法まで使えるのか……。これは困ったな。引き出しの奥も安全ではないぞ」

おどけてみせるヘンリーに「そんなことしません」と抗議するリョカ。空元気でも、唇にいたずらな歪みが戻ったことが素直に嬉しい。

ヘンリーはドアノブを引き、中の者の注意を逸らす。

リョカは窓をこっそりと開け、デールとアイコンタクトを取る。

デールはリョカの姿に驚いた様子だが、すぐに平静を装う。彼は縛られておらず、そのまま窓枠へと歩み寄ってきた。

「リョカさん、兄上は？」

「ヘンリーも一緒にいます。さ、一緒に逃げましょう」

「ですが、僕では足手まといになります。それに、彼らは二人を無事に帰すつもりはないでしょう。まだ気付かれていないうちに早く……」

渋るデールだが、ヘンリーに比べて一回り体躯の小さい彼に脱出

劇は困難だろう。
「……デール、何をしている、早く逃げるぞ！」
ドアでの陽動を終えたヘンリーが戻ってきて、弟の頭をこつんと叩く。
「お前は俺の子分なのだ。こんな黴臭い場所に一人おいていけるか、ばか者が」
「兄上」
その言葉に意を決したデールは窓枠をよじ登り、小屋を出る。
「いくぞ！」
まだ中に居た者は気付いていないようだが、ドアノブが捻られる音がした。
驚いたデールはその手を引く二人に頭から突っ込む。三人仲良く地べたに這いずりながら、ゆっくりと小屋から遠ざかる。
「風でしょうかね？　ほほほ……？　デール様？　カクレンボならお暇なときに……」
もぬけの殻と成した部屋で男はしばし鬼の役を演じていた。

＊＊

32　反撃

迷宮を駆ける三人。ヘンリー、リョカの脱出に気付いたらしく、魔物達があらぶりはじめる。

「くっ！　この忙しいときに！」

ヘンリーは得意の操鞭術で次々に魔物達をなぎ倒す。

「唸れ！　バギ！　いけ、ブーメラン！」

リョカも負けじと真空魔法、ブーメランで蹴散らし、活路を開く。

「いたぞ、こっちだ！」

「もっと応援をよこせ！」

だが多勢に無勢、劣勢に変わりはなく、次々と集まる魔物や賊に徐々に追い詰められる。

「どうする？　今更ごめんなさいと謝ったところで許してもらえるともおもえんな……」

「ええ。だけど、最後まで諦めません」

二人はデールを庇いながら賊と対峙する。

「二人とも、僕がここに残ればせめて……」

「そう簡単に物事が進むと思うなデールよ」

「ですが、もう……」

この場を逆転する方法などありえない。たとえリョカが魔法を使えようと、兄の鞭が鋭いとはいえ、体力は無尽蔵ではないのだから。

「はぁ！」

空を切る鞭の先端。しかし、それは不意に差し出されたしなやかな杖にまきつく。こうなると単純な力比べになり、大人と子供、多数と一人ではすぐに結果も見える。

「ふふ……、万事窮すか……」

「く、バギ！」

虚空に放たれる真空刃、しかし、それも標的を手前に霧散する。

風の無い屋内では精霊も集められない。せめて魔力で増幅させるこ

とができれば多少は抗えたのだが、疲弊したリョカにそれはできない。
「ぐっ！　ぐわ！　なんだ、一体！」
膝を着きかけたところで、悲鳴が響く。さらに甘い臭いが漂い始め……、
「まさか、ヘンリー、デール、この空気を吸わないで！」
何事かと思いつつ口をマントで覆う二人、リョカも外套で口を覆う。
優位に立っていた賊たちは突然のことに混乱しており、その空気の不穏さに気付かず……、一人、また一人と眠りに落ちる。
「おーい、リョカ！　ヘンリー王子！　無事でしたか！」
そしてパパスの声がした。
「父さん！　父さん！」
無事を知らせようと声を張り上げるリョカ。倒れた男たちにかまいもせずに駆け出す。
「にゃおーん！」
最初に飛び出してきたのはガロン。彼はリョカの足元をぐるぐる走り回る。
「ガロン！　シドレーも……」
「ああ、よかったで坊主。いやいやいや、全然よかない。つか、この親父も追われる身やで」
「え？」
父の顔は険しく、簡易詠唱のベホイミをかけつつ、ヘンリー達を促す。
「うむ。正直なところ再会を喜ぶ時間も惜しい。今はとにかくここを出る必要がある」
「わかりました」
リョカもそれに頷き、父の来たほうへと走り出す。

難解な迷路もガロンが匂いを覚えていてくれたので難なく出口に向かうことができる。
追いかけてくる賊も立ちふさがる魔物もパパスの剣に切り伏せられた。

「貴様の父は本当に強いな！」
パパスの活躍に目を見張るヘンリー。リョカはそれに力強く頷く。
「もうすぐですぞ！」
徐々に向かい風が強くなりはじめ、外の空気の匂いがしだした。
だが……、
「そこまでですよ……」
先ほど聞いた声の主が、出口を前にして立ちふさがる。ローブに身を包む魔物は不敵に微笑み、通せんぼする。
背後には鎧を身にまとった魔物と灰色の馬の魔物がいた。それらはこれまでの雑魚とはみるからに格が違う。
「邪魔をするな！」
パパスは問答する間もなく剣を振るう。
ガシーン！
鋭い金属音が響き、剣戟が受け止められる。
「ぬっ？」
ナマクラな剣ならば受けることも敵わず、なぎ払われるそれを、鎧の魔物は受けとめた。
「ぐぅ……人間風情が……」
だが、魔物もそれが限界らしく、一歩下がってやりすごす。
「なんの！」
パパスは好機とみなして再び切りかかる。
「ぐ、くっ、ぬう！」
初撃こそ防いだものの圧されていく鎧の魔物。業物と思しき剣も受け流しが決まらず、刃こぼれと悲鳴を上げる。
「ぶひひぃーん！」

鎧の魔物に加勢しようと、馬の魔物が嘶きをあげて襲いかかる。
「そうはさせるか！」
リョカはブーメランを馬の魔物の目線ぎりぎりのところに飛ばし、動きを止める。ついでヘンリーの放った鞭がその左腕に逆手で絡みつく。
「ぐふぅ！？　ぬぅ、ガキが！」
子供とはいえ、力の入りにくい恰好に絡まる鞭。全体重をかけて引っ張られてしまい、引き離せない。
「だぁ！」
間髪いれずにリョカは鋼の杖で殴りかかり、足止めに専念する。
「ぬぅ、おい、ジャミよ！　そんなガキ共に手間取ってないで手伝え！」
鎧の魔物は不外ない相方に向かって叫ぶ。その間もパパスの攻撃は勢い衰えず、罅の入った剣は次の一撃で折れてしまう。
「ゴンズよ、そうしたいのはやまやまだが、このガキ、考えてやがる！」
リョカとガロン、シドレーの攻健を捌きながら、なんとか左腕を解き放ちたいジャミ。しかし、ヘンリーもジャミの行動を制限させるように移動するため、それもできない。
「ぬおおおぉぉぉっ！」
防戦一方のゴンズを見て、パパスは決着をつけようと両手で剣を振りかぶり、雄たけびと共に振り下ろす。
「ぐぅ！」
盾をかざしてそれを堪えようとするが、鋭く重い一撃にそれは脆弱すぎ……、
バリン！　ずばしゃ……。
ゴンズの左肩口からわき腹にかけて剣が走り、真っ赤な血が舞う。
「ぬぅ……なんと……まさか人間ごときに……」
盾が犠牲になり威力を殺いだらしく、ゴンズは膝をつくも絶命は免れる。とはいえ今すぐに戦える状況にもないらしく、折れた剣を

着きながらパパスを睨む。
「リョカよ、今ゆくぞ！」
リョカに足止めをくらっていたジャミはゴンズの敗北を見て焦り始める。
「ぐ、このガキ、離れろ！　くそ、くそ！　バギマ！」
ジャミは不自由な左手で中級真空魔法を放つ。だが、この混戦状況、狭い場所で向きも考えずにそれを放てばどうなるか？　荒れ狂う真空刃は自分も巻き込みながら、天井、床を切り刻み、砂埃を巻き上げる。
「ぐわ、前が、ぐふっ、げほ、げは！」
人間よりも数倍鼻の穴の大きいジャミは巻き起こる砂埃を吸い込み咽ぶ。
「わっ！」
「ヘンリー！」
そのはずみで鞭の先端が切られたらしく、しりもちを着くヘンリー。リョカは埃を拭いながら彼に向かって回復魔法を唱える。
「ぎゃぁぁーー！！」
まだ砂埃が舞うというのに、ジャミの悲鳴が上がる。パパスは目を瞑りながらも寸前の状況からジャミを捉えており、胴に一撃をおみまいした。
「ぐう、ぐは……」
だが、やや踏み込みが浅く、致命傷にはいたらない。
「ほほほ、やりますねえ……。たかが人間ごときに遅れをとるとは……」
ローブの男はこの状況にも関わらず余裕の高笑い。膝を着くゴンズを蹴飛ばして前に出る。
「なかなかどうして……。そして子供と侮っておりましたよ……。ですが……ギラ！」
詠唱無しの閃光魔法により、視界が光で見えなくなる。
「これならどうでしょう？」

視界を奪われながらも身構えるパパス。だが、次の攻撃は来ない。
「ぬっ……」
ローブの男はリョカを踏みつけ、ヘンリーを抱え、その首に鋭く伸びた爪を当てていた。
ガロンとシドレーは魔法で眠らされているらしく、険しい表情で床に伏せている。
「貴様……」
「この子達の命がどうなってもよいのでしょうかな？」
途端に劣勢に追い込まれたパパス。剣を握る手に力は込めたままだが、それを振るう先がない。
「ほら、二人ともさっさと起きなさい」
傷を癒していたゴンズとジャミはゆっくりと立ち上がり、一転した状況に薄ら笑いを浮かべる。
「さあ、もうわかっていると思いますが……、もし貴方が抵抗なさればこの子達の命はありません」
「……わかった……、従おう」
息子と友人の子を盾に取られたパパスは考える間もなく武器を捨てると、観念したように目を瞑る。
「ふむ、よい心がけです……。ささ、お前達、先ほどの恨みを十分に晴らすとよいでしょう」
ローブの男の言葉に二匹の魔物は肩をいからせ、そして……。

＊＊

立ち尽くすパパスに振るわれる暴力の嵐。
ジャミのこぶしがパパスの鳩尾を抉る。
ゴンズの折れた剣が背中を切り裂く。
戯れに唱えられた真空魔法が肌を刻み、燃え盛る炎が傷口を焦がす。
それでもパパスはじっと耐え忍ぶ。

＊＊

「く、もうやめろ！　貴様ら、誇りはないのか！　質を取り、抵抗も出来ない者を弄るとは、たとえ魔物といえど、見下げたものだぞ！」

首根っこをつかまれたヘンリーだが、まだ心まで屈していないらしく、啖呵を切る。

33

「ほほう、ここにきてまだ自分の置かれた状況を理解していないとみえますね。私がちょっとでも力を込めれば貴方なんてころっと死んでしまいますよ？」

「ふん、俺が死ねばパパスの枷もなくなる。そうすれば貴様ごと……！」

「ぐわぁ！」

男は足蹴にしていたリョカを強く踏みつける。

「そうしたら今度はこの虫けらとデールさんに質になってもらいましょうかね？」

「くう、貴様……！　パパス殿！　こいつは絶対に俺達を助けるつもりはない！　せめて貴方だけでも！」

「まったく貴方は困った王子様ですね。それでこそ王者の血筋とでも言いましょうか……、ですが、これを見たらパパス殿も観念するしかありますまい？」

男は軽く詠唱をすると、空間から大きな黒い鎌を取り出す。それは人骨が散りばめられた見るからに禍々しいものであり、青白い湯気のようなものを出していた。

「死神の鎌といいます。これで首をはねられた者は救われぬ魂となり、死後も永遠に悲しみと冷たい空間に閉じ込められるそうですが……、実験しても確証がなくて困ってるんですよ。だってほら、死んじゃうでしょう？　もしよかったらこの子達で試してみましょうと思いまして……」

「ぐぅ、心配なさらずに王子……。私は屈しません。そのうち、このモンスター共のほうが弄り疲れてしまうでしょう……」

そういって笑うパパスだが、体中至るところから血を流し、たまに見せる回復魔法でも追いつきそうにない。

その間も攻撃の手が止まることはなく、パパスはがっくりと膝を

つき、そのままうつ伏せに倒れる。
「父さん！」
「ふむ、リョカよ……。すまないな……、こんなことになって……。私だけならともかく、お前にまで、こんな辛い思いをさせて……」
「そんなこと、それよりも父さん、僕のことはいいから、早くそいつらをやっつけてよ！」
地べたに這い蹲りながら交わされる会話に薄ら笑いを浮かべるローブの男。彼はそっと手を掲げ、ジャミとゴンズを控えさせる。
「よく聞いてくれ、お前の母は……生きている。この世界の、どこか、いずれかで、今も、生きている。それを探すため、私は旅をしていた。お前に、お前に母のいる、家族というものを……見せたかった……。が、どうやらもう私も、ここまでらしい……。だが、希望だけは失うな……。私が調べてきた、これまでのこと、妻に関わることだ、きっと、いつか、必ずや……妻を、マー……ぐふぅ！」
「茶番はそこまでで結構です……」
言い終わるのを待たずにローブの男はパパスの背中に鎌を振るう。鮮血も勢いをなくし、ただだらだらと流れる。
「父さん！　父さん！　しっかりしてよ！　僕は、僕はまだ！」
リョカは激しく身じろぎ、抗おうとする。
「騒がしいのは嫌いです」
しかし、ローブの男はそんな抵抗も許さず、彼をボールのように蹴り上げると、そのまま壁にぶつけ、さらにヘンリーをゴミでも放るかのように投げつける。
「ぐわあ！」
二人ともつぶれた蛙のように呻くと、そのまま気を失ったらしく動かなくなる。
「さてと、手間取りましたが……、デール様、お城へ戻っていただけますかね？」
思い出したように振り返るローブの男。デールは終始震えており、がちがちと歯を鳴らしていた。

「は、はい……」
恐怖におびえたデールが頷くのは当然のこと。彼にこの現状を覆すような力も知恵もないのだから……。
「ゲマ様、このガキと二匹はどうしましょう？」
煮え湯を飲まされたジャミとしてはいますぐにでもパパスのあとを追わせたいのだろう、鼻息を荒くしている。
「そうですね……、我らの教団ではまだまだ奴隷が不足しておりますし、連れて帰りましょう。そちらのベビーニューとベビーパンサーは……、しばらくすればまた野生に戻るでしょうし、そうでなければ死ぬだけです。ほっておきなさい」
「は……」
ジャミとゴンズは頷くと、二人を抱えて遺跡を出る。
ゲマは怯えたままのデールの手を引く。
「ささ、行きましょう。貴方にはラインハット国を発展させる責務があります。我らが光の教団のためにも……」
「は……はい……」
無表情で頷くデールの目に意思はなく、視点も定まらない。
――ほほう、もう言いなりになってくれましたか。これなら調教の必要もありませんね……。
多少の滞りもデールを恐怖で支配するために有益であったと、ゲマは一人ほくそ笑み、光の精霊を集めると、移動呪文を唱えた……。

34―奉仕者

岩を掘り出し、運び、削り、また運ぶ。
重ねて、組み込み、整える。
その繰り返し。
日が昇るより先に始まり、月が傾く頃にようやく終る。
夏の日差しに肌が焦げ、冬の寒さに心が凍る。
降り注ぐ鞭に従い、乾きを潤す水に群がる。
絶壁の孤島。四方は海に囲まれ、大鷲の姿は餌を求めて今日も舞う。
光の神殿、総本山建築現場はこの世の地獄であった。

「さあ罪深き者達よ、奉仕の時間だ。我らが光の神を迎えるため、今日も働けることを光栄に思うがよい」
薄暗い、垢と便の匂いの篭る寝床――というのも憚られる一室に、甲高い男の声が響く。
ゆらりと起き上がる影につられ、また一人、立ち上がる。
薄汚れ、ところどころほつれた胴衣に身を包む者達。目は空ろで、ぜんまい仕掛けのおもちゃが、切れ掛かった動力でもがいてるようにも見える。彼らの部屋を出るその様は、まるで生気が無いのだ。
彼らは光の教団の信徒にして最下層の存在で、奉仕者とされる。
奉仕者は過去の罪の赦しを請うため、こうして過酷な労働の日々を送ることを義務付けられており、教団は愛を持って彼らを使役している。
だが、現実には口減らしで買われた子、大小問わずの罪人など、はみ出した存在を集めた奴隷に過ぎない。彼らはいつ終るとも知らない神殿建設のていのよい労働力なのだ。
大方の奉仕者が部屋を出た頃、まだ隅に残る者がいた。
一人は寝たままの奉仕者に対し手を翳し、呪文を必死に詠唱して

いた。
もう一人はその様子を見ながら顎髭の生え具合を撫で、壁を指でなぞっていた。
「おい、お前ら、もうとっくに就労時間が始まっているのだぞ。さっさと部屋を出ろ」
苛立った教団員は鞭を振るいながら叫ぶ。
「ですが、ピエトロの解毒がまだ終らなくて……」
黒髪の青年は振り返らず、そう答える。
寝そべったままの奉仕者の顔色は悪く、紫色の斑点がいくつか見えた。それは痣ではなく、内側から染み出した、病による悪質なものと推測できる。
「貴様ら教団の子は光の神に守られているのだ。病などというものは心神の気持ちさえあれば自然と浄化される。まさか労働の喜びをサボろうとしているのではなかろうな？」
「監視殿、これは流行り病かもしれません。もし放置したら、ここの宿舎の全員が感染しかねません」
流行り病という言葉に教団員の歩みが止まる。彼とて心神の気持ちで病が治るなどと思っているはずもなく、もし全滅となれば管理責任を問われかねない。
「むぅ、ではその……ピエトロか、ソイツを処置室に運ぶとしよう。そこの緑の髪。お前、ソイツを運べ」
顎髭を触っていた青年はちらりと教団員を見ると、一瞬考えた後、ピエトロに近寄り、無理やり立たせる。
「ヘンリー、ピエトロはまだ安静にしていないと……」
黒髪の青年はヘンリーの行動に驚いたらしく、それを制止しようとする。
「リョカ、悪いが命令なんだ。それにピエトロの病が流行り病なら、ここに置くことで全員が危険に晒される。お前の気持ちはわかるが、こうするしかないんだ」
「だけど……」

冷静なヘンリーの意見に、リョカは唇を噛む。
解毒魔法キアリーの効果は確かにある。暫く続けることで全快も可能だと見込みもある。だが、それは衛生的な場所と十分な栄養、それに休養が必要だ。それらが望めないのはわかりきったことであり、リョカの解毒は病の進行を抑える程度でしかない。
「リョカ、僕は大丈夫だから……。今までありがとう……」
ピエトロは薄目を開けると、リョカに力なく笑い、ヘンリーの肩に捉まりながらよろよろと歩く。
「まって、せめて僕も肩を貸す」
リョカは二人に駆け寄ろうとするが、教団員に阻まれる。
「おっと。お前には別の仕事がある。解毒魔法が使えるのだったな？　もしかしたら俺にもその病が移るかもしれんから、念の為に浄化を頼む」
それこそ心神の気持ちで何とかしてもらいたいことなのだが、ここで彼の機嫌を損ねてはピエトロの処置室行きも危うくなると、リョカは印を組み、解毒のために大地の精霊を集めた……。

＊＊――＊＊

リョカは奉仕者になり、三年の月日が過ぎていた。
父の死に苛まれ、過酷な労働に筋肉が悲鳴を上げ、病や事故に倒れる奉仕者を眺める日々、次第に感情が磨り減りつつ、それでも彼は自分のできることで人々を助けていた。
同い年くらいの奉仕者、ピエトロらは彼の回復魔法や解毒魔法により傷を癒し、病を克服し感謝もした。だが、年老いた者はそれを拒み、死を望むもの多かった。
リョカは彼らの無念を前に歯噛みし、無力を悲しみつつ日々を送ってきた。
一方、共に身を窶したヘンリーはというと、従順に監視に従う素振りを見せたと思うと、ぱっと姿を消しては夕飯の頃に戻ってくる

という神出鬼没な様子を見せていた。
あの気位の高いヘンリーが監視にへつらう様子を、リョカは悲しさとは違う何か落胆を感じていた。だが、未来の見えない生活の中、それを軽蔑する気にはならなかった。

兵舎にて病の予防を行うリョカ。監視の男の周りには大地の精霊が漂い、黒い霧を空中に誘い出していた。
「終りました……」
「そうか、ご苦労……」
役目を終えた大地の精霊が地面に溶け込んでいく。監視の男は着物を正し、肩をまわす。
「ふむ。それでは持ち場に戻れ」
「はい」
リョカは兵舎を出ると、岩切り場へと向かった……。

＊＊――＊＊

一日二回の食事は昼と夜半頃にある。
筋ばった肉と根菜の雑煮の一種類のみで、味は濃い塩味のもの。年齢性別問わず、一人椀に一杯のみの質素なものだが、使われる野菜が安価な割りに栄養価の高いのが救いだった。
リョカが椀を啜っていると、ヘンリーがやってくる。今日もどこかでサボっていたのか、岩切り場でも、神殿側でも姿を見ることは無かった。
「ヘンリー、ピエトロは？」
リョカは彼の素行などよりも、近い年の彼のことが気になっており、開口一番に尋ねる。
「聞いてどうする？」
だが、ヘンリーの言葉は簡素ながら絶望を与えるものだった。
「そう……」

処置室という場所がどのような場所かリョカは知らない。ただ、その場所に運ばれた者が戻ってきたという話もない。

本当のところ、リョカは処置室に行きたかった。自分の魔法で少しでも人を救えるのなら、役に立ちたいという気持ちがあったからだ。しかし、処置室は決まって老人が付き添うばかりで、その老人も処置室については何一つ教えてくれないのだ。

「ねえ、ヘンリー。処置室には……」

「ああ、そのことで話がある。いや、今すぐにはできない」

椀に反響させたぼそぼそとした声。だが、前を向く彼の瞳には、前に見せた輝きが見えた。

「……わかったよ」

だから頷いた。かつて彼を親分と呼んだときの、子供心な頼り強さがあったから……。

35―マリア

それは唐突なことだった。

白い、まだ汚れていない胴衣を着た女がやってきた。

新しい奉仕者で非力ながら水汲みを担当するらしい。

それだけならそう珍しいことではない。

問題なのは彼女の容姿。

癖く金色の髪、白い肌。二重瞼は悲しみに伏せられていたが、高い鼻と形の良い唇のせいで、その美貌が際立つ。きっと笑ったら優しい優雅なそれを見せてくれると思う、そんな人だった。

年こそリョカと同じくらいだが、胸の膨らみやお尻の丸みを見るに、そこそこ良い暮らしをしていたのだろうと伺える。

彼女の名はマリア・リエル。つい先日まで教団幹部の従者をしていたらしい。だが、ある「粗相」を起こしてしまい、その罪を償うために奉仕者となったらしい。

リョカは彼女を見てつばを飲んだ。これまで出会ってきた女性の誰とも違う雰囲気に、胸がざわめいた。

それはヘンリーも同じらしく、目を丸くさせながら、口を開いてしばし呆然としていた。

その日から、たびたび水飲み場に出向く働き者のヘンリーが見受けられるようになった……。

＊＊――＊＊

降り注ぐ太陽、神殿頂上部の作業では日差しを遮るものもなく、ただひたすら暑さに耐える必要があった。

そんな中、水飲み場だけは簡易の小屋があり、水を運ぶマリアが伏し目がちな笑顔と一緒に、ひと時の清涼感をくれた。

「すみません、水をください……」
リョカは照れくささがあったが、それは今も同じ。他の奉仕者に比べても仕事量を多くこなすリョカだが、以前より水をもらいに行く回数が増えたことを自覚していた。
「はい、どうぞ。リョカさん、がんばってくださいね」
「ありがとうございます」
それだけ言うのが精一杯だった。
かつて知り合えた女の子達なら、向こうから歩み寄るどころか踏み込んできてくれたおかげで自然と会話ができた。だが、彼女のように風に吹かれてはそのままよろめくようなたおやかさを持った人だと、どうにも腰が引けてしまう。
「マリア、俺にも水をくれ。こう暑くてはかなわないからな」
「はいはい、ヘンリーさんも午後のお仕事がんばってくださいね。あんまりさぼっちゃだめですよ？」
「はは、君から水をもらえるんだ、いつもの倍は働いているつもりだよ」
「まぁ……、うふふ」
一方で彼女に自然と振舞える友人を羨ましく思えた。
そして、彼女が彼を見る視線にも、どこか柔らかさがあることに気付いていた。
リョカは正直なところ、嫉妬していた。
この数週間、同じ場所で、同じ程度の時間を過ごしていたはずなのに、リョカとマリアでは共に奉仕者同士でしかない。
だが、ヘンリーはいつの間にか彼女と距離が狭まっていた。彼女は彼を前にして、よく笑う。愛想笑いではなく、心から楽しんでいるように。
どこに差がついたのだろう。互いに同じ奉仕者なのに、どこに差がついたのだろう。
リョカは奉仕者の仲間を魔法で癒してきた。それは確かに感謝される行為であった。

一人減ればそれだけ他の奉仕者に仕事が向かうのだから、頭数が減りにくくなるのはありがたいことなのだ。

対しヘンリーはどこかズルさがあった。監視の目を盗んではどこかへ姿をくらましていたり、要領よく監視に取り入ろうとしたりと。なのに、彼を悪く言うものは少ない。

それが不満だった。

リョカは最近、寝る前にそんなことを考えることが多かった。

答えはわからない……？　いや、少しだけヒントのようなものがあった。

それはリョカに無くてヘンリーにある何か……。

何かが決定的な差になっているのだろう。

＋＋―――＋＋

いつものように水を汲み、運ぶマリア。

白い胴衣もだんだんと薄汚れ、櫛も満足に入れられない髪は最近切ってしまった。日々の労働で白い肌も焼け始め、腕もやや太くなる。

初めてここへ来た時のたおやかな雰囲気も消えたが、爽やかさが備わり、破れた胴衣から見える肌に生々しさが見えた。

監視の一人は階段を上がる彼女を見つめ、ゴクリと唾を飲む。

瓶を持つ彼女は水がこぼれないようにと慎重に、気をつけながら歩いているためか、身なりにおろそかになっていた。

やや大きめの胴衣、ほつれも目立ち始め、階段の上から眺めると、下着もつけていない胸元が風の具合によっては覗けてしまう。

目をしばたかせてマリアを見る監視の男。

ここへ来る奉仕者の女はどれも器量悪しの者ばかりで、彼女のような存在は彼らにとっても異質である。夕飯のおかずや労働のサボリを理由に何人かの女奉仕者ととり引きをする監視は多く、その欲望が彼女に向かないはずもない。

ただ、彼女の場合、兄が教団員で、その地位は奉仕者の監視より高い立場にあるらしく、あまり下手に手を出して行為が発覚した場合、監視から奉仕者に落されかねない。

また、労働自体も比較的楽な水汲みとあり、さらに小食であることからサボリや食欲で誘惑することもできない。かゆいところに手が届かない存在なのだ。

そんな鬱憤を抱く監視が下心を出さぬはずもなく、風のイタズラで見え隠れする彼女の胸元を盗み見ていた。

未だ白い肌にふっくらとした胸。手で嗜めばややあまる程度のおっぱいと、小ぶりな乳首。もし彼女が普通の奉仕者なら、何かしら文句をつけて慰みものにしていたであろう。それともか、ひと時のたんぱく質で腰を振ってくれるだろうか？　下卑た妄想をしつつ、彼女が監視の脇を通りすぎようとしたとき、堪えられなくなった手が彼女のお尻に……。

「きゃっ！」

驚いたマリアは胴衣の後ろを押える。と、同時に瓶が落ち、がしゃんと音を立ててその場に水をぶちまける。

「貴様！　教団の財産になんてことをしてくれる！」

結果に驚いた監視は裏返った声で喚き、マリアに鞭を振りかぶる。

「え、だって、私、いきなり……」

お尻を触られて驚いて……。

そう言おうとしたが、振るわれた鞭の音に竦んでしまう。

「なんだ、何があった？」

物音に集まる監視達。その原因がマリアであると知り、ごくりと唾を飲む。

これをきっかけに、この女を……。

下心を抱く監視達はいかに自分の手で罰を与えようかと算段している。

「何を言ってるんだ。マリアが運ぶのを邪魔したのはその監視の男だろう。俺は見ていたぞ。階段の上からマリアの胸を盗み見て、す

れ違いざまに知りを触ったのをな！」

そこへやってきたのはヘンリーだった。彼は高らかに宣言し、知りを触った監視の男を指さす。

「な、何を言っていやがる。俺は……俺は……」

しどろもどろになる監視に、別の監視が前に出る。

「同士よ、もしこの奉仕者が言っているのが本当だとすると、貴様は罪を犯したことになるな……」

「なっ、何を……」

「奉仕者、ヘンリーよ、貴様、先ほどの言葉に嘘はないのだな？」

「ええ、俺はこの目で見ていました。水をもらおうと水飲み場に向かいましたところ、マリア……、あの奉仕者の姿が見えず、仕方なく戻ろうとしたところで階下に二人の姿を見たのです。俺は暫く待てば水を飲めると思いこの場で見ておりましたが、その際、この男が奉仕者に劣情を抱き……」

「だ、黙れ黙れ！　同士よ、貴様らこんな奉仕者の言うことを信じるのか？　俺はそんなこと……」

「ふむ。だが、同士がここにいる理由がわからないな。確か同士は神殿上部の監視の担当ではなかったか？　ここにいるということは持ち場を離れているということで、それは神殿建設に滞りを起こしかねない重大な罪……」

雲行きが怪しくなることに、尻を触った監視は油汗をかき始める。というのも、もし罪が認められたら財産の没収と奉仕者へ身分を落すことになる。そして、その財産は他の監視の分け前として再分配されることになっている。

神殿建設の監視など閑職もよいところ。給金も少なく、憂さ晴らしをする場所も無い。せめてもの救いは無駄遣いが減って貯蓄が増えることぐらい。

お金を貯めるということに生きがいを見出す者も居り、監視同士での足の引っ張りあいも起こる。

そして、実のところ、この監視はヘンリーと通じている部分があ

り、素行の悪い監視を糾弾しては小遣いを稼いでいた。
「これは詳しく話しを聞く必要がありますな……」
「ま、待って、待ってくれ……俺は、誤解だ、そんなこと……」
喚く監視と粛々と連れて行く監視達。にやりと笑う監視と、ほっとするヘンリー。
「だが、待ってくれ。この女は我らが教団の財産である水がめを割ってしまったのだ。尻を触られたとはいえ、その罪は免れまい」
すると別の監視がぼそりと呟く。小太りの男はマリアに下卑た一瞥を向けたあと、キョロキョロと周囲を見る。
「いや、尻を触られた程度で水がめを割るなどと、この世に水がめが存在できないだろう」
「うむ、これは十分な罪だろう。別途罰を与えるべきだろう」
マリアを糾弾する声に再び慌てるヘンリー。こればかりは通じている監視も庇いきれないらしく、無表情でいた。
「ま、待ってください。一つ忘れておりました」
「なんだ、まだあるのか？」
「は、はい。本来水がめを運ぶのはこの俺の仕事なのです」
「でまかせを言うな。いつもこの女が運んでいただろう」
マリアに懲罰を与えられると考えていた監視は、それを庇おうとするヘンリーに苛立ちがてら、声を荒げる。
「いえいえ、俺の仕事でした。考えても見てください。女の足で水飲み場から神殿の頂上に重い瓶を運ぶなどと非効率きわまりないでしょう。それに、もし俺がしっかり自分の仕事をしていれば、尻を触られることもなく、水を奉仕者に運ぶことができました。今、奉仕者達が渇きを訴え、効率が下がっているのは、全て俺が仕事を彼女に押し付けてさぼっていたことが原因です」
監視の前にひれ伏すヘンリー。彼がサボっていたことは監視達にも思い当たる節があり、また、生意気な彼に罰を与える口実ができたのは都合が良い。
マリアに関してはまた別の機会にでも難癖をつければよいと、監

視達は意地悪い笑いを浮かべる。
「あいわかった。貴様の罪、しっかりと償ってもらうぞ……」
監視はヘンリーを引き立てると、兵舎へと連れて行く。
「ま、待って……、ヘンリーさん、私……」
当事者に口を挟むことをさせない急な展開に、マリアは困惑する。
罰から逃れられた安堵と、身代わりとなったヘンリー。何故という疑問が浮かぶ頃には、ヘンリーの姿は階下の下、ずっと向こうに消えていった後だった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1676x/

彷徨いし者達

2011年10月19日07時09分発行